

---

# 天と星の英雄・東方仮面録

ダークボール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天と星の英雄・東方仮面録

### 【Nコード】

N 8 2 6 5 M

### 【作者名】

ダークボール

### 【あらすじ】

「天道さんが言っていた。俺は天の川を輝きし星を司る男・・・」

あまのがわ

せいじ

一人の人間として生き続ける青年、天野川 星司。彼は育て親でもある男、「天道総司」に会うために幻想郷へ旅立つのだが、そこは居る筈もない「ワーム」と、謎の巨大組織「スーパージョッカー」に占領された世界だった！

そして今、この危機にそれぞれの英雄と、少女達が此処へ集結する！

40周年記念でタイトルとあらすじを変更しました！これからも  
よろしく願います！

## プロローグ（前書き）

どうもみなさん、作者でございます。

この場でハッキシと言わせてもらいますが・・・

私は東方初心者でございます。

ウィキでググりながら何とかしている方なので、無理だというものは避けておりますし、細かすぎることでやってしまうことがあったりもします。

しかし東方と仮面ライダーとのクロスが人気だというこの流行に乗るにはとこのことで書いてしまった以上、覚悟の上に遠慮なく書かせてもらいます。

あと、この作品は「TINAMIE」という投稿サイトでも掲載しておりますが、本編ではストーリーが大幅に違っており、そちらでのストーリーとこちらのストーリーと見比べればより楽しめると思うことを心より祈っております。

短文なことですが、早速本編へとまいりましょう・・・では、スタート！

## プロローグ

お婆ちゃんが言ってた・・・。

世の中で覚えておかねばならない名前はただ一つ・・・。

天の道を行き、総てを司る男・・・。

てんどう そうじ  
天道総司。

「俺も貴方のような生き方がしたい・・・天の道を歩んでみたい・・・！」

お前なら、なれるさ・・・

名前で言うなら天の川……そうだな、あまのがわ天野川 せいじ星司という  
名でいいだろう……

お前は、天の川に輝きし星を司る男だ……

[illegible]

午後7時。 ZECT本部、訓練場。

「うあっ！！」  
「ぐおっ！！」

酷い痛手を負う青年と30歳の男が突き飛ばされる。

相手にしているのは、二足歩行でなおかつ信じられない速度で動く蜘蛛に、緑色のグロテスクな生き物だ。

このZECTの者は皆、ワームと呼んでいる。

渋谷に落ちた隕石から長い時が経ち、現代の2006年にワームが

渋谷の住民を襲うようになっていた。

それらを守るために結成された組織がZECTだ。

ZECT部隊の隊長、やくもま矢車そう 想は新たな戦力を作り出す『マスク  
ドライダー計画』を立て、現在のように強化人間を特訓させるため  
に捕獲したワームと戦闘を行わせている。

ワームは通常、サナギ体と呼ばれる緑色の姿をした体でいるが、時  
間が経つと脱皮し、成虫体へ姿を変える。この姿になると、通常を  
超える速度で移動が可能となる『クロックアップ』が使用でき、人  
間ではとられることは不可能かつ、なす術なく死に至ることとなっ  
てしまう。

それらを対抗するため、ZECTは2つのゼクターを開発した。

赤いカプトムシ、カプトゼクター。

黄いスズメバチ、ザビーゼクター。

しかしカプトゼクターはZECTではなく、ある男の手にわたった  
ことで運命が変わる。

言うておくと、ゼクターは人を選ぶ。カプトゼクターは太陽に輝く  
男を選び、彼を仮面ライダーカプトへ変身させる力を与えたのだ。  
残っていたザビーゼクターは矢車を選び、現在はこの2人がゼクタ  
ーの資格者としてワームと戦っている。

しかし矢車は、強くなるワームにも対等するためにこうして強化人  
間を作り上げているのだ。当然、相応しい者を新たなゼクターの資  
格者にするつもりだ。

その一方で攻撃が収まると、男が青年へ、擦れた声を出しながら話  
しかける。

「知っているか・・・？ この世界には・・・夢のような、国があ  
るということ・・・俺は最初・・・嘘みだと思っていたが・・・  
・なんだか俺も、行きたくなってきたんだ・・・」

「おじさん、俺達は生きなきゃ駄目なんだ！そんなことしたら死ん

じまう！！」

「キシヤアアアアアッ！！」

またワームがクロックアップで襲ってきた。青年と男は中を舞うように吹き飛ばされ、地面に叩きつけられると同時にブザーが鳴った。『強化サンプル、及びワームを直ちに回収せよ。強化サンプル、及びワームを直ちに回収せよ』

ワームの頭上にネットが張られ、そのネットに電流が走り出した。ワームは隊員であるゼクトルーパーによってすべて捕獲され、青年と男は半殺しされたような傷と絶望を抱えながら息を切らす。

その影から男が寄ってくる。それはZECT部隊シャドウの隊長、矢車だった。

「この男はもう用は無い。放り出せ」

「ハハッ！」

隊員は男の肩を掴む。「さっさと動け！」と男の背中を押し、残されたのはワームの回収を行っている隊員と傷つき疲れ果てている青年、そして矢車であった。

矢車は手を差し伸べて言う。

「おめでとう、お前は50人の中から頂点をもぎ取った。今日からZECTの隊員に任命する」

「ッ！！」

青年は切れた顔で矢車の手をバチンと叩いた。

「ふざけるな！！こんなのは資格を決めるための試験じゃない！！ただ俺達を傷つけ、使えなくなった奴を捨てているだけの残酷な考えだ！！俺は確かにライダーになりたい、あの人にまた会えるんだから俺は嬉しい・・・だけど間違っている！！お前の考えていることは極端すぎる！！ライダーになれたからっていつても、そんなのでは俺は認めない！！」

青年は矢車にありつたけの怒りをぶつけ、最後には彼を素手で殴った。矢車の口元に血が流れる。

もう一発殴ろうとするが隊員が多数で青年の身動きを止め、青年は



離せと体をあちこち動かす。

[illegible]

青年の名は・・・天野川星司。

・・・そう、天道 総司と天野川 星司。似たような2人だがこれは偶然と出会い、星司は天道に憧れて天の道へと歩むということになった。

「天道さん……俺は、どうしたら……」

その時、彼の脳内にある言葉が浮かび上がる。

星司は壁にもたれながら眠りにつこうとしたその時だった。扉から

「な、なんだ……!？」

HENSHIN

「くっ、止まらない……!？」

## CAST

[illegible]

「おのれえ……総員戦闘配備！！牢屋の前で待機せよ！！」

「ハハッ！」

隊員が牢屋へ向かう中、矢車は右手を天井へ翳すとザビーゼクターが飛んできて、矢車は左腕につけているプレスにセットする。  
「変身」

## HENSHIN

矢車はスズメバチ型仮面ライダー、ザビーに変身して隊員の後を追いかける。先に行った隊員はマシンガンブレードを発砲して攻撃するが、星司の纏うアーマーにはぜんぜん効かず、その場から逃げていた。脱出しようと考えており、人気のない地下まで来るとクワガタの尾の部分にあるフルフロツトルを3回連続で押す。

## ONE / TWO / THREE RIDER KICK

角を左に戻しては右へ操作すると、右足にタキオン粒子が貯められる。星司はその足で壁にドロップキックすると見事に大きな穴が開き、そこには夜の景色が見えていた。

今なら抜け出せれると思っていたその時、

「キャストオフ」

## CAST OFF

後ろから飛んできたアーマーを星司は回し蹴りで弾き返す。そこに立つのは構えている隊員と、ザビーに変身する矢車だった。

「そのゼクター、いつから持っていた」

「俺は知らない！勝手に入ってきて、無理矢理俺のベルトに着いただけだ！」

「じゃあ何故だ？そのゼクターはまだ完成してないはずなのに、何

故動けるようになってるんだ。それにそのまま逃けるようじゃZECTの新しい戦闘員が誕生しない、故にもったいないことだ。戻ってくるというのなら殺さずに許してやるう」

「だから言ってるんだ、俺はZECTにはならない！天道さんに会いに行く！！」

## CLOCK UP

星司は右腰のスイッチを押してクロックアップを起動。超高速で離脱するが、矢車も逃がすまいとクロックアップで追跡する。

川原のところまで移動した2人は互いに殴りあった。どちらとも格闘に向いているライダーで、その実力はどちらも互角。カンフー映画でも見ているかのようなアクションもあるが、特に星司はその拳に怒りも込められている。そのせいで無駄も出てしまい、矢車は隙を見切って頭のフルスロットルを押した。

## RIDER STING

「ハッ！！」

ゼクターニードルをガタツクの胸部に突き刺すと火花が散り、星司は苦痛のあまりに地に倒れる。

「耐え切ったか・・・次をくらったらお終いだな」

矢車はゼクターニードルを構え、2つの選択を問いだす。

「選べ。ZECTに戻るか、このまま死ぬかの2つを・・・」

「・・・いや・・・俺はその2つは選ばない・・・」

星司は起き上がり、右手の人差し指を空へ上げる。

「天道さんが言ってた。星は無限の数を持つ、俺はその数だけ強くなれるってな・・・」

「フンッ、何をいまさら・・・！？」

矢車は星司の左腰に出現したカブトムシ型のアイテムを見て目を疑



天道さんは今何処にいるのだろう・・・？

でもそんなので迷ってても、しかたがない・・・

行こう、夢の国へ・・・

## プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

TINAMIでもよろしくお願いただけのようにお願いすれば私も幸いです。

ちなみにですが、作者の名前がこちらの方だと変わっているために後程こちらの名前を変更しますが、本作のタイトル通りに検索すれば出てきますのでこちらもご覧ください。

では次回もお楽しみに・・・

## 第1話「月の兎、そして迫りくる魔手」

涼しい風と輝く星の下には、山に囲まれた景色がある。

幻想郷、それは現代の世界に潜むもう一つの世界。人間と妖怪、鬼や神などといった者達が共に暮らす平和な世界である。

そんな世界の一部に、迷いの竹林と呼ばれる場所ではなにやら騒ぎが起きているようだ。それは2羽の兎が鬼ごっこでもしているのかと思いきや、なにやら怒りながら追いかけている様子である。それにこの兎は実際の動物ではない。2人とも兎の耳をつけた少女で、追いかけている少女は女子学生のようなブレザーとピンクのミニスカートで薄紫色の長い髪をしており名前は『鈴仙・優曇華院・イナバ』と長い名前をしている。追いかけられている少女は背が低く、黒の短髪にピンクのワンピースを着ていて、名前は『因幡てゐ』という。

走っている途中に下へ沈んでいる段差が目の前まで来ると、先頭を走るてゐは体格を活かして兎そのもののようにジャンプし、3メートル弱の距離で飛び越えた。続く鈴仙もジャンプするが着地した瞬間、彼女の足場が崩れ落ちてしまう。落とし穴にはまったらしく、逃げていた少女は振り返りその様子を見て笑った。

「て~~~~ゐ~~~~」

てゐは悪戯好きで、落とし穴を仕掛けるのは彼女にとってのお決まりなことである。そんな話をしているのもつかの間、てゐが潔く逃走しようと走り出した瞬間、

ドンッ

「ミギャッ！」

「うわっと！」

前をよく見ていなかったのか、何かに激突。しかも激突した瞬間に



声が彼女の耳に聞こえた。それはまさに、人間の声で男性の声でもあった。

対するてゐはその反動でしりもちをつき、その後ろから死神のように追いかけてきた少女がてゐの肩を掴む。てゐの背筋に寒気が走りだす。

「ひいっ！ 鈴仙、ちよつとまってよ！」

この様子はライオンに食われかけている動物と同じことだ。てゐはまさしく、その状況でお仕置きされかけているのである。すると、

「ちよつと待ってくれ」

「？」

鈴仙と名乗る少女の怒りは突然のごとくに停止した。顔を見上げてその声の主を見るが、その正体は矢車から逃げてきた青年、天野川星司だった。余談なことであるが、2人は彼が何者なのかはまだ知らない。

「この子とぶつかったのは、俺が余所見をしていたせいなんだ。てつきりこの竹林の景色を眺めていたから気づかずに歩いているところになってしまつてね、怪我はないかい？」

「う、うん・・・」

星司はてゐの頭を撫でる。しかし実のことを言うと、今の話は全くの嘘で、てゐが誤って星司にぶつかってしまったことの誤解を解こうとしているのだ。

しかしそれだけで鈴仙の怒りは収まらない。

「けどそれはそれ、これはこれよ。毎回いろんなことをしてて、また私に落とし穴を・・・」

「この子が何かしたのか？」

まだ落とし穴を仕掛けたことが残っており、星司の嘘発言ではなかなか通用はしなさそうである。そこで星司は鈴仙に先程の出来事を聞いてみることにした。

「その子は悪戯ばかりして、さっきも落とし穴で私を落としたのよ」

「なるほど・・・それでいいんじゃないのか？」

「・・・はあっ！？」

予想もしないことが発生した。なんと星司は断言してしまったのだ。  
「どういうことよ！貴方、てゐが私にどれだけ悪戯な子か」「それが人間やその他の動物での普通の生き方だ」

星司の発言で少女は息を殺した。馬鹿ばかりいっただらありやしないことであるが星司は平気でいっている。

「人間は正しいことだけが普通ではない、善と悪はいつも背中合わせで、ときに悪戯することで動物のバランスを取っている。まるで天秤のようにな・・・」

「・・・貴方、誰なの・・・？」

もうわけが分からないが、鈴仙は彼が何者なのかを問い詰める。星司は人差し指を輝く星の空に上げた。

「天道さんが言っていた。天の川に輝きし星を司る男、天野川 星司・・・」

星の下でその正体を知る2人。けど鈴仙にはやはりふざけているとして言いようがなかった。星司は自己紹介を終えると、てゐの方に顔を向ける。

「だが彼女の言うことも正しい。悪戯ばかりする子は、天秤が崩れてしまうことを忘れてほしい。約束できるな？」

「・・・分かった。もう悪戯はしないことにする・・・」

「それでいい・・・そりよりも君、」

星司は鈴仙に顔を向けた。

「どうしても一発殴らせるとのつもりでいるなら、俺を殴れ。それで気が済むならはよしだ」

そんな無茶なことまでするのかと思うが、星司の目は真剣だった。まさに英雄の塊である。

「貴方、どうしててゐをそこまで庇うの？」

「俺がこうしているのは。俺はこの子にやってはいけないことを教えているだけだ、さっき約束したようにな」



強固な体には通用せず、拳から血が滲み出る。ならば蹴りでと試みるが、びくともしないうえにパンチ一発で吹き飛ばされてしまう。

「お前達、殺れ」

「！！ やめろっ！！」

止めようとするが、すでにサナギワームはてゐと鈴仙を囲んでいて、じりじりと近寄る。もう駄目だと2人は目を瞑った次の瞬間に青いクワガタがサナギワームを攻撃した。

2人は何が起こしたのかと周りを見るが、ザブストワームはその正体がわかっていて。

「・・・ガタツクゼクター・・・！」

青いクワガタの正体は昆虫メカ、ガタツクゼクターでそのまま起き上がっていた星司の右手にわたる。

（これって、牢屋から入ってきたゼクター、だよな・・・）  
ガタツクゼクターがやったようにすれば戦えるはず・・・ならばもう一度変身しようと2人に近寄った。

「2人共、大丈夫か!？」

「こ、怖かった・・・」

無事のようにだがてゐは泣きそうになっている。

「いいかい?そこから絶対に動くんじゃないよ?」

「もしかしてあの虫と戦うの!?!?そんなの無茶よ!大体あなたは人間だし、そのクワガタで何が・・・!」

「言われてみればそうだろうな・・・だけど天道さんは言ってたんだ。人間は弱い力の代わり、強い知性を持つ。人間に望むことがあるのなら、やがてその力は大きくなるだろうってな・・・心配はない、俺を・・・仮面ライダーガタツクを信じるんだ!」

鈴仙に見せていた顔はすさまじかった。怒っているのでもないその顔は絶対の文字を浮かべていて、今にも押しつぶされそうな感じである。その時サナギワームが一斉に星司に飛び掛かり、爪をかわしながらガタツクゼクターをベルトへセットする。

「変身!」

## HENSHIN

星司の体がみると鎧に包まれ、ガタツクへと変身した。その瞬間を見ていた2人も思わず驚く。

サナギワームはまたもや襲い掛かるが、今度の星司は自らの拳で迎え撃った。

「ギチツ!? ギギギ・・・!」

その威力は5体のワームを押し返すほどである。このチャンスに両肩のガタツクバルカンが火を噴き、サナギワームを一斉に消去してザブストワームの方向に向く。

「貴様・・・邪魔をするな!」

「そうはいかない。男はやってはいけないことが2つあるからな。それは・・・」

ゼクターホーンをつかんで右へと折り曲げる。

「女の子を泣かしてはいけないことだ。キャストオフ!」

## CAST OFF

## CHANGE STAG BEETLE

弾け飛んだ鎧をザブストワームが吹っ飛ばされ、ガタツクはクワガタの姿をしたライダーフォームにへと姿を変える。星司は追い打ちを仕掛けようとクロツクアップでザブストワームの背後へと回った。

## ONE , TWO , THREE

「ライダーキック!!」

## RIDER KICK

ガタツクゼクターを操作してエネルギーをチャージし、痛快な回し蹴りを叩き込んだ。

ザブストワームは竹をなぎ倒すように奥へと飛ばされ、体に電流が流れ出る。

「グアアッ！・・・お、おのれ・・・仮面・・・ライダーアアアアアッ！！！！！」

直後に爆発した。サブストワームが消滅したことを確認した星司はガタツクゼクターを引き抜いて元の姿に戻り、2人に近寄った。

「・・・これでもう大丈夫だ。怪我はないか？」

「うん・・・」

星司はてゐの頭を撫でて微笑みを見せる。それは彼女達が出会ったときと同じ、優しく、朗らかな笑顔で見つめていて、てゐはすでに泣き止んでいた。

だが星司は思う・・・

（・・・それよりも何故、こんな場所にワームが・・・。。それに・・・）

ザブストワームが言っていたあの言葉をもう一度思い浮かべる。

『仮面ライダー、まさかこの世界にもいたとは想定外だが、我々の計画の邪魔だ』

（計画って何のことなんだ・・・？何かとてつもない予感が・・・）危険を感じていた星司だが、これからどう行動するかを考える。星司から思えば、ここは夢の国だとは思っているけど何処に行こうかという悩んだ。まずはこの竹林を抜け出そうとしても、方向が分からなくては出られることは不可能だろう。

「あの、」

その時に鈴仙が話しかけたきた。

「助けてくれたお礼がしたいので、永遠亭に来てくれませんか？」

「永遠亭？」

「私達のいる家みたいなところだよ！」

どうやら彼女の家に行ってももらえるらしい。

「よく見たら怪我もしているみたいですから、師匠に見てもらったほうがいいかと」

手当てということは、おそらくその場所は病院か何かだろうと予想した星司は行くことに決める。そもそもここから出られる方法なんてあまりないし、訓練やサビーによって受けた怪我を何とかしなければならぬ。

「その場所に案内してくれ、胸のほうもさつきからズキズキ痛んでいるからな」

2人は頷き、星司を連れながら永遠亭へ向かう。

[illegible]

同刻、綺麗な満月が照らされている紅い館、こうまかん紅魔館にてワームが襲撃していた。

館の門番を務める妖怪、紅ほん美鈴めいりんは侵入を塞ごうと持ち前の体術で応戦するのだが、彼女は今、緊急事態に陥っていた。

「いったい何起きてるんですか・・・！スペルカードが急に使用できなくなって、弾幕でも威力があまりないなんて・・・！」

スペルカードとは少女達が弾幕ごっこで使用する特技で、彼女もスペルカードの所有者だ。ところがワームの大量襲撃に使うつもりだった筈が、なんと使用不可能という窮地に美鈴は体術と弾幕で応戦する。しかし埒が明かず、このまま侵入されるのも時間の問題というそんなピンチな時だった。空から弾幕が放たれてワームが後退。

見上げればそこには、女の子が宙に浮いているではないか。

ピンクの服装、水色の髪、真紅の瞳、そして何より、少女の背中には蝙蝠の翼が生えている。

彼女は吸血鬼。

永遠に紅い幼き月、その名もレミリア・スカーレットだ。

レミリアは地上へ降り、身構えているワームをじっと見つめる。

「お嬢様！ここは危険ですから下がって・・・」

「いいえ。下がるのは中国、貴方よ」

レミリアが指をパチンと鳴らすと、その後ろにメイドが現れた。

青い瞳と銀色の髪をした女性は、十六夜<sup>いそよ</sup> 咲夜<sup>さくや</sup>。主であるレミリアに使えるメイド長だ。

そして咲夜が持つアタッシュケースから、ベルト、カメラ、双眼鏡、改造銃と、電化製品なものがベルトとセットでレミリアに装着される。最後に携帯電話を彼女に渡した。

「お気をつけて」

「ええ、」

携帯電話を開き、テンキーに「9」、「1」、「3」と入力して「ENTER」を押す。

STANDING BY

「変身・・・」

COMPLETE



ベルトにセットすると黄色のフォトンストリームがレミリアを包み、黒いボディと紫の目をしたライダー、カイザへと変身。携帯電話に付属しているミッションメモリーを引き抜き、右腰のカイザブレイガンにセットするとエネルギーブレードへと変形する。

「こんなに月も紅いから、本気で殺すわよ」

ワームが直後に突撃を開始。携帯電話を開き、「ENTER」を押した。

EXCEED CHARGE

ブレードの光が増し、レミリアも迎え撃つように走り始め、ワームを次々と切り裂いていった。切り裂かれたワームは爆発し、軍団をあっという間に全滅させてしまう。

「……………」

緑の炎の中でカイザに変身するレミリアが咲夜、そして美鈴の元へと戻ってきた瞬間に彼女は振り返り、ガイザブレイガンを振るった。

ブンッ

しかし結果は空振り、その代わりに3人は正体を目の当たりにする。

黄金の体、真紅の瞳、それは人間ではなく戦士の姿だ。

「こんなところにネズミが残っていたのかしら？」

レミリアは携帯電話を開いてエクシードチャージをしようとしていたが、戦士は3人に言った。

「・・・王に会え」

「？」

レミリアは手を止めた。

「これは破滅の予兆を現している。世界が消えなくては・・・世界を食い止めたければ、王の力を借りる必要がある・・・」

戦士が発言した予兆。それを聞いたレミリアは携帯電話の「切」を押して変身を解く。

「破滅の予兆・・・それが王にどういう関係があるというの？」

「この事情を今から説明する、中で話そう」

戦士は突如光だし、男の人間の姿へと戻った。男性は門のもとへと向かうが、レミリアの横を通り過ぎる時にレミリアは問いかけた。

「貴方、名前は・・・？」

「・・・仮面ライダーアギト・・・」

その戦士、アギトは門の中へと入っていった。

## 第1話「月の兎、そして迫りくる魔手」(後書き)

どうも作者です。

ようやく第1話を作り上げましたが遅くなって申し訳ありません。前書きでお詫び申し上げることをここに記しておきます。

さて、今回は永遠亭サイドへと変わっておりますが、この理由につきましては「月」と「星」ということ(ただそれだけ!?)で決めました。

そしてもう一つ、紅魔館でカイザに変身するレミリアも登場させしました。カイザにはダークフォースがあるということで彼女にあらかなあと思ってみたところ、予想通りな感じになりました。

ちなみにアギトのことですが、このアギトは原作キャラではなく、「アギト」という名前の仮面ライダーアギトなのでご注意ください。そして最後に、アギトが発言した「王」とは何なのか・・・? 皆さんはお分かりですね?

ヒントはもちろん、あの蝙蝠だ!!

それでは次回もお会いしましょう。

## 第2話「永遠亭、そして宝探しゲーム」

永遠亭にやってきた星司はその建物を見て考え事をしていた。病院  
だろうかと思っていたのだがそんなのではなく、屋敷である。そう  
思うと門の奥へ入っていく2人の後に続く。

「師匠、今戻りました！」

玄関の前で鈴仙が声を掛けると、ナース帽を被り、赤と青の服を着  
ている女性が面に出てきた。この人が鈴仙の師匠で、医者というこ  
となのだろう。

「2人共おかえり。もうすぐ夕飯にするから手を洗ってきてちょう  
だい」

おまけにタイミングよく夕飯もいただけそうだ。すると女性が星司  
に気づいて問いかける。

「そこにいる人は誰なの？」

「見たことない妖怪が現れて助けてくれた人です。名前は……」

「星司です。ついとして怪我の手当てをお願いしてもらいに来ま  
した」

「そう……じゃあウドンゲ、代わりに手当てをお願いします」

女性はすぐに台所へ戻っていった。星司の分も作ってくれそうで、  
大体の話を理解してくれる人だ。

「あの人が君の？」

「はい、薬の開発が得意な薬師なんです」

早速あがって手を洗い、星司を救護室に案内した。服を脱いでその  
様子を見る鈴仙とてゐは思わず引きそうな顔でいる。そこには殴ら  
れた跡が体中にあり、胸には痣がくつきりと見えている。

「喧嘩でもしていたんですか？」

「それよりも酷いことだよ（本当は痛めつけられていたなんて言え  
ないけど……）」

消毒液を傷跡に2回ほどつけて手当てをする鈴仙を見て、星司は染

みてくる痛みよりも彼女が治してくれる優しさが星司を落ち着かせていた。胸の痣も包帯で優しく包み込むように撒かれ、手当ては完了する。

「ありがとう。一応あの人は泊めてくれそうな顔もしてたから安心したよ」

この場所以外に泊めてもらえる場所なんてあるわけがないと思っている星司は、明日に備えて体をゆつくり休ませようと考えた。

リビングのほうからは「夕飯ができたわよ」と声が聞こえ、星司達はリビングへ向かうといい匂いがするカレーが食卓に置かれていた。先ほど会った女性以外に黒く長い髪をした少女も座っており、カードをじつと眺めている。

「よく見れば俺の分も作ってくれたのですか。どうもすみません」  
永遠亭の家族構成は4人とされており、そこにもう1皿カレーが置かれていた。紛れもない星司の分であった。

「妖怪を追い払ってくれたお礼よ。私は薬師の八意 永琳、こちらにいるのはこの屋敷の主の輝夜様です」

カードを眺めていた少女も星司の顔を見て自己紹介した。

「蓬萊山 輝夜。真正銘のかぐや姫よ」

なんだかカード以外に眼中にない様子だったが、彼女の名前を聞いた星司は「えっ」と驚く。

「かぐや姫って確か・・・昔話のお姫様ですよ？本物なんですか？」

「だったらどうなの？」

「そりや凄いですよ。でも、最後は月へ帰るんじゃない・・・」

かぐや姫の生活を物語る『竹取物語』は日本中の誰もが知っているお話だ。しかし彼女は本物だというのに月に帰っていないというありえない事実は物語に存在しない。一体何故なのだろうか・・・？その理由を輝夜が言った。

「事情を言つと難しくなるけど、私は月に帰るのを断って幻想郷に来たのよ」

「幻想郷・・・」

理由を聞いた直後にまたもや謎が生まれた。幻想郷という言葉に疑問を抱く。

「ここは人と妖怪が暮らす、いわゆる異世界よ。忘れ去られた人間たちがこの世界に来て暮らすことがあるの」

永琳が説明をしてくれたおかげで星司は納得する。

「なるほど・・・夢の国ってだけはたしかにあるようですね」

「夢の国？」

今度は星司以外の者が疑問を抱いた。

「俺は現実世界で痛めつけられて逃げてきたんです。着いた場所が竹林の中で、歩いているとその2人と出会ったわけで」

「それで知り合ったのね・・・」

「その事情はどうでもいいけど、早く食べないの？冷めるわよ？」

「そうね。それじゃあ冷めないうちにいただこうかしら」

「いただきます」

お客だというのに、なんだか家族になったかのような感じになる星司はカレーをいただく。星司は一人暮らしをしているのでカレーを自分で作るのは日常茶番事だけど、時に別の人の作る料理をいただくのにも楽しめる味がある。そういうのを星司は心の中で思い、次の言葉が彼の口から出てきた。

「あの、すみません・・・俺をここで暮らしてもらえませんか？」

永琳の持つスプーンの動きがその言葉によって止まる。

「いきなりこんなこと言っただけですけど、この竹林から出られる方法なんてない筈です。それに俺は、ここにいないかならない理由が2つあります」

「理由・・・？」

星司はスプーンをおき、覚悟を決めたかのような目でみんなに言った。

「まず1つは、この世界にワームという生命体が出現しました」

「私とてゐを襲った妖怪ですね？」

その質問に星司は頷き、話を続ける。

「ワームはその人と同じ姿、記憶をコピーする擬態能力を持ち、これを利用しながら関わりのある人を殺して次々と人間をワームに変えていきます」

「見分ける方法はどうなの？」

「残念ながらありません。化けの皮を剥がすのも非常に困難なことですから……」

「そう……じゃあ、もう1つは？」

「これは逆に、ワームと対抗するための方法です。俺が仮面ライダーとして、貴方達をお守りすることです」

「仮面ライダーって、星司が戦っていたあの？」

「そう、あれが仮面ライダー。名前はガタックと言い、複数のワームにも匹敵する戦闘能力を持ちます」

「けど私達だつて外の世界にいる人間みたいなものじゃいわ。さつとやれば……」

「けど輝夜さん、相手はあなたの予想を覆すほど強い敵なんです」

「どういうこと？」

「ワームには超高速で移動する能力『クロックアップ』を持ちます。これは成虫体のみですが、人間の1万倍の速度で動き回れるんです」

「つまり、目では見えないほどの？」

「はい、肉眼では普通に捉えられません。けどガタックには、それを見ることができるスキャンアイや、ワームと同じクロックアップが可能です。これを使ってすばやく動き回るワームと戦います」

理由を話し終え、永琳は大体の事象を理解する。

「……分かったわ。けど、ワームはここにくるとは限らないわよ？」



「分かってます。おそらくは世界中に・・・」

約束はされたが世界中に潜むワームを排除しなくてはならない。星司1人だけで戦っても少ない被害にしたいと願うのが彼の今後のやるべきことで、拳にその気合と集中を込めた。

その後に星司はこの世界のことを永琳から教えてくれた。幻想郷のいたるべきところ、人と妖怪のこと、さらには弾幕ごっここのことも星司に教える。

「なんだか不思議ですね、特に皆さんは空を飛べるっていうのが驚きです」

「フフツ、そう思ってくれるなら嬉しいわ。それと、まだ彼女達の名前を聞いてないわよね？」

そういえばと星司は思いついた。鈴仙とてゐって名前を少しだけは聞いているが、一応聞こうと尋ねてみる。

「鈴仙・優曇華院・イナバ。鈴仙でいいわよ」

「私は因幡 てゐ、よろしく」

「うん、よろしく」

星司はこの4人に歓迎された。彼も永遠亭の家族として認められた証拠である。

残っているカレーを食べ終わると台所に持って入りながら洗い流す。彼は独り暮らしをしているので皿洗いをするのも当たり前のことだ。

「星司、よかったら私の部屋に来てもいいよ」

「おつ、ありがとう」

洗い終えた星司はまたリビングに戻ると、また輝夜がカードを眺めている様子があった。

「輝夜さん、さっきから気になっていたんですけどそれは？」

「これね、夕方に郵便で届いてきたのよ。誰からかは書かれてなかったけど、中身にあったのはこのケースとカードだけだわ」

ケースは片手で握れるくらいの大きさで、蝙蝠のマークがついていた。カートのほうは、剣や盾、蝙蝠の怪物の絵や、同じマークをしたカードがある。

「何かのパワーアップとかではないですか？」

「私も相談してみたらそう思っていたわ。きっと何かに使うためのカードよ」

話の中にはスペルカードというもので攻撃することが出来るらしいが、このカードはそうでもないものだった。カードはとりあえずケースに入れ輝夜の懷に閉まった。

「それとだけと星司君、お風呂はあっちにあるからゆっくりしていつてちょうだい」

「はい、ありがとうございます」

星司は言葉に甘えて風呂場へ向かい。服を脱いで中へと入ると、そこは眺めの良い木製の風呂場があった。夜空には綺麗な満月があり、星司は傷が少ない足だけを湯につかせて月を見つめる。

「・・・・・・・・」

ふと星司は空を眺めて思った。こんなに優しくしてくれたのは、あの時以来だ。

天道総司と出会ったときのような優しい感じが星司の体で蘇る。

また、幻想郷のことを説明している途中、永琳から星司にある女性からの言葉を聞いていた。

『幻想郷は全てを受け入れる。それはとても残酷なことですよ』

（忘れ去られた人達・・・それを全て受け入れるのが幻想郷・・・確かに俺は嬉しい。けど・・・）

幸せなのは星司にとって嬉しいことであるが、それとは違って不安が過る。

星司は天道に会いたい気持ちでガタツクとなっている故、この世界に天道なんているはずがない。それは少しだけ寂しい思いでもあった。

（天道さん・・・俺は・・・）

「星司君？」

その時に星司はハッと我に返った。永琳の声が戸の奥から聞こえてくる。

「返事がしないと思って心配したわ。大丈夫？」

「す、すみません、大丈夫ですよ。それより何ですか？」

「ええ。湯加減はどうかと・・・」

「全然良いですよ。疲れが取れてもう最高！」

「そう、それならよかったわ。替えの服を用意しているから、あがるときに着てちょうだい」

「は、はい！」

星司は風呂から上がることにし、籠にあった替えの服を着てみる。それは星司にはよく似合う藍色の浴衣で、来てみた彼自身も気に入って風呂場から後にする。

そんな彼がやってきたのは、台所で約束していたてゐの部屋である。ところが部屋の戸をガラリと開けた瞬間、星司の前に何人ものてゐ（に見えるけど違う少女）が飛び出てきた。

「うわっ！？」

数えて6人はいるようすで、星司は尻餅をついて少女達に戯れてしまふ。そこへまた少女が出てきた。

「あー、ごめん。大丈夫？」

今度は本物のてゐだった。

「てゐ・・・この子達は一体何なんだ？てゐにそっくりな子がいっぱいいるけど・・・」

「実はね、永遠亭で住んでいるのは私達を含めた4人だけじゃなく、妖怪兎達もここで生活しているわけよ」

「妖怪兎・・・けどみんな可愛いね。こういうのは俺も嫌いじゃないよ」

星司は立ち上がり、兎達と遊ぶことにする。

「てゐ、せっかく来てあげたのはいいいけど、どう遊ぶつもりだい？」

「うん・・・考えてない・・・」

「・・・プツ。ハハハッ」

ふと星司は笑い出す。

「な、何よ！何が可笑しいの！？」

「ハハハッ、違ふよ。てゐはちゃんちやなところがあるら、そうなるだろうとは思ってたんだ。けど心配ないよ、俺がちゃんと考えている」  
「そういうとガタツクゼクターが現れ、星司はそれをキャッチする。」

「このガタツクゼクターを誰が捕まえれるかの競争。すなわち宝探しゲームをやるうと思ってるんだけど、どう？」

聞いていた兎達、そしててゐはその意見に乗る。そう決まればと星司達は外へと出て、ガタツクゼクターを飛ばす。動き回る宝探しゲームが始まった。

ワ〜ワ〜と走り出す兎達の姿を後ろから見て、星司もゲームに参加するつもりで追いかける。

そっちに行つた。と合図をする者もいて、兎達はバラバラに動くどころか団結するという別の意味でのが起きていた。でもこれで楽しめるならそれでいいと星司はそう思う。

その一方で1人の兎がガタツクゼクターに食いつき、見失うまいと追いかける。

ところが、ガタツクゼクターが直角で曲がつたせいでコースを外し、兎は勢い余って前方の何かにぶつかる。

「！！！」

それを見た兎はビクツと怯えてしまった。彼女の目に見えているのは太い竹でも何でも無い。

それは鬼の姿をした怪人だったから・・・

アギトの世界に存在する怪人、<sup>アンノウン</sup>雷のエルだったから・・・

「あうう・・・」

雷のエルはじりじりと近づいていく。逃げようとしても怖くて動けない。すると雷のエルの口から声が出てくる。

「才前ハコノ世二存在シテハナラナイ者・・・ヨツテ我ガ神罰ヲ下ソウ」

「あううっ!!」

首をつかみ、徐々に力を入れていく雷のエル。絞殺されてしまいそうだったその時、ガタツクゼクターが雷のエルに攻撃をして手を放し、地面へ落ちそうになった兎を星司が滑り込みで受け止める。

「大丈夫か!？」

「う・・・うえええ・・・」

兎はもう駄目かと泣いていた。星司はしっかりと抱きながら逃げようとしますが、雷のエルは行く手の先に電気を放出して妨害を行う。(戦うしかない・・・だけどそうしたらこの子が巻き込まれる可能性も・・・)

だが星司に考えさせる時間は一秒も与えてはくれなかった。雷のエルは星司に近寄る。

「・・・大丈夫だ。俺が絶対に守ってやるからな」

頷くと星司から降りて陰に隠れる。星司は飛んできたガタツクゼクターを手に叫んだ。

「変身!!」

H E N S H I N

「うおおおおおおお!!!」  
ガタツクへと変身し、星司はバルカンを雷のエルへ放った。

## 第2話「永遠亭、そして宝探しゲーム」（後書き）

お待たせしました、第2話です。

星司は幼女に弱そうなキャラですけど決してロリコンではありません。幼女想いな優しい青年だということなのでよろしくお願いします。

そしてまさかのアンノウンが出現です。

このアンノウンは本作では登場していないオリジナルで、エルロード最強のアンノウンと設定しています。

はたして星司はこの強敵に打ち勝てるのか！？次回を待て！！

### 第3話「夢、そして紅いライダー」

ダダダダダダダッ！！！！

ガタツクバルカンは雷のエルに向けて火を噴き、直後に雷のエルの前で爆発が発生する。

倒した爆発なのか・・・と思っている星司だが、それでも星司は攻撃を止めずにひたすら打ち続けてる。

だがそれでも星司には、信じられない光景が目当たりになってしまう。

「ソノ程度ノ攻撃ナド、我ニハ通用センゾ・・・」

雷のエルはバリアを張っており、ガタツクバルカンの弾を全て弾いているのだ。これは強敵だと星司は砲撃を止め、肉弾戦で勝負を挑もうと相手へ突っ込んでいく。

「無駄ダ・・・」

すると雷のエルは自分のいた場所から消えてしまい、目の前に現れて星司の首を掴んだ。

「！？」

「死ネ・・・！！」

雷のエルは放電を開始した。

「うああああああああああっ！！！！！！」

もがき苦しむ星司。流れている電流はおよそ1千万ボルトもあり、このままでは星司は感電死になりかねないことになってしまう。

「人間ヨ・・・貴様ハ神ノ規則デアル、『人以上ノチカラヲ得テハ



イケナイ』コトヲ破ツタノダ。ヨツテ、我ガコノ場ニテ死刑ニシテクレヨウ!!」

電流を更に強め、星司の体力を根こそぎ奪っていく雷のエル。だがその時、星司はクワツとくる気迫を出してゼクターホーンを掴んだ。「今だ!! キャストオフ!!」

C A S T   O F F

それを待っていたかのようにガタツクのアーマーが弾け飛び、その衝撃で雷のエルも吹き飛ばされてしまう。

「チャンスは一度だけ・・・クロックアップ!!」

C L O O K   U P

キャストオフしてからも気を緩めず、星司はクロックアップで雷のエルへ突っ走り始めた。これはすべて星司の考えで、電流を食らうところからすでに作戦が進められて何とかここまで持ち越せたのである。

あとは必殺技を叩き込むだけである。これ以外にチャンスはないのだから、この一発に星司の右指がフルスロットルへ押される。

O N E , T W O , T H R E E

R I D E R   K I C K

チャージが開始され、一気に右足に収着したところを星司は飛び蹴りの構えで突っ込んでいく。

ところが・・・

シュンッ

(!?)

「遅イ！」

直撃寸前に雷のエルは星司の背後へと移動した。

不覚だ。まさかライダーシステムを超えるほどの強敵と出くわしてしまい、この有様となった己に後悔をしてしまう……。そんな星司に容赦しない雷のエルは、星司の背中へ電撃を浴びさせようと手を出した。

「遅いのは・・・お前だ！」

「何ッ!？」

雷のエルが電撃を放出した次の瞬間に星司は目の前から姿を消してしまい、電撃は目の前の地面に当たった。

「何ダ・・・今何が起キタ!? 何故人が消エタ!？」

「消えたんじゃない・・・速くなっただ」

雷のエルの後ろに星司の声が聞こえて振り向く。するとそこにいるのは、先程のガタツクとは違って大きなクワガタのアゴ、強化された鎧をしたハイパーガタツクの姿があったのだ。

・・・お分かりいただけだろう、先程消えた正体はハイパークロックアップによる高速移動だったのだ。

「俺の速さは流星よりも速い。その程度の速さなんかと比べても、この世で俺に追いつけるものはただ一人、天道さんだけだ・・・！」

「黙レ!!!」

電撃を放つが、星司はハイパークロックアップで回避しながら雷のエルの前までやってくると、ガタツクダブルカリバーを缺のように組み立て、雷のエルを挟んだ。

RIDER CUTTING

「又オオツ!？」

「うおおおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!」

ギリギリギリギリギリギリッ!!

だんだんと力を入れていき、星司はトドメの一息を全身から込めて叫んだ。

「うおりゃああああああああああああああっ!!!!!!」

ガチンッ!!

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!

挟み切られた雷のエルは爆発。その拍子に隠れていた兎は爆風に煽られながら転がってしまふ。

爆発が止んだ時には周りの丈が焼けており、その中心には変身を解いている星司が立っていた。

「ハア・・・ハア・・・ウツ・・・」

だがかなり疲れている様子で、やがて彼の意識は地面へと吸い込まれるように消えてしまふ。

[illegible]

F  
H  
H  
H  
H  
H  
H  
H  
.

暗い闇の中、どこから笑い声が聞こえてくる。

「……誰だ……そこにいるのは誰だ……！」

・ ・ ・ セイジ ・ ・ ・ セイジ ・ ・ ・ ・ ・ !

不気味な声が星司に話しかける。すると今度は、鉄製の足音が聞こえてきた。

カキンツ、カキンツ、と近づいてくる足音の方向を振り向くと、そこには銀色の人間・・・否、仮面ライダーに見えるような者が立っていた。

「お前は・・・何者だ！」

「・・・俺はシャドームーン・・・お前と同じ——だ」

（・・・？ 何を言ってるんだ？）

何故か一部だけが聞き取れず、星司は立ったままでしかいらなかった。シャドームーンと名乗る者は自らの変身を解いて人間に戻る。すると信じられない光景が星司の目に飛び込んできたのだ。

「もう1人の・・・俺・・・」

それは星司そっくりの人間だったのだ。

「さあ・・・その身を捧げよ・・・！」

もう一人の星司はシャドームーンに変身し、星司に襲い掛かってくる。その時にハツと目が覚めると、星司は永遠亭の病室の中にいるではないか。

「・・・今のは・・・夢・・・？」

「星司！」

真横から星司に強い力が入ってくる。それはてゐが飛びついてきた証拠で、星司は堪えながら抱き付いてきたてゐを支える。

「てゐ、お前・・・」

「よかった・・・星司が無事でよかった・・・」

（！）そうか、俺はあの化け物を倒して気絶したのか・・・今まで何をしていたのかを理解し、てゐに抱き返した。

「ごめん・・・俺がこんな遊びをしてなかったら、あの子は・・・」  
そう誤っていると、先程襲われていた兎と永琳がやってくる。

「八意さん・・・」

「話は聞かせてもらったわ。この子が襲われていたんですって？」

「すみません・・・俺のせいで・・・」

落ち込む星司だが、それをてゐは体を張って永琳に言う。

「星司は悪くないよ！遊びたかったのは私なんだし、夜中にやろうとしてた私が馬鹿だったから・・・だから・・・」

兎も星司は悪くないと責める。

「・・・心配ないわ。私は決して怒っているつもりなんてないわよ」  
永琳は星司を宥めるように応えた。

「それに、貴方は守ろうとするのは当たり前なこと。貴方は私達に約束してくれたことをしていたのよ。それでいいわ」

「は、はい・・・八意さんってなんだが不思議ですね。母さんみたいで優しくて・・・」

「あら、そうかしら？」

星司はコクツと頷く。

「記憶なんてないですけど、子守唄をよく聞いて眠っていた気がするんです。自分がこの世にいられるのは母さんのおかげだって教えられたりもしましたし・・・」

「母親ねえ・・・貴方には親っているのかしら？」

「・・・ごめんなさい。分からないんです。両親がいるのかいないのかは・・・」

「そう・・・」

聞いて悪かったかもしれない話に永琳は話すことを控えることにした。

「星司、怪我の手当ては終わっているから、今日はゆっくり休んでちょうだい」

「はい、どうもすみません」

永琳は病室の電気を消してその場から去り、星司はベッドの上で仰向けに倒れる。

（・・・あの夢・・・一体何なんだろう・・・？）

星司は先程見た夢を思い出す。

途切れた言葉。

全く謎だ。

（シャドームーンの言っていた”お前と同じ”って、どういこと  
あしつ  
だろう・・・俺は、何か関係があるのだろうか・・・）

考えるが全く分からず、星司は寝ることにした。すると、

「星司」

「ん？なんだ、てゐ……」

ふと気づくと、てゐとさっきの兎が星司のベッドに入り込んできたのだ。

「わあ、あつたかい／＼」

「うっ／＼」

「・・・おいで、2人共」

星司は2人を誘って星司の体に寄り付き、心地よい眠りにつく。

今度は3人で楽しい夢を見るために……。

[illegible]

空は満月の月が見える。だがその下に見えるのは幻想郷ではなく、都会の街・・・すなわち現実世界の風景だ。

その月の傍には空を飛ぶ城・・・いや、なんだか龍と合体したような城が空を飛び、その頂に1人の者がいる。

赤い姿、銀色の鎧、蝙蝠のような目。

そして腰の中心には金色の蝙蝠がぶら下がっている。

「英次、今夜の満月もいいねえ」  
「確かにキバット。王である俺がこの世にいるから、月が綺麗なんだ・・・」

その者は<sup>ことは えいじ</sup>琴芭英次、そしてパートナーのキバットバット？世。



またの名を仮面ライダーキバと呼ぶ。

### 第3話「夢、そして紅いライダー」(後書き)

第3話でした。それにしても永琳はお美しい方なのにこんな優しい人で感謝します。何せ使いやすさがあっていいのですから！

かといって本当に母親だと思っっているわけではないし、てゐを本当に妹と思っっているわけでもない・・・けどこのベッドシーンじゃまさしくロリく(ry

更にここで耳寄り情報、仮面ライダーキバの活躍を別連載の「仮面ライダーキバ」始まりを告げる鎖」で見ることができます。これで英次の王となる始まりのストーリーを体感してください。

ではみなさん、ごきげんよう！

第4話「現代入り・フランドール」スカーレット」

改めて、幻想郷の夜。夜になれば幻も映りだすといわれている危険な森、魔法の森では藍色のジャンパーを着ている男性がよろよろと歩いていった。この森は化け茸の胞子によって、慣れない者は死に至ることがあるのだ。男性にはその死がだんだんと近づいており、ついには太目の木に腰を掛けてしまうほどに弱まってしまふ。

「駄目だ……まだ俺は……こんなところで……」

男性は諦めてはいなかったが、体は言うことを聞かずに彼の命の灯が消えようとしていた。

だがその時、その前に誰かが近づいてくるのを感じ取った。目は霞んでよく見えないが、黒い服を着た幼い子……そして彼の目蓋はゆっくりと閉ざれようとした。

(橘さん……睦月……ハジ……メ……)

男性は最後に言い残し、とうとう力尽きてしまう。

その子、金色の髪をする少女は彼の疲れた顔をじつと見つめると、次ぎに彼の右手を掴むと少女の後ろに闇が現れ、彼を道連れに引きずりこまれていった。

[illegible]

現実世界の朝では普通に家から出て、普通に通勤し、普通に学校や

会社に向かう。

そんなとあるビルに潜めている城、キャッスルドランにも朝がやってきた。豪華な部屋にあるベッドで眠る青年、琴芭英次は窓から溢れる光から逃げようと布団に蹲る。

「おい英次！いい加減に起きろ！」

「うおう！？」

布団をガバツと持ちながら起きあがると、横に金色の蝙蝠が浮遊しながら睨んでいた。キバツト族の1人であるキバツトバツト？世ごと、キバツトである。

「なんだよキバツト、もう少し休ませろよ」

「そんなのんきでな生活でいるから体が訛るんだ。体くらい動かせ！」

「ったく……で、時間は？」

「またアレを見ようとしても駄目だぞ」

「……やれやれ」

アレとは後ほど分かることなのでさておき、英次は食堂へやってくると3人のメイドが支度をしていた。青く腰まで長い髪をする女性と、緑のショートヘアーで背が140センチ程低い少女、そして紫のツインテールでキリツとした目をする女性の3人で、それぞれ果物の名前であるチェリー、レモン、ピーチと名づけているのだ。

「ご主人様おはようです」

相変わらずな笑顔で迎えるレモンが英次に近寄りメニューを伝える。今朝はハウレン草のサラダと鮭のバター焼きである。

席について早速いただくと、蕩ける味と塩加減がよく効いて美味しいサラダも一口いただいてもこれまた美味く、皿にある料理はあつという間に無くなってしまう。

食べてすぐ自分の部屋に戻ると、小さな龍がテレビを見ている様子があった。キバツトに続く英次の第2のパートナー、タツロットだ。「英次さん、ちょうど貴方の見たがっているオーズが放送していますよ」

映像には仮面ライダーオーズのアクションシーンが映っていた。近づいて見てみようとしたと思いきや、英次はそのまま電源を切ってベッドの上に座る。

見ていたキバットも素っ頓狂な顔で驚く。

「なんだ？今日はお決まりの仮面ライダーでも見ないのか？」

「普通ならな。でもなんか、今回だけは・・・」

実はというと、英次は仮面ライダーマニアであって、ベルトやソフビをありったけに持っている。

しかし今の英次はさっきまでとは違ってテンションが下がり気味で、下げていた顔を上げると2匹に言う。

「俺は寝ている間に夢を見たんだ。なんだか怪しげな夢・・・まるで世界の崩壊をイメージする夢が俺の周りで起きていた。何か嫌な予感がする・・・」

「崩壊だつて？」

「全てのライダーが破壊し合っていた。これは、噂に聞くライダー大戦なのかもしれない・・・もしそれが起きようとしているのなら、きつと奴等が・・・」

たかが夢だとキバットは思っているがそうではなかった。英次の顔は真剣である。

そんな考えをしている中、突然とレモンが慌てながら部屋に入ってきたのだ。

「ご主人様大変です！来客用の個室に来てくださいです！」

「ど、どうしたんだよ急に・・・」

「とにかく行くつきやないみたいだぜ？」

「では、参りましょう！ピューピュー！」

ハイテンションなタツロットに続いて英次達は現場の個室へと向かった。そこではチェリーとピーチが話し合っている。

「チェリー、ピーチ。個室で一体何があったんだ？」

「ああ。不法侵入者がいたんだぜ」

「ふ、不法侵入！？まさか敵か！？」

「それが・・・」

チェリーは個室の戸をあけ、ベッドの方に目を向けた。なんとそこには、女の子が眠っているのだ。

「なんで女の子が・・・？」

「昨夜には個室に入られた形跡はありませんでした……。しかしレモンが掃除をしにここへ来た時に偶然とこの子を発見したのです・・・。更に驚くことに・・・」

チェリーは布団をのけた瞬間に英次とキバット、タツロットが言葉にできない表情で驚く。

女の子に宝石みたいな翼を持っているのだ。

「な、なんだこりや・・・？」

「分かりません。ファンガイアには一致しない感覚ですけど、私が見た時は驚きました。どうやって侵入したのか・・・そして彼女は何者なのか・・・」

騒ぎならぬように布団を戻し、この場から立ち去ってリビングに戻ると、一同たちによる会議を始めた。

「どうするんだぜ？このまま追い出すのは何か無慈悲に過ぎないぜ」

「確かにそうでしょう・・・ファンガイアではなくても、私達が彼女を元いた場所へ返せばそれでいいことですゆえ・・・」

「先輩の言うとおりです！ご主人様、ここは彼女を保護したほうがいいです！」

「だな。だしたら彼女に何処で住んでいるのかを聞いてみるのが一番かもしれないし・・・」

意見は早く纏り、早速彼女を起こしに個室へ戻る。

ところが・・・

「あれ！？いない！？」

なんと女の子がベッドから抜け、個室から外へ出ていたのだ。チエリーが布団を触ってみる。

「……まだ温かいです。私達が来る前に外へ出たのでしょ……」

L

「ならばバラバラに分かれて探すぞ。チェリーは玄関、レモンとタツロツトは第2廊下、ピーチは屋上付近、俺はキバツトと一緒にリビングに行く」

「了解……」

「はいです！」

「任せとけて！」

[illegible]

チェリーは英次に命じられた玄関へと向かう。

彼女が勝手に動き回るようでは主を困らせる羽目になるが、チエリはふと思っていた。

女の子が勝手に外に出ることなんてあるのだろうか……？

ここが自分の知らない場所ならまだしも、何の目的も無いようでは勝手すぎる。

では、彼女は外に出たがっているのか……？

どちらにしても玄関を見回れば姿を見せるだろうと考えているところで現場へとやってきた。今のところで誰も来てはいないようすだったが、突如玄関の扉が開きだした。

「！」

チェリーは左腰に下げている剣を抜く態勢を整える。すると出てきたときにチェリーは右手の力を抜き、目を疑った。

現れたのはチェリーたちとは違うメイドだったからだ。

「・・・貴方は？」

「ファンガイアの王にお伺いを参りました、十六夜 咲夜と申します」

それはアギトが王に会えとのお告げで現実世界に來た咲夜だった。チェリーは完全に剣から手を離す。

「・・・申し訳ございませんが、私達は今、キャッスルドランに現れた女の子を探しているので手が離せません・・・」

「女の子・・・ですか？」

「はい。宝石のような翼を生やした少女です・・・」  
その時に咲夜の表情が変わった。

（それってまさか、妹様・・・？そんなはずは・・・）

「・・・何か心当たりがあるのですか・・・？」

「あ・・・はい。実は・・・」

少女説明中・・・

「なるほど・・・咲夜様が面倒を見ている御方でしたか・・・。分かりました。咲夜様をマスターの元へご案内しましょう・・・」

咲夜の説明によると、彼女は咲夜の主であるレミリアの妹、フランドル「スカーレット」と名乗るのだが、どうしてここへ來たのかはまったく理由が不明らしい。

とにかくこの事情を英次に伝えるべく、チェリーは咲夜をリビングへと案内することにした。





としてここに参りました」

「……英次、まさかアイツの仕業か……？」

「いや、あいつは倒したはず……」

その時だ。暖炉におかれているバイオリンが強い音で鳴り出す。これはファンガイアが現れた証拠で、音の強さはその場所を示している。

「すごい反応です！これはすぐ近くにいらっしゃるってことです！」

「すぐ近くって言ったら・・・ザンバットソードが置かれている部屋とか？」

「それだ！」

英次は閃くように叫んだ。

「フランって奴はきつとそこにいるんだ！向かうぞキバット、タツロット！」

「！おひよう！」

「了解です！」

英次達はすぐにその場へと走り出した。

[illegible]

「ンンッ、ンンッ！」

「フッフフ・・・私の姿を見たからには、この剣の試し斬りに付き合ってもらわなくてはな・・・」

英次達が探していた女の子、フランは黒い衣装をまとう男性の手で口を塞がれ、抵抗できない状態になっていた。

そして男性の手には、英次が以前の戦いで使っていた魔剣ザンバットソードが握られている。

「おろかなるファンガイアに死を！！」

「ッー!!」

フランは目を瞑り、自分を世話してくれたみんなの顔を思い浮かべながら最期を迎える。

（咲夜・・・お姉様・・・魔理沙・・・!!）

剣先が突き刺さるうとしたその時、男性は横から何者かのキックを受けて吹き飛ばされてしまったのだ。

「な、何!?」

「妹様!!」

咲夜もやってきて、フランの安否を確認する。

「咲夜、来てたの!?」

「はい。ご無事で何よりです!」

「再開は後だ。今はあいつに挨拶くらいはしとかなきゃ・・・」

フランが顔を上げる先に見えるのは、蹴とばした正体である赤い蝙蝠の姿があった。

「貴方は誰なの・・・?」

「俺は・・・仮面ライダーキバだ」

それは英次が仮面ライダーに変身した姿だった。英次は男性に顔を向ける。

「なぜおまえが生きてやがるんだ・・・ギル・モナーク!!」

#### 第4話「現代入り・フランドール」スカーレット」（後書き）

第4話でした。ここからはキバサイドへと変わりますので星司サイドは後程ということになります。

今回はなんと！あの妹様が現代入りしてしまうというびっくりなことを書いたのですが、相変わらず外に出るのが好きですねえ妹様。しかしそこに現れた巨大な敵にどう立ち向かう英次！そして冒頭に出ていたこの人物は・・・？

遅れる場合もありますが、次回もまた見てくれればうれしいかと思えます。

## 第5話「デスワルツ・望んでいる新世界」

「なぜおまえが生きてやがるんだ・・・ギル・モナーク!!」

英次がそう叫ぶと男性、ギル・モナークは起き上がり英次に不敵な笑いをする。

「久しぶりだな、琴芭英次・・・。私はお前とダイアルの息子、ソフィードに倒されて以来に地獄で憎んでいたよ。それをまさか、あの者が私を復活させてくれるとは思ってもよらなかったがな・・・」  
「どういうことだ？」

「知りたければ私を倒してみろ。こいつと共にだ!!」

ギル・モナークがそう言った直後、彼の周りに黒い蝙蝠が現れた。

「! あれは・・・」

「親父!？」

キバットは驚いた。その正体はダークキバへと変身させるキバットの父親、キバットバット?世(以降、?世)だったのだ。

「な、なんで親父が!?!どうしてそいつの味方になってるんだよ!

!」

「お前に息子の覚えなどない!!」

?世は流れをぶった切るように断言した。

「あの蝙蝠は何なのですか？」

その時に咲夜はチェリーに問いかけた。

「あの蝙蝠はキバット族の一人、キバットバット?世。今マスターのベルトに止まっているキバットバット?世の父親です」

「父親・・・あれが・・・」

「はい。しかし彼はマスターの親友であるソフィード様に従っているはず・・・もしや、ソフィード様の身に何か起きたのでは・・・」  
「なんだって!?!?てめえ、ソフィードに何をしたんだ!?!」

英次はギル・モナークに言うが何もしていないと話す。

「安心したまえ、彼は殺してはいないが、少し細工をさせてもらっ

ただよ・・・フッフ」

「それは洗脳なのか!？」

今度はキバットが言った。

「だとしたらどうなのかね？」

「そうだったらお前を・・・お前を倒す!!」

？世を洗脳したなら取り返して倒すのみ。それが英次の闘魂に火をつける種となった。

「ありがたく思うがよい、絶滅タイムだ」

？世はギル・モナークが差し出した左手に噛みつと腰に黒いベルトが出現した。

「変身」

？世をベルトにセットすると黒い鎧を身にまとい、ダークキバに変身する。英次も負けん気で金色のフェッスルをキバットに吹かせる。

「タツちゃん、いくぞ!」

「それではファンタスティックに!」

「変身!」

タツロットが英次の左手に装着されると光に包まれ、黄金の鎧をまとうエンペラーフォームへと変わった。

「フッフ・・・それでは特別に、君達を最高のステージにご招待しようか・・・いでよ!我が僕!」

ギル・モナークの掛け声にオーラが現れ、中からムースファンガイアとシースターファンガイアの2体が出現した。

「キャッスルドランの中でか!？無茶苦茶だ!!」

「さあ諸君!デスワルツの始まりだ!!」

2体のファンガイアとギル・モナークが英次に襲いかかった。

「チィッ!!」

囲まれながらも格闘する英次。しかしムースファンガイアが英次から離れ、いきなりフランに襲い掛かってきたのだ。

「妹様!!」

咲夜が声をかけた瞬間にフランは信じられない速度で右に避けて攻

撃から逃れる。

いや、彼女自身ではなく、咲夜がフランを抱きかかえながら避けていたのだ。

（これが彼の言っていた『時間を操る程度の能力』か・・・確かに手強い相手だ）

ギル・モナークは咲夜の器に気を使う。だがギル・モナークの言うとおり、咲夜は時間を操る・・・すなわちは時間を止めたりする能力を持っている。その結果で先程の攻撃も時間を止め、フランを安全圏へと非難させたのだ。

「この野郎・・・関係のない奴まで巻き込みやがって!!」

英次は一発殴り、落ちていたザンバットソードを拾うとギル・モナークに切りかかった。

「甘い!!」

するとギル・モナークの前に強いエネルギーが発生し、英次は吹き飛ばされてしまった。彼目の前にはギル・モナークギル・モナークをした結界が張られているのだ。

「お前が私を倒したときはこれほどではないはずだ。もう一度、あの時のように私を倒してみろ!そして、憎き王に死を!!」

ギル・モナークは黒いフェッスルを?世に吹かせた。

「ウェイクアップ・ワン」

オルガンの音楽が鳴り響き、ギル・モナークの拳に魔皇力が込められる。ダークキバの必殺技の一つ、ダークネスヘルクラッシュが英次に襲い掛かるが、突如目の前に大量のナイフが飛び交い、ギル・モナークは必殺技の勢いでナイフを全て弾き飛ばした。

そのナイフはどこから飛んできたかという、それは咲夜だった。手には5本ほどのナイフを手に持っている。

「妹様を敵とみなすのなら、私は貴方を敵として排除させていただきます。覚悟を・・・」

チェリーも剣を抜いて構えており、レモンは隅っこで隠れ、ピーチは拳を構えながら迎え撃とうとしていた。



「・・・まあいいだろう」

ふとギル・モナークは変身を解き、英次達に背を向ける。

「お前、逃げる気か!？」

「これはあくまでも予行演習だ。本当ならこれだけで済めると思ったら大間違いだぞ・・・」

「そういうことだ。お前達が死ぬ気あるのなら、幻想郷に来い」

？世もイラつかせるように言い残し、出現したオーラに消え去った。

「また会おうキング・・・ただし生きていればの話だな」

ギル・モナークもオーラの中へと消え去り幻想郷へ戻っていった。

普通なら終わったと思っているがそうではない、奴はおきみやげを置いていったのである。

「やはりこうなるか・・・ピーチ、外へ放り出せ」

「あいよ!」

命じられたピーチはムースファンガイアとシースターファンガイアを掴んで壁へ投げ飛ばした瞬間、その勢いでファンガイアは壁を突き破って外へと放り出されてしまい、英次もそこから外へと飛び出してファンガイアにザンバットソードを向ける。

「罪なき幼女に害を与えし愚か者よ!その罪は万死の値として、この場に死刑を与える!」

剣に付けられているザンバットバットの仮面をはぎ取り、キバットに吹かせた。

「ウエイク、アップ!」

フルートの音が鳴り、ザンバットソードの刀身が赤く輝き始める。

ムースファンガイアもシースターファンガイアも必死なる抵抗で英次に襲い掛かるのだがすでに遅し、剣を水平に振った瞬間に衝撃波が飛んで2体を一閃。バリインツ!!と音を立てて絶命した。

「さすが英次だな。しかし、何でギル・モナークがよみがえったんだ?」

「ライフエナジーが基本的だろ?それさえあれば復活は可能だ」

戦闘を終えた英次はキバットやタツロットとの会話を始める。ギル・

モナークが地獄から蘇るには、大量の生命力『ライフエナジー』を与えなければ復活しないのだが……。

「ひよっとして、隠密とかでは？」

「タツちゃん、それは時代劇の見すぎじゃ……」

「どうだっていいよ。やはり残道が残っていたか、それとも新手の仕業か……。どの道にはギル・モナークを追うことが先決だろうし」

「そうだな……。そっぴああの新入り姉ちゃん、破滅の予兆とかつて言ってたぞ？」

「確かに言ってたけどキバット……。お前はほんと美人に弱いなあ……」

「んなつ！？若くてかわいい姉ちゃん達に囲まれて生活しているお前に言われたくないわっ！！」

「それは俺が好きでやってるわけじゃねえよ！？」

知らぬ間に揉め事が発生した。英次はメイドであるチェリー、レモン、ピーチの他にも仲間がいるのだが、その仲間も実は女の子ばかり。

英次は少女達に囲まれながら夢のバラ色人生を送っているのだ。

「けどこんなところで立ち話する間もないし、帰るぞ」

面倒なことはごめんだと、英次はキャッスルドランへと帰還しようとして振り返ったその時だ。周りに異常な波動が現れ、キャッスルドランが呻き声を上げている。

「なんだ？キャッスルドランの様子が……」

「というより、中にいる姉ちゃん達が危なくないか！？すぐに戻ったほうが……」

「だから姉ちゃんっていうな」

英次はジャンプでキャッスルドランのところへ戻り、チェリー達の

いる場所へとやってきた。

「チェリー、一体何が起きているんだ!?」

「分かりません。けど、異界の波動を感じます・・・」

「異界?」

「はい。ファンガイアの世界ではなく、もつと別の・・・」

「ご主人様、あれを見てくださいです!」

レモンが外に指をさすと、空に巨大な穴が開いているのが見えていた。

「な、何だあの穴は・・・!?」

と、ピーチが驚き、

「異界の波動は、あの穴からです!」

と、チェリーが原因を理解する。

「異界・・・幻想郷・・・」

「え?」

英次はその言葉を放った人物に顔を向く。

「まさか、私達のいる世界、幻想郷では?」

咲夜は穴の先にある世界を知っていた。そう、あれそこが咲夜とフランがいる世界、幻想郷へと繋がる穴なのだ。

「どういうことなんだ!? 咲夜さんやフランは俺に頼みがあつて来たんだよな!？」

「はい。しかし私と妹様は、本来はこの世界にいるものではありません。先程のギル・モナークも、ハッキリとその世界の名を言っていましたゆえ・・・」

「異世界人だあ!? じゃあなんでこの穴が・・・!!」

キバットは穴の出現の原因を咲夜に問いかけた。

「幻想郷は昔、ある理由で裏の世界として切り離され、外から寄せ付けられないように結界が張られております。しかし穴が開くとなれば、おそらく結界が裂けられたかと・・・!」

「まさか、ギル・モナークの仕業で結界が・・・!」

その時、穴からものすごい光が放出し、突如町に異変が起き始めた。

「英次さん！街の様子が・・・！」

「何！？」

ビルが草木で覆われていき、町が一瞬で森へと変貌してしまったのだ。気づけばキャッスルドランの呻き声は止み、空に開いている穴も消えていたのである。

「どうなってるんだ・・・なんで街が・・・」

「フハハハハハハハッ！！！！！」

その時笑い声が聞こえ、空からギル・モナークが降りてきたのだ。

「また会ったなキング。たった今お前の世界は、幻想郷と融合を果たしたのだ！素晴らしいだろ！？」

「幻想郷と融合・・・？ってことは、2つの世界が1つになったのか！」

「そうだ！だがこれで終わりではない。この後にまだまだ別の世界が融合を果たし、そして最後には融合した世界を消滅させる！そうすれば、我等の新しい世界が誕生するのだ！！」

「それがアイツの目的ってことか・・・！ファンガイアの元王としての逆襲が！！」

目的を明らかにしたギル・モナークは笑い続け、更にこんなことまで発言する。

「一つだけ言っておこう。我は既にファンガイアではない」

「何だって？」

「ファンガイアの肩書を捨てた我等の新たな勢力・・・その名も

『スーパーシヨッカー』だ!!」

これを聞いた英次は驚く。

「マスター・・・？」

「そんな・・・スーパーシヨッカーってまさか・・・!?」

「知っているようだな。かつてはある仮面ライダーによって滅ぼされていたが、残っていた火種が真の勢力へと化し、現代にいたっている。すべてはキングである貴様とソフィード、そしてあの仮面ライダーを抹殺するために・・・」

「・・・ディケイド・・・!」

英次は依然倒したといわれる人物の名前をギル・モナークに言った。

「そう、世界の破壊者と呼ばれた仮面ライダーディケイドの抹殺、そして貴様達を含ませた抹殺こそ第2の目的なのだ、キング!」

「そんなことはさせない!! 絶対にだ!!」

英次はタツロットの頭を掴んでルーレットを回してキバのマークがそろつう。

「ウェイクアップ、フィーバー!」

同時に英次はギル・モナークへとキツクの態勢で飛びつき、足に蝙蝠の羽が浮かび上がる。これがキバの必殺技であるエンペラームーンプレイクで、ものすごいスピードに乗りながら接近していく。

「おらああああああああああっ!!!!!!」

ギル・モナークにあたるかと思つた直後に姿が消え、英次はそのまま攻撃を外して地上へ着地する始末となる。  
するとまた声が聞こえてくる。

「キングよ、貴様はこの世界とともに最期を待っているがよい。フハハハハハ・・・!!」

そう言い残して気配は完全に消滅した。英次は再びキャッスルドランの方へと戻る。

「まさかスーパースョッカーがこの世界をな・・・大変なことに・・・」

「それより、そのネーミングが無いような名前は何なんだぜ？」

ピーチは話が尋常じゃないことで質問する。特に英次は知っている様子だ。

「ああ。仮面ライダーディケイドが戦っていた、”すべての世界に存在する敵”が集結した巨大組織だ」

「すべての世界とは・・・どうということなのですか？」

今度は咲夜である。

「25も及ぶ仮面ライダーの世界であつた組織さ、ショッカー、ゲルショッカー、デストロン、ゲドン、ブラックサタン、ゴルゴム、クライシス帝国、ネオ生命体、グロンギ、アンノウン、ミラーモンスター、オルフェノク、アンデット、魔化魍、ワーム、イマジン、そして俺達が戦っているファンガイア・・・これがそれぞれの世界にいて、一つに集まっている組織がそれだ」

全員集合との意味でもあるこの組織の出現。英次は一刻も早く手を打たなければならないと、咲夜がお伺いに来た件を受け入れることにする。

「チエリー、お前は街の確認を頼めるか？」

「了解・・・」

チエリーは街の住民の様子を調べに外へと出ていく。

「・・・では咲夜さん行きましょう。俺に助け船を要求する主の元へ案内を」

「分かりました。妹様もこちらへ・・・」

フランも咲夜のいる紅魔館へ戻ることにし、英次を連れた彼女達もキャッスルドランを後にする。

「・・・行っちゃいましたです・・・」

「全く、私達は置いてけぼりだな・・・」  
荒れてしまった部屋を眺め、レモンとピーチは肩を落とす。

## 第5話「デスワルツ・望んでいる新世界」(後書き)

盆休みということで勢いよく投稿を予定しているつもりなのだがまったくグダグダですorz

ついに英次達が幻想入りしまして、今回はまだ別のサイドからのストーリーが展開されます。

今度は誰の世界かは見てのお楽しみということで、次回またお会いしましょう。



## 第6話「隠されていた正体」

バトルファイト。それは1万年前、53種のアンデッドにより自らの種の繁栄をかけて行われた決闘法。

このバトルファイトは“統制者”と地球上の有機生命体とのコンタクト用インターフェースである黒い石版・モノリスを通して管理されており、アンデッド同士の戦いで敗れた結果、戦闘不能になったアンデッドは、モノリスの力によってカードに封印されていき、最後まで封印されることなく残っていたアンデッドが勝者となる。

そして勝者となったアンデッドには“統制者”から地球上の全生命を自分の望むがままに変革できる“万能の力”が与えられ、その後の世界を自分の思い通りのものにできるのである。

そして、この“万能の力”を欲していた人類基盤史研究所“BOARD”<sup>ボード</sup>理事長、太田<sup>おおだ</sup>博太郎<sup>はくたろう</sup>は、最強の仮面ライダーと言われているハートのカテゴリーA、カリスに相応しき者を造るため、人間を<sup>トリアル</sup>改造実験体へと改造してアンデッドの封印を行うのだが、作られた実験体はすべて失敗に及ぶ羽目となる。

そんなある日、アンデッドによる奇襲のせいでカリスの変身に用いられるラウズカードがどこかへと消えてしまう事件が発生した。

その一方、何の変哲もなく普通に生活をしている高校生、黒崎愛翔<sup>くろさき まなと</sup>は偶然にも1枚のランプを手に入れる。

それはBOARDが失っていたカリスのカードで、このことにより秘密を知られたBOARDは愛翔<sup>フオー</sup>を連行し、愛翔はトリアル？へ





「あー……こりや入れないな」

「ええ。ここしかカラオケ店がないのに……」

健介の言うとおりだ。あのカラオケ店には最新の曲が続々と更新さ

「すみません。ここで何が起きたんですか？」

「殺人事件さ。酷い殺され方でね、刃物で切られたような跡があるんだけど凶器がどこにも発見されていなかったんだってさ」

「当分は入れないと思うな。今日は家にも帰って……」

「2人はここにいてくれ！」

「え！？愛斗！？？」

「どこ行くのアイ君!!」

[illegible]

男は細い通路へと入っていき、そこへ愛翔が追いついた。

「待て！」

愛翔の声に男は止まる。

「お前なんだろ！カラオケ店で殺害を犯した犯人ってのは・・・なぜそんなことしたんだ！」

「・・・やっぱりか。予定通りだ」

「何？」

男は愛翔に振り替えると、USBメモリを取り出してスイッチを入れる。

## ARMS

「変身」

首筋に差し込んだ瞬間に男の姿が変わり、それはまさしくも『戦場の死神』とも言つような恐ろしい骸骨の姿に折れた剣やガトリング・・・武器の記憶を持つ怪人、『アームズ・ドーパント』となる。  
「喰らえ！！」

挨拶代わりにアームズ・ドーパントがガトリングの下にあるグレネードを2発放ち、油断していた愛翔を容赦なく爆発させる。

「・・・フンッ。相手したことを後悔しろ・・・」

そう言つてアームズ・ドーパントは立ち去ろうとしたその時だ。

## TORNADO

「！」

アームズ・ドーパントは飛んできた真空波をかわして後ろに振り向く。そこには黒い蠅螂の姿をした戦士がその場に立っており、右手には少し変わったような弓を持っている。

「貴様、只者じゃなかったのか・・・名を聞いておこう」

「・・・俺は仮面ライダーカリスだ！」



「走れ！あいつが俺達を狙ってくる前に離れるんだ！」

[illegible]

「……ったく。なんだって言うんだよこれは……」

「何なんだ。お前は一体誰なんだ！？それにあの化け物はなんだってんだ！？」

「……この姿を見られちゃったら仕方ないよな……」

り、見ていた2人も驚きを隠せない模様になる。

「アイ君……？……アイ君、どこから出てきたの！？」

「出てきたんじゃない。あの蠅螂は、俺が変身した姿だ」

「へ、変身！？どういふことだ？」

「事情を説明するよ。まずは中へ入ろう」

青年説明中・  
・  
・

「……じゃあ、愛斗が長期間欠席してた理由って……」

「このことはBOARDの秘密を知らせてしまうことで厳密にされてたんだ。ごめん・・・」

説明を終えた愛翔の真実に健介はショックを受けるが、美奈子は・

「すっごくいい！アイ君はミナの知らない間で守ってくれてたんだね！」

「ま、まあそうだけど・・・俺が人間じゃないってのにショックは受けないのか？」

「ううん。だってアイ君は、ミナを守ってくれた王子様なんだから！」

・・・やっぱり彼以外に眼中になかった美奈子である。

「守ったのは世界・・・なんだけどね」

「けど、そんな事情があるなら納得いくよ。辛い理由がわかる」

「ああ。1人で54体もの敵と戦ったんだ・・・疲れるよ」

「じゃあじゃあ、今夜はミナがアイ君の為に癒してあげる。それでいいでしょ？」

「まさか、泊まる気？」

ということで美奈子と健介は親に連絡を取り、愛翔の家での宿泊会が開催されることとなった。愛翔1人で作るというのに美奈子が代わりに作るのだが、2人は心配になる。

「なあ、生きて帰れるよな・・・？」

「無理だろう、古い筏でサーフィンするようなものだぞ・・・」

彼らの心には「DILINGER」と警報が鳴るような状態になっていた。そしてついに、その時が訪れる・・・

「お待たせ、アイ君のために美味しい料理を作ったよ」

「あ、ありが・・・とう・・・（けどこれ、料理・・・？）」

なんだか酷いような料理が運ばれてきた。

（愛翔、ここで引くようじゃ嫌われるのは間違いない！食え！）

（だ、だからって・・・）

（美奈ちゃんはお前が食べてくれるのを楽しみにしてやがるんだ！



これはお前に託された試練だと思え！)

究極の選択を問われる愛翔だが考える余裕なんてない。美奈子はだんだんと不安さを出してくる。

「アイ君、食べないの・・・？」

「！！喜んで食べるよ！せつかく作ってくれたものを無駄にしたくはないし・・・では愛翔、行きまーす！！」

パクッ

モグモグ・・・

「！！これは・・・」

愛翔は覚悟していたのだが、様子が一变。愛翔は感想を出した。

「・・・意外と食える」

「・・・え？」

「本当！？よかったー！」

見た目は酷いのだが、奇跡なのか味はそんなに酷くはないのだ。健介も食べてみるが美味いと答え、この奇跡的たる料理を残らず完食した。

「はー食った食った・・・さて、後片付けでもして風呂でも・・・」

「ア・イ・君。一緒に入る？」

一難去ってまた一難であった・・・。

## 第6話「隠されていた正体」(後書き)

どうも作者です。

第3のサイドはカリスということですけど、このサイドではラブシーンが多いです。(下手すると危ないかも)

このキャラの正体とされるトライアル？ですが、なぜ数字なのかといいますが、もともとこの番号はジョーカーの量産型の番号の意味で1号、2号と振り分けられており、愛翔は第4号の害像実験体という意味になるのです。

そしてこの世界には存在しないバスのドーパントがなぜいるのか…次回でも死闘の予定です。

ではまた次回・・・

## 第7話「ハートの仮面と桃の仮面」

夜。愛翔達が通う学校では明かりなんて一つもない、静かな場所となっている。

しかし、時としてはここで恐ろしいことが起きるのも確かなことだ。屋上では空から蝙蝠の姿をした怪人が少年（見たところ中学生くらい）を降ろし、怯える少年に近寄る。

「ヒヒヒヒ・・・ここだよな？お前の進学したい学校ってだよ・・・」

「ヒイイ！た、助けてくれえ！！」

後ろへと下がるが退路を断たれており、少年は怪人に追い詰められてしまった。

「契約完了だ。約束通り代償を・・・」

「ちょっと待ちな！！」

目の前まで近づいた怪人だが、どこからともなく聞こえた声に立ち止り、後ろに振り替える。

そこには赤い瞳をしていかにも喧嘩っ早いような青年が立っており、青年は怪人に近寄る。

「過去へいかれようじゃ面倒になるんでなあ。大人しく俺にやられてもらおうか」

「ああン？やる気が貴様！？」

怪人は売られた喧嘩を買って男性に襲い掛かるが、男性は素早く左へ避けると銀色のベルトを取り出し、腰に巻きつけた。

「いいか蝙蝠野郎。俺は最初から最後まで・・・」

クライマックスな男だぜ！

青年はベルトにある4つのボタンのうちの赤いボタンを押す。するとバックルが赤く光りだし、男性は懷から取り出した黒いパスケースを右手で持ちながら勢いよくポーズをとる。

「変身！！」

S W O R D   F O R M

パスケースをバックルに背タッチするように通すと電子音が認識し、青年の姿が黒いバリアジャケットに包まれ、赤い鎧と桃の形をした仮面が装備される。

「俺、参上！！」



「あああああああああああああああああああああああ  
ああああ

「！！！！！」

愛翔の叫び声が響いた直後に、寝ていた2人も目を覚ます。

「何だよ・・・愛翔の奴・・・」

「どうかしたのかな・・・？」

直後に愛翔がキレ顔で美奈子の肩を掴む。

「デメエ！！冷蔵庫の中のもの全部使ったなあ！？」

「えゝ？・・・あ、夕べの料理に全部・・・」

「それじゃあ朝飯が食べねえぞ！？どうするってんだ！！」

冷蔵庫の中身のものがないのなら食べれるものがない。今から買いに行っても問題はないのだが、学校に行かなければならないとすればどうだろう。

つまり、下手すれば遅刻する可能性があるのだ。

「いい加減に2人共起きろ！こうなればバンバーガーショップで・・・」

それなら手軽に食べれるハンバーガーショップによりながら学校へ行こうかと決める。愛翔は2人を起こすのに必死になっていると、愛翔の携帯電話が鳴り出した。

開いて連絡先を見てみると学校かららしく、電話に出てみる。

「はい、黒崎です。・・・え？・・・はい・・・はい・・・そうですか。じゃあ・・・」

バタバタと動き回っていた愛翔は一瞬で収まり、2人に顔を向けた。  
「アイ君、今の電話は誰から？」

「学校からだ。なんか、学校で何かの破損のせいで暫くは休校だつて・・・」

なんと学校から休校のお知らせが届いたのだ。これを聞いた美奈子は飛び起きる。

「やった〜！じゃあこれから暫くはアイ君と一緒にだね？」

何がともあれ、今日は食糧集めに買い物に出かけるかと決めた愛翔だが2人もついとして来ることになり、一同は支度を整えて外に出かける。

商店街へとやってきた愛翔達は早速スーパーで買い物を始める。

これだけ買い込むとなればお金がかかるのだが、愛翔はBOARDでの報酬（およそ200万）をもらっているおかげで余裕に買うことができる。あつという間に買い物を終えた愛翔は早速朝食作りに取り掛かろうと2人を連れて帰る。

「だかいくら何でも、買いすぎだろこれ・・・」

「男なら力も大事だ」

愛翔と健介は食材を運んでいるが、レジ袋がやけに重いせいで健介はしんどいと弱音を吐いてしまう。それに比べて愛翔は平気であり、健介に一喝を与える。

「そりゃあ俺は改造人間だから当たり前だろ。しょうがないなあ……」

仕方なく健介のレジ袋も持つことに。３人のお出かけはやがて終盤を迎えて家に到着するのは、その２分後だった。



「暑ぢう・・・マジで暑すぎだろよこれ・・・」

空は快晴で、38度という見事な晴れ日和は3人の体力を削り、汗をダクダクと流していた。

「でもアイ君見てよ。私の体、こんなに透けてるよ?」

美奈子は愛翔に透けた体を可愛く魅せるようにポーズをとる。

「おいコラ!俺は手が離せないんだし早く鍵を開けてくれ!」

「ダゝメ?」

拒否る美奈子には埒が明かないとみた愛翔は健介に鍵を開けると要求し、3人は日陰へと入ることに成功した。

「ハア・・・ハア・・・」  
「とにかく早く作らなきゃ・・・」  
さつそく料理を作りに取り掛かろうとする愛翔。この暑さでやるのはトライアルである彼でも体力を失うことになりかねないことだが、やらなければ3人は何も食べれないままとなってしまう。残された体力を燃やし、愛翔は野菜を切って油をしき、そして野菜を炒め始める。

油の跳ねる音が地味にも疲れを増すが今は我慢しかない。なんとかでも耐えなくては・・・

「きゃあああああゝ!!」

その時、愛翔の耳に悲鳴が飛び込んできた。これは部屋の方からではなく、風を入れようと開けっ放しにしている窓からだ。それも妙な殺気を感じ取りながら・・・

これは尋常ではない。怪人が現れた証拠だ。

「こ、こんな時に・・・!」

だが料理はどうする？さもなくばこの料理が台無しと化してしまう  
というのなら、愛翔は奥で休んでいる健介に次のことを言いつけた。  
「健介、料理を頼む」

「・・・は？」

「拒否権は無しだ。うまく料理しろよ？」

そう言い残して愛翔は外へと飛び出した。直後に健介曰く、

「・・・俺、聞いてない・・・」

|||||  
|||||

外へと飛び出した愛翔は自家用のバイクに乗り込み、先程の気配を  
した現場へと急行しに向かっていた。

移動中に愛翔の腰からカリスラウザーが出現し、右腰のカードケー  
スから『チェンジマンティス』を取り出すとカリスラウザーの上か  
ら通そうとする。

「へんし・・・」

愛翔が声を上げた直後に横から別のバイクの音が聞こえ、愛翔は変  
身を止める。

右を見てみると青のラインが入った白い流線型バイクで、乗ってい  
る者かというと・・・

（赤い・・・仮面？）

それは桃の形をした面をする赤い人物・・・その者は愛翔の横に並  
んで話しかけてきた。

「おいおい、スピードの出しすぎはよくないぜ？」

「なっ！？」

確かに。普通見ればこれはスピード違反である。

「俺はそんなつもりじゃない！」

「へえ、じゃあどんなつもりだったんだ？」

赤い人物は意地悪そうに喋ってくる。これにむっと来た愛翔はこのつもりだと、カードをカリスラウザーに通した。

「変身」

# CHANGE

愛翔はバイクごと水に包まれてカリスに変身し、バイクもシャドーチェイサーへと姿を変えた。

「なるほどな、だから妙な匂いがしたわけか……」

「匂い？」

「簡単なことだ。お前が只者じゃねえってことでな、お前も俺が狙っている奴を追いかけてるんじゃないかって思ってたんだ」

疑って悪かったと詫びるつもりで赤い人物は目的を説明した。この先からは彼との共同戦闘があるようで、それなら協力し合う他に何も無い。（場合によるが・・・）

「……ならひとつお願いだ。足引っ張らないでくれるか？」

「へッ、問題無しだ。俺の名は電王だ。よく覚えておけ！」

「なら成立だ。俺は仮面ライダーカリス、カリスでいい」

2人が乗るバイク、シャドーチェイサーとデンバーは現場へとフルスロットルで走り続けた。

[illegible]

「契約完了・・・」

「ヒ、ヒイイイツ!!」

猿に似た怪人が男性に近寄ると男性の体がポテトチップスの袋みた

いに引き裂かれ、そこに怪人が入り込むと同時に男性が元の状態へと戻る。

すると今度は2人が駆け付けて来たが、その時に愛翔はハッと気づく。

（この人って確か、美奈子の親父さんじゃないか！）

愛翔は驚いた。美奈子の実家は大企業の社長である梅田直春が一家の大黒柱となっており、父親のことは美奈子から前に何度か聞いている。

愛翔は彼に話しかけた。

「すみません！梅田直春さんですよ！？」

「え・・・どうしてその名前を・・・？」

「俺は貴方の娘の知り合いです。さっき襲われていたのって貴方じや・・・」

「そ、そうだ！変な猿の化け物が現れて、飲み物を持ってきてくれて言ったら急に・・・」

直春の傍には飲み物がたくさんあり、おそらく奪ってきたのだろうと電王は確信する。それと同時にチケットを取り出して直春の額に翳した瞬間、『2000,06,28』の数字が浮かび上がりでた。

「電王、今何を？」

「年号をあぶり出したのさ。おいおっさん、この日に何か心当たりはあるか？」

チケットの年号を見せ、直春は一つの心当たりを思い出す。

「確かこの日は、俺が社長の就任で家族から離れることに決まって、最後の別れをした日だったはず・・・」

「そうか、ありがとよ！」

電王はデンバードに乗り込む。

「行くぞカリス。ついてこい」

「行くって・・・何処へ？」

「決まってるだろ、今から10年前の過去へだ！」

92

列車だ」

「時を超える・・・それってタイムマシンか！」

「そついうことだ。乗るぞ」

まさかまさか、列車型タイムマシンを目の当たりにした愛翔は頭を抱えながらもデンライナーの運転室に乗り込む。

「って、おい！これ運転室！？バイクが置かれてるだけじゃないか！！」

皆さんなら運転室は想像できるだろう。しかしこれも裏切られてしまつ。

マスコンとかブレーキがなく、デンバートが置かれているだけのわけのわからない運転室になっているのだ。（シャドーチェイサーもなぜか詰め込まれている）

「捕まってるよ。最初から飛ばすぜ」

「飛ばすって・・・どう運転するんだよ」

「こうするのさ」

電王はデンバードに乗ると年号の書かれたチケットをパスクースに入れ、専用のコネクトに差し込む。するとデンライナーのシステムが起動し、電王はアクセルをふかしながらテンションを上げていった。

「行くぜ行くぜ行くぜえっ！！」

デンライナーは警笛を鳴らすと同時に発進する。物凄い加速で。

「お、おい！飛ばしすぎだろ！」

「だから捕まってるって言ったんだ。ここからは俺がクライマックスなんでな！！」

モニターには前方の線路が見えているが路線が徐々に林から砂漠の中へと変わります。

「この砂漠は……」

「俺達は今、時間の中にいるんだ。このまま10年前の時代へと行くぜ！」

さらに勢を増していく電王。それを必死でこらえながらシャドーチェイサーに乗る愛翔。

そんな2人を乗せたデンライナーは10年前の世界へと走っていく。

[illegible]

2000年、6月28日。梅田家自宅前。

「パパ、どうして行っちゃうの？ ミナは寂しいのに……！」

「美奈子・・・パパは、人の幸せを作るために・・・美奈子の幸せを作るために、頑張らなくてはならないんだ。今では分からなくても、君が大人になっていけば分かってくるはずだ。若いころに母さんと出会った時のように、美奈子もその運命が来るのかもしれないからな」

「運命……？」

「そう、運命だ。きっと美奈子なら、いい男の子と結婚できる。それを支えるための仕事でもある」

今では7歳となる美奈子を直春は慰める。

「じゃあそろそろ行くね。君一人では寂しいかもしれないけど、親戚の人と仲良くするんだぞ?」

「……うん。頑張つてねパパ」

直春は頷き、その場から後にしようとした。

ところがその時だ、目の前にあの時の猿の怪人が現れて美奈子が悲

鳴を上げる。後ろに下がった美奈子だがふと何かにあたる。振り向くとそこには、愛翔が戦っていたあのアームズドールハントもいるのである。

「キアアアアアアッ!!」

「! 美奈子っ!？」

怯える美奈子を直春は抱きかかえながら逃げようとするが挟まれてしまい、猿の怪人は親子に飛び掛かった。

「誰か、誰か助けてえええええっ!!」

美奈子は決死で叫び声を上げた次の瞬間、

## TORNADO

電子音が鳴った瞬間に真空波が猿の怪人に直撃、親子の危機が免れた。

「・・・貴様等・・・!」

アームズドールパントは発射した方向を見て睨む。やはりその正体は電王とカリスである。

「デメエはあの時の!」

電王はアームズドールパントを見おぼえあるように言った。直後に愛翔は顔を電王に向ける。

「あいつを知っているのか？」

「ああ、昨日の学校で出会った奴だ。逃げられたけどな・・・」

「学校・・・そうか! 学校が何らかの破損ってのはお前が原因だったのか!」

許すまじとカリスアローを構える愛翔。その後ろにいる電王が前に出て、デンガッシャーを構える。

「・・・こうなればお前達を始末するか・・・このモンキーイメージと共にだ!!」



かくして、2対2の対決が始まりを告げる。

## 第7話「ハートの仮面と桃の仮面」（後書き）

ついに第7話の完成です。

今夏で何と電王とクロスということになっているのですが、憑依しているイマジンのモモタロスは誰の体を借りているのかまではまだ内緒にしています。

思えばハートから逆さにすると桃ってイメージが出てきたんですけど、これは作者の全くなる偶然でできてしまいました。なので奇跡のコラボといっても過言ではありません、作者はこれが最高のコンビだと望んでいます。

・・・え？契約完了？うわなにやるやめ（ry

・・・で、では・・・次回にまた・・・ガクリッ

## 第8話「時間の干渉」

愛翔が偶然にも仮面ライダー電王と出会い、突如現れた怪人を倒すべく10年前の過去へとやってくる。

そこで目の当たりにしたのはあの時の男性であり、今ここで彼らの決着がつけられようとしていた。

「しかし電王、あの猿がお前の追っていた敵なのか？」

「ああ。あれはイマジンってな、要は昔話とかを連想した化け物さ」「じゃあ猿蟹合戦の猿ってことなのか？」

「そういうことだ」

戦闘中に軽く話をする愛翔と電王。猿がどうにも気になっていたらしく、その正体はイマジンという未来から来た怪人のことを電王が説明した。そして電王の言うとおり、このモンキーイマジンは猿蟹合戦の猿のつもりである。

そしてもう1人は男性が変身しているアームズドローパント。愛翔はチームワークを保つために二手に分かれながら敵と戦おうと電王に説明を始めた。

「電王、ここはお互い相手する奴を決めなければ隙を見せてしまう。お前はあの猿のイマジンを頼んでほしい」

「はあ!？」

しかし電王はこれを聞いた直後にキレ顔で愛翔に訴えてきた。

「バカ言うな! あいつ（アームズドローパント）は俺が倒すんだって決めてんだ!」

電王は指示を聞かずにアームズドローパントに切りかかろうとしたが、捨て身すぎている電王にグレネードを一発お見舞いし、瞬く間に愛翔の元へと帰ってきた。

「ぐおっ・・・この野郎おっ!」

また電王が突撃する。

「ハハハ! 隙だらけだぞ貴様!」

今度はガトリングでダメージを蓄積していく。

「がはっ・・・！」

「オラオラ！もつと喰らわせてやるぜ！！」

アームズドールパントは打ち方を止めず、このまま電王の体力を根こそぎ奪おうとしていた。仕方あるまいと愛翔はカリスアローにラウスカードを通した。

## G E M I N I

愛翔が持つダイヤのカード『ジェミニゼブラ』が発動し、愛翔が2人へと分身した。分身はカリスアローから放つ光の矢『フォースアロー』を発射して仰け反らせ、本物の愛翔は今でも怯えている梅田親子の元へとやってきた。

「こつちへ！俺が案内します！」

2人の身柄を確保しようと、安全圏へ誘導させる愛翔。父親の直春は娘の美奈子を抱きかかえながら建物の陰へと隠れる。

「（よし、これで安心できる）ここから動かないくださいね」

愛翔はすぐに戻ろうとしたその時、

「待ってお兄ちゃん！」

美奈子が愛翔に声をかけた。

「お兄ちゃんは誰なの・・・？」

それは嵐のように現れた彼の名前を聞く言葉だった。愛翔は美奈子に振り向く。

「俺は黒崎愛翔。仮面ライダーだ」

その時の美奈子の目に微笑む愛翔の姿が一瞬だけ見え、愛翔は交戦中の場合へと戻っていく。



「さあ、お仕置きの時間だ」  
4枚とも空へ投げ、そこへもう1枚のカードをカリスラウザーへ通す。

## REMOTE

通して瞬間にカードから紫の光線が4枚のカードに当たり、そこから封印されていたアンデットが飛び出してきた。

蛭の始祖『ファイアフライアンデット』。

蜂の始祖『ビアンデット』。

ホッキョクグマの始祖『ポーラーベアアンデット』。

象の始祖『エレファントアンデット』。

この4体と愛翔が並び、それぞれの行動が始まった。

まず最初にファイアフライアンデットが直で火炎放射を放つ。

「ウキヤキヤッ!? アキアキ・・・」

火傷を負って火を消そうとするモンキーイマジンだが、その後ろをビアンデットが一刺しする。

「ウキヤキヤキヤッ!?!」

お尻に刺さって痛がるところを今度はポーラーベアアンデットがモンキーイマジンの足元を凍らせ、その氷に滑って頭から地面へと落ちる。すると上から勢いよくジャンプしていたエレファントアンデットがボディプレスでモンキーイマジンの腹へダイブし、見事昔話同様の仕返しがこの場で演じられたのである。そこへ止めへと態勢をとっていた愛翔はファイアフライアンデットをカードへ戻し、また別の2枚と合わせてカードを連続で通す。

## BULLET / RAPID / FIRE

3枚のカードはカリスラウザーに吸収され、モンキーイマジンに照準を合わせた。

#### BURNING SHOT

電子音が鳴って発射の引き金を引いた瞬間に火炎弾が高速連射され、モンキーイマジンはこの攻撃によって爆発、消滅してしまった。

「貴様、その力は何なんだ！？何故化け物がお前の味方を・・・！？」

アームズドールパントは味方にいる3体のアンデットに驚く。

「こいつらは俺が操作しているだけだ。お前がどうあがこうと、俺に太刀打ちするのは不可能だぞ？」

「・・・！ 貴様あつ・・・！」

アームズドールパントは怒りを沸騰させてガトリングを構えようとしたが、次の瞬間に背中にある強い衝撃を受けて地面に倒れこむ。

「ヘッ・・・俺を忘れちゃ困るよなあ・・・！」

先程までダメージを負っていた電王が復帰し、アームズドールパントの背後に回り込むことに成功していたのである。電王はパスケースをバツクルにセタツチする。

「必殺・・・俺の必殺技・・・！！！」

#### FULL CHARGE

バツクルから赤いエネルギーがデンガツシャーに吸収され、エネルギーをチャージする。その一方で愛翔はラウズカードで止めの一撃を叩こうと、『フロートドラゴンフライ』、『ドリルシエル』、『ホークトルネード』の3枚を連続で通す。

#### SPINNING DANCE

愛翔の周りに風が舞い、宙へと浮き上がる直後に高速回転する風のドリルキックをアームズドールパントへ、後ろからも電王がチャージしたデンガッシャーを持ちながら突っ込んでいく。

「カリスバージョオオオオオ

ンっ！！！！」

カリスの『スピニングダンス』、電王の『エクストリームスラッシュ』が挟み撃ちで決まり、アームズドールパントは悲鳴を上げて爆発した。

「・・・くうっ！俺、最高っ！！」

勝利の喜びに電王は晴れて万歳と両手を上げる。同じく技を決めていた愛翔も電王の元へと来る。

「見くびってたよ。お前もいい腕をしているな」

手を差し出す愛翔だが電王は鼻で笑う。

「当たり前だろ。俺は、最初から最後までクライマックスなんだしょ」

そして2人は握手をした。出会う筈のない仮面ライダー・・・それもヒーローショーでもあり得ないこの前代未聞の2人がこうして握手するのもこの場以外で何もないだろう。

しかしそうしているのも束の間、爆発によって発生していた煙幕から呻き声が聞こえ、2人はそこから出てきたのものに身構えた。それはアームズメモリを使用していたあの男性であった。

「ぐおおおおおお！！ ま・・・まだ・・・俺はああああああっ！！」

もがき苦しむ男性は直後に泥と化して消えてしまい、彼の手に握っていたメモリが地面に落ちると直後にパリンツと破損してしまった。



愛翔は壊れたアームズメモリを拾い上げる。

「・・・これは、あの男が変身に使用していた奴か。けど何なんだこれは・・・それにあの男もなぜ消えたんだ・・・？」

得体の知れない道具に愛翔は疑問に抱くが、その時に空からデ NRA イナーが迎えに上がってきた。

「そろそろ時間か。帰るぜ、カリス」

「ああ・・・」

先に乗り込んでいく電王を後にして、愛翔はスピリットのカードで元の姿に戻ってデ NRA ライナーに乗り込もうとしたその時、

「お兄ちゃん！」

後ろから聞き覚えある声が聞こえ、背中を抱かれる。それは愛翔が安全減へと非難させていた美奈子で、何やら寂しそうな顔をしている。

「行かないでお兄ちゃん。ミナと遊んでほしいよぉ・・・」

遊びたがっているようである。愛翔は彼女の顔に向いて両肩を優しく掴んだ。

「ごめんな、お兄ちゃんはどうしても行かなきゃいけないんだ。けどこれだけは教えてあげるよ。未来の先でいつか会える、その時にお前と遊んでやるさ」

「本当・・・？」

愛翔は頷く。

「絶対に会えるさ」

小指を出す愛翔を見て、美奈子も小指を出して指切りをする。

「美奈子！」

その時父親の直春がやってきた。どうやら美奈子は勝手に飛び出してしまったらしく、愛翔はやれやれと呆れてしまった。

「駄目じゃないか。彼の言うことを聞かなかったら危ない目にあつてたんだぞ」



何処からか語りかけてきたような声に愛翔は驚く。

「ああ悪い、俺の中にいる奴だ」

「中？」

（そう。お前が見ているのは俺が憑依されたモモタロスっていうイマジンで・・・）

電王はベルトを外して変身を解除した直後、愛翔の目に見えたのは青年と赤い鬼の姿がいたのだ。

「俺が電王に変身していた人間。名前は木幡康博だ」こはた やすと

「憑依・・・イマジン・・・そういえば、さっきの猿も！」

「あれは悪いイマジンだから違う。俺はそんな奴じゃねえからな」

「・・・それで話を戻すけど、俺はお前の意見に賛成だ。モモタロス、これはオーナーに話して許可を貰おうよ」

「そうかあ？そう簡単には・・・」

「いえ、ぜひともやってあげなさい」

さらに第4者の声が聞こえてくると、今度は紳士みたいな男性が現れた。

「貴方は・・・？」

「デンライナーのオーナーでございます、お見知りおきよ。・・・先程の戦いを拝見させてもらいましたところ、素晴らしい功績の故に貴方の頼みをかなえさせても構わないでしょう。本来は禁止ですが、今回だけは特別です」

オーナーから許可をもらった愛翔はありがたくお礼をする。

「その代り、こちらをお願いを聞いてはくれないでしょうか。詳しいことは後程説明しますので・・・」

「お願いですか・・・分かりました」

愛翔はお願いを引き受け、親子の元へと戻ってきた。

「乗せてくれるようです。さあ、どうぞ」

「こんなお礼まで・・・助かります」

「お兄ちゃん、ありがとう！」

デンライナーに早速乗り込むと、入り口で乗務員と思われる女性が

明るい笑顔で迎えてくれた。

「デンライナーによるこそ。間もなく発車しますので、足元にお気を付けてご乗車ください」

奥には食堂車へと繋がっており、そこにはチャーハンを食べているオーナーや、コーヒーを飲みながら寛いでいるモモタロスの姿があった。愛翔達は空いている席に座って窓を見てみる。

「凄いいねパパ、こんな電車があるなんて」

「そうだな美奈子」

するとデンライナーは動き始め、空へと飛びあがる。わぁっと美奈子は空からの眺めを見て喜び、ナオミが運んできたジュースを飲みながら楽しい時間を過ごしていく。その一方で運転室にいる康博は彼女のために普通の電車が走る路線を混じりながら他の電車とすれ違ったりと、満足できる程度の運転を行う。

5分程して会社先付近へと到着して直春はデンライナーから降りると、入り口の前にいる美奈子と愛翔に顔を向いた。

「ありがとう。これなら間に合いそうだ」

「さあ、早く行ってください。貴方の新しい生活が待ってます」

直春は頷いて2人に背を向く。

「パパ、頑張つてね！」

「うん。美奈子も親戚の人と仲良くな」

直春は会社へと出勤した。社長になることは会える日が少なく、いつ戻るかは分からない。それに美奈子の母も既に亡くなっている。1人となる彼女は親戚に預けられる予定とされていた。

少しさみしそうにしていた美奈子だが今は違う。満足できるような顔でいた。

「お兄ちゃん。パパを会社に連れて行ってくれてありがとう」

美奈子は愛翔にお礼を言う。

「正直言つと俺のおかげじゃないよ。人1人では不可能だけど、それ以上なら重たいものでも運べるような感じた。それで、もう帰るか？」

「うん・・・ほんとはまだ遊びたいけど、親戚の人に心配するかもしれないから帰る」

正直に話した美奈子。2人はデンライナーに戻ると自宅の前まで戻ってきた。

「じゃあ、ここでお別れだ」

美奈子はデンライナーから降りて満面の笑顔で愛翔に手を振った。

「お兄ちゃん、ミナはお兄ちゃんに会えてよかったよ！ずっとお兄ちゃんのことを忘れないから！」

「  
・  
・  
・  
ああ  
」

デンライナーの扉が閉まり、ゆっくりと時間の中へ走り去っていった。

「……あの兄ちゃん、カッコよかったなあ……」

手を振り終えた美奈子は未来から来た愛翔の思い出をしっかりと胸に刻み、親戚の家へと歩いていった。

[illegible]

「ふう」

「お疲れだな。コーヒーでもどうだ？」

一仕事終えた愛翔は康博から渡されたコーヒーを飲む。ふと勢いよく飲んだのか、あまりの苦みに吹いてしまった。

モモタロスの方向に。

「あぢやあああつ！？」

「あ  
・  
・  
・  
」

愛翔はぶっ掛けられたモモタロスに固まった直後、モモタロスが愛

翔の胸倉をつかんできた。

「おいテメエツ！！俺にコーヒー吹きやがるとはいい度胸だなあ！？」

「ち、ちが、これは事故だ！！」

殴られそうになつていた愛翔だが、自力で振り払った直後にモモタロスがマウントを仕掛けてきた。

「ストップだモモタロス！車内暴力禁止！」

「黙れるかってんだ康博！せつかくの俺の休息を・・・」

「コラアアアアアッ！！」

止めようとしていた康博の前に新手の声が聞こえたかと思うと、勢いよくモモタロスを殴りつけた少女が現れる。

「え？ええっ！？」

見た感じでは小学4年生くらいの子供だ。だがその様子からにしては最年少の空手家と思うような顔をしており、怖いようでそうでもないような感じだった。少女は愛翔に深くお辞儀をする。

「すみません、私んとこのバカが世話になってしまって」

「は、はぁ・・・」

「・・・って、バカとはなんだハナクソ女！！」

そう叫んだ瞬間に少女はモモタロスにボディীবローを噛ます。

「ふうー・・・」

息を吐く姿はまさしくも空手そのものだ。

「っ、強いなお前・・・子供なのに」

「愛翔、実はあれで19歳なんだぞ？」

「えっ！？」

もう一度少女を見て疑う。これで19歳とはありえないのだ。

「そう。訳あって幼女になっちゃったのよ」

「訳？それって・・・時の運行での？」

「そういうことが起きないために、できるだけことは避けているんだ。時の運行を変えることは時間の干渉に繋がってしまい、それは俺達だけでなくイマジンでも起こしてしまう。そのために俺、電王が守っているわけだ」

電王としての役割を聞いた愛翔は納得した。それにしてもこんなことで幼くなるというのは実に恐ろしいことだろうと、冷や汗をかいてしまう。

「紹介まだだったよね。私はハナ、康博からはコハナって呼ばれているからよろしく」

「ああ。俺は黒崎愛翔。電王とは違ったところで戦っている仮面ライダーで、名前はカリスだ」

愛翔がカードを取り出して自己紹介していると、今までチャーハンを食べていたオーナーが話しかけてきた。

「忘れていたところですが、貴方をお願いのことを説明はしてませんでしたねえ」

「許可の代わりにのことですか？」

「ええ。これは単刀直入で言うと、あなたにも手伝ってほしいことです」

オーナーはチャーハンを食べ終え、愛翔によるお願いのことを説明し始める。

「今そこにいる康博君、そして共に戦う4人のイマジンの内、リュウタロス君というイマジンが突如起きた時間の干渉によって行方不明となってしまうのです。それだけでなく、今この世界自体も干渉が起きつつあると感じた私達はこの世界の調査をしたところ、何者かによる干渉の発生で世界同士の融合が起きているらしいのです」  
「世界の融合？・・・それに行方不明って、手掛かりはないんですか？」

「その手掛かりを探そうと、残り2人のイマジンであるウラタロス君とキンタロス君が調べているのですが、もうそろそろ戻ってくる

はずですねえ・・・」

するとオーナーの言ったとおりに青い人物と黄色の人物が扉から現れた。

「只今戻ってきたでい！」

「・・・おや、見慣れない人もいるね」

青の人物が愛翔に近づいた。

「うゝん・・・君、女の子に好かれてるね？」

「・・・は？」

愛翔は頭に”？”のマークをしながら啞然とする。

「こういう純粋な男ってモテられるタイプなんだよね。君ももしかしたら、僕みたいに神様から選ばれて生まれてきた人材なのかもしれない・・・だがそうだととしても、」

更に青の人物が愛翔の顔にズイツと近づける。

「自分次第でレベルも変わる。要は自分の生き方さ」

（うわ、ウゼえ。こいつナルシストだろ・・・）

怪人なので表情は分からないが、ウザい。

「あんたも少しは黙りなさい！」

するとコハナがまたもやボディブローでノックアウトさせてしまった。ハッキリ言ってこの少女、強すぎる。

「・・・康博、お前の仲間ってこんなに酷いのか？」

「ま、まあね。あのイマジンはウラタロス。見た目通りにナルシストだ」

「うわあ、絶対にフラれて泣くと思うよ・・・」

嫌われる姿を想像しただけで同情してしまふと思っていたその時、

「ナヌツ！？泣く！？泣けるでえっ！！」

「うおっ！？なんだよお前！！」

今度は黄色い人物が動き出した。

「そいつはキンタロスだ。「泣く」って言葉を聞くとああなるんで・・・」

こいつも馬鹿か。



「・・・それでキンタロス君、結果は？」

「思い当りありそうなところも手当たり次第探したんやが、全く見つからへんかったわ。それどころか、干渉も酷おなりおるで」

「そうですか。これは大変なことになりましたねえ・・・」

時間もそんなに残されていなようであるとオーナーは悩みこむ。その時愛翔はあることを思い出し、キンタロスに話す。

「キンタロスって言ったな。俺に気になる所があるんだけどついて来てくれないか？」

「気になる所か？ならついて来てやるで」

キンタロスは愛翔についていくことにし、愛翔が行く場所へと向かい始めた。

果てしたその場所とは・・・？

## 第8話「時間の干渉」（後書き）

第8話です。

ようやく変身者が登場しましたが良太郎君ではなく、オリジナルキヤラという感じになってしまいましたっ本当に申し訳ありません。この作品は原作キヤラも登場する予定ですけど、ほとんどがオリジナルのキヤラです。

さて、今回の話ではなんとリュウタロスが消えたという奇怪な事件が発生しました。はたして行方はどうなのか？

そして愛翔とキンタロスが向かう先とは何処なのか？

まだまだ始まったばかりのこの作品にこうご期待ください。

## 第9話「悪化する暗雲と不気味な幽霊」

「えっ！？アイ君つてば、助けに出かけたの！？」

「ああ。代わりに料理任されて・・・やはりヒーローって奴は放つてはおけないらしくてな・・・」

健介はあの後に料理を仕上げるが、美奈子は愛翔がいらないことに気づいて事情を聞いていた。

「なんだか大変ね・・・けど、アイ君の戦いは終わったんだよね？」  
「もしかしたら、昨日出てきたアレじゃないか？だとしたらあり得るよ」

健介はアームズドローパントのことを言うと、美奈子は机をバンツと叩く。

「健君！ミナ達も助けに行くよ！」

「ええっ！？」

なんと助太刀という無茶なことを言ったのだ。健介は否定する。

「無理だぜ美奈ちゃん！相手は重火器もあるんだぞ！？」

「うっん、大丈夫よ！ミナにはアイ君だけじゃなく、もう1人強い味方がいたの。きつと助けてくれるよ！それに・・・」

「それに・・・？」

「・・・ミナはね、10年前に昨日現れたのと同じ化け物が現れて、そこへ黒い人と赤い人が来て守ってくれたの。それも、黒い人はアイ君にそっくりな人で、その人も助けてくれるんじゃないのかなって・・・」

「愛翔にそっくりな奴？まさか・・・」

「けど助けに来てくれるよ！さあ行こ、早くアイ君を助けに行かないと！」

美奈子はすぐに玄関から外へ飛び出そうとしたその時、開ける直前に扉が開き、そこから愛翔が現れる。

「アイ君！？」

「ん？美奈・・・うわぁっ!？」

しかし開けたのが仇だったのか、美奈子はドアノブを掴めずに愛翔の体へ倒れ掛かってしまった。危ないと愛翔はキャッチするが、それと同時に愛翔の体に何かで押し付けられるような衝撃が走りだした。

なんというかこれは・・・柔らかいようであるが・・・

（ちょ・・・胸があたってる・・・!？）

これはギャグでありそんな展開、美奈子の胸がグニッと押し付けられていたのだ。

この時に愛翔の心臓のスピードが徐々に上がっていき、緊張が走りだす。

「み、美奈子・・・」

「え？・・・あつ、ごめんアイ君!開けようとしたら勝手に開いて・・・」

慌てて離れる美奈子を愛翔は顔を赤くしていた。

「いいよ別に、俺の不注意だ・・・。それはさておいて美奈子、健介、紫色の変な奴を見なかったか？」

「変な奴？どういうこと？」

「実は人探しの手伝いしてさ、時間がないらしいんだけど・・・」

「そうなんだ。けど、紫色の人なんて見てないよ？」

当然だろうと愛翔は返事を聞くと、2人に背を向けて次のことを言った。

「2人共、今まで世話になった・・・」

「・・・え？」

2人はいきなりの言葉に啞然となる。

「どういう意味だよ愛翔!なんで世話になったって・・・」

「もしかしてアイ君、また戦いに行くの・・・？」

電王と共に別の世界へと行くとは言えず、愛翔はその場でたまったままにいる。

すると美奈子が無理矢理にも愛翔を美奈子の方向に向け、直後にバシッと頬を叩いたのだ。

「アイ君のバカ！！ミナ達を置いていくなんてズルいわよ！！」

「置いていくって・・・お前達じゃ無理だ！！死に行くようなことだぞ！！」

「それでもミナはアイ君を守る！！あの時助けてくれたように、今度はミナや健君が助けるから！！だから・・・！！」

その時に美奈子の目には涙が見えていた。怖い目にあうことだといふのに、怖気づかずな顔で愛翔の目をじっと見つめる。

「・・・やはりお前は相変わらずだな」

「え・・・？」

愛翔は予想していたかのように怒りを鎮め、美奈子に言う。

「止めても無駄だろうと思っていたからな。今更残るなんてお前らしくはないし・・・それに今の芝居で泣けただろ、キンタロス？」

愛翔が声を出した瞬間に愛翔の体から砂が飛び出し、その砂が不思議にもキンタロス本体へと実体化する。

「えっ！？」

「な、なんだこいつ！？」

2人はいきなり現れたキンタロスに驚く。

「こいつがその紫の奴を探しているイマジン、金太郎のイマジンごとキンタロスだ」

「訳あって愛翔と知り合ってな、けど嬢ちゃんの思いに泣けたで！嬢ちゃんが行きたがってるのなら行かせてもええやろ」

「そうだな。健介はどうする？残って、世界の破滅を待つか？」

「は、破滅？」

この言葉に2人はちんぷんかんぷんとなった。

「実は人探しのついでに、この世界に干渉が起きてると聞いたんだ。

早くしないと何が起きかわからないが、最悪でも滅ぶかもしれない。  
・・・そのために俺は・・・！！？」

その時に愛翔は瞬間にカリスへと変身し、カリスアローで何処からか飛んできた流れ弾を弾き返した。

「あれは・・・！？」

それを見た愛翔は驚いた。そこにいるのは白いカミキリムシの姿をした怪人で、その周りには白いゴキブリがうじゃうじゃといるのだった。

「ジョーカー！！ダークローチ！！」

愛翔はその正体を叫ぶ。

その正体は53体目で何の始祖でもない世界のリセッターであるジョーカーと、バトルファイトの勝利によって放出されるダークローチという怪人だが、同時に愛翔はおかしく感じていた。実はジョーカーとダークローチの色は白ではなく、黒の姿であるのだ。そうしていうちに白いダークローチは一斉に愛翔へ走ってきた。きゃあつと悲鳴を上げる美奈子だが、愛翔は必死で守ろうと立ち向かい、カリスアローで攻撃していく。

「俺もやってやるで！！」

キンタロスも鉞を手に加勢する。

鉞担いだ金太郎の姿そのものが見えており、得意の張り手と豪快な鉞のスイングでダークローチを次々と粉碎していくのだが、ジョーカーは新しいダークローチを誕生させていく。

「俺の仲間に・・・手を出すなあっ！！」

## EVOLUTION

愛翔はバックルに付けているカリスラウザーに”エボリューションパラドキサ”を通す。

すると愛翔の前に13枚のカードが現れ、カリスラウザーに吸収された瞬間にカリスの姿が赤へと変化を遂げてしまう。

カテゴリーKと融合を果たすことにより進化するカリスの強化形態。その名もワイルドカリスだ。

愛翔はカリスアローを手放して、両腰に新しく装備されているワイルドスラッシャーを引き抜いてダークローチを凄いスピードで切り裂いていく。

「うおおおおおっ!!」

愛翔はこの勢いでジョーカーへ接近するが、ジョーカーはブーメランで応戦。その両者の実力は互角だった。

「ほおー。お前なかなかやるじゃん」

「!!! ジョーカーッ!!!」

ジョーカーはついに喋りだし、愛翔は全力で迎え撃つ。

「うおらあっ!!せりやあっ!!」

「よつと、」

ジョーカーは愛翔のワイルドスラッシャーをかわしては受け止めて攻撃を一切当てずに防御していく。しかしそれで愛翔はジョーカーを外へと押しており、このまま2人を危険犯すまいと集中する。すると空からデンライナーが現れ、康博、モモタロス、ウラタロスが駆け付けにやってくるのであった。

「キンタロス、これを!!」

康博はデンオウパスをキンタロスに投げ渡す。

「オーナーから特別にだつてよ!俺達も戦わせてもらうぜ!」

「それじゃあ行きますか」

モモタロスとウラタロスもパスを持っており、キンタロスを含めた3人はベルトを呼び出して腰に巻きつけ、モモタロスは赤、ウラタロスは青、キンタロスは黄色のボタンを押してパスをセタツチする。  
「変身!!!」

SWORD FOAM

ROD FOAM  
AXE FOAM

そして康博は赤い携帯電話、ケータロスをつけたデンオウベルトを呼び出し、それと同時に現れたデンカメンソードにパスをセットする。

「変身!!」

LINER FOAM

4人の電王はそれぞれに別の姿へと変わる。

桃の形をした仮面ライダー電王・ソードフォーム。

亀の甲羅の形をした仮面ライダー電王・ロッドフォーム。

斧の形をした仮面ライダー電王・アックスフォーム。

そしてその電王の最終形態となる仮面ライダー電王・ライナーフォーム。

4人が電王に変身したと同時にそれぞれの言葉が発せられる。

「俺、参上!!」

「お前達、僕に釣られてみる？」

「俺の強さに、お前等が泣いた!!」

「さあいくぜ!!ここからは俺達の時間だ!!」

それぞれの武器を手に持ち、いざ前へとダークローチ、そしてジョーカーへ突撃を開始した。



「でりゃあっ！！！」

最初にモモタロスがジョーカーヘデンガッシャーを振り回すが、隙だらけな彼にはジョーカーに攻撃が当たるわけなくかわされていく。「あゝもうつ！！避けるなって！！」

「お前が単純すぎるだけだろ」

ジョーカーはいけいけドンドンに振り回すモモタロスに痛い愚痴を吐いた。

「んだとデメエツ！？」

「俺は馬鹿な奴らには興味ない。けど、ここにいる用も何もない。俺はこれで帰らせてもらっぜ」

「！おい待てっ！！」

ジョーカーはダークローチを残して戦線離脱をした。

キンタロスは美奈子と健介を安全な場所へ送りつつ、ダークローチを2人から守ろうと必死でいた。

「康博、これではキリが無いんじゃないか！？」

「大將は逃げられたけど、今はこれを何とかしなきゃね・・・！」

「ならばコンボと行くか。一旦俺のもとに集まれ！」

康博は何か秘策があるようで、一同は外へと出て康博のもとに集まる。

「燃えてきたで！！」

「そろそろ3枚におろすか」

「行くぜ、俺の必殺技・・・！」

F U L L   C H A R G E

イマジン達は自分のバックルにパスをセタッチしてチャージを行う。

W I L D

愛翔はワイルドスラッシャーを合体させ、カリスアローと接続と同

時に現れた”ワイルド”のラウズカードを通す。

U R A R O D , K I N A X E , R Y U G A N , M O M O S W O R  
D

康博はデンカメンソードに付けられている4つのカメンをレバー操作で一周させる。すると後ろから金色のレールと共にオーラライダーが現れ、5人のライダーはレールに乗りながらダークローチへと突っ込んでいく。

「だああああああつ！！」

先頭から康博のデンカメンスラッシュ。

次にモモタロスのエクストリームスラッシュ。

更に次にウラタロスのソリッドアタック。

そのまた次にキンタロスのダイナミックチョップ。

そして愛翔のワイルドサイクロンが電車のように流れながら一掃される。

「・・・ダイナミックチョップ」

後にキンタロスは自分の繰り出した技の名を言った。

「す、すげえ・・・」

「・・・」

技が決まり、その迫力に唖然としていた美奈子と健介だが、美奈子には特にモモタロスの顔を見てふと何かを思い出す。

「あの桃の人って、どこかで見たような・・・」

「あ？俺に何か用か？」

モモタロスは美奈子に文句あるようにして顔を向けるが、そのそばにいた愛翔はクスクスと笑いながら変身を解く。なにせモモタロスの前にいるのは未来の美奈子だと気付いてはいないのだから・・・。（・・・けどあのジョーカーは何か違っていた。あれは一体・・・）突然と現れたジョーカーに愛翔の顔は深刻な顔へと変わる。そう思いながら一枚のラウズカードを取り出した。

全体が黒く、真ん中には緑色のハートをした絵が描かれており、端には”J O K E R”と書かれている。

このラウズカードにはジョーカーが封印されている。

思えば、バトルファイトが大詰めになっていた時に苦戦していたのがこのアンデットで、彼が存続しているようでは危険な存在であった。

ジョーカーがバトルファイトに勝利すれば、彼の体内及びモノリスからダークローチが発生し、全てを滅ぼしてしまう。そんな愛翔はパルドキサの力を手に入れてワイルドカリスとなり、ダークローチの発生の前に封印を完了したのである。

だがあのジョーカーは白い。いったい何者だろうか・・・？

そんなことを思っていたその時、7人に激しい地震が発生する。

「な、なんだ!？」

康博はデンカメンソードを杖代わりにして揺れに耐えていると、デンライナーからナオミのアナウンスが鳴り出した。

『皆さん、デンライナーに乗り込んでください！ここは危険です!』

「危険・・・だって・・・!？」

「とにかく乗ろう！このままじゃ本当に危険だ!」

急いで乗り込んだ一同を、デンライナーは空へ発進を始める。

揺れのせいで膝が笑う一同は食堂車のところへやってくると、オーナーが待っていたかのように彼らの前で立っていた。

「オーナー、一体何が起きたんですか！？この地震は何が始まるうと・・・！」

愛翔はオーナーに言うと、オーナーが後ろ側に振り向いて話し始めた。

「どうやら、異次元との繋がりが始まるうとしているようですねえ・・・このままでは非常にいけません」

世界の融合のことはオーナーから聞いてはいるが、もしそうなったらこの町はどうなるのだろうか？

愛翔は質問してみる。

「融合したらどうなるんですか！？」

「おそらくは・・・」

オーナーは再び彼らのもとに振り向いて答えた。

「貴方がたがいる街が大幅に変わってしまうでしょうねえ」

「ま、街が変わる！？そんな・・・！！」

康博は聞いただけで絶望した。それは美奈子と健介にも影響する。

「ミナ達、どうなっちゃうんだろう・・・？」

「あーもう、ワケが分かんねえよ！！変な化け物が出るわ、街が変わるわで分かんねえって！！」

「落ち着け2人共、まだ終わったわけじゃないんだ！」

「愛翔君の言うとおりです。こうなれば最後の手段として、駅長にお話ししましょう」

オーナーは何か提案があるらしく、愛翔はその駅長についてのことを聞いてみた。

「その駅長つてのは？」

「はい。時を走る列車、デンライナーなどの経路を繋ぐ駅長でございます・・・」



「ハイ終了。次」

「アイく〜ん！？ミナはまだ自己紹介終わってないのに〜！」

充分しているだとツツこみ、健介へとバトンが渡された。

「えっと、健介です。特に言うことなんてないけどよろしくお願いします・・・」

以上。自己紹介は終わって普段通りの空気に戻るはずだと思っていた時だった・・・

「それじゃあ紹介が終わったところで美奈子ちゃん、よかったらしの間だけでも話し合ってみないかい？」

ウラタロスはやはり美奈子狙いでナンパをする。愛翔はこれを見て凄くウザいと思っているが美奈子は曰く、

「ごめんなさい。お誘いはうれしんですけど、ミナにはアイ君って言う未来の婚約者がいますから止めておきます」

「だ、誰が婚約者だ!？」

ツツこむ愛翔にウラタロスはふと笑う。

（あーあ、羨ましいなあ愛翔の奴・・・）

今まで置いてけぼりな健介は窓を眺めていると、ナオミがコーヒーを差し出す。

「景気づけにどうですか？」

「あ・・・す、すみません・・・」

ナオミの明るい笑顔に健介は苦笑いでコーヒーを受け取るのだが、その時に愛翔は彼の様子を見て叫んだ。

「待て健介！そのコーヒーは・・・!」

だが時はすでに遅し、健介はあまりにもものマズさに吐いてしまった。愛翔の顔に。

「ぎゃああああっ!..!」

見事にぶっ掛けられた愛翔は怒鳴り出す。

「健介テメエッ!!」

「ウエアアアアアッ!?!」

愛翔は健介の首を絞めつけようと暴れだす。まさにモモタロスが怒っているのと同じ様子だが、それを見ていたウラタロスと美奈子は面白い光景を見て笑っている。

このいつもながらなる風景を康博は見ていて思う。  
また新しい仲間が増えたと・・・

だがそう思っていたのも束の間だった。

突然とデンライナーの走行スピードがダウンし、電気がうす暗くなる。

「なんだ?故障か?」

トライアルである愛翔がいち早く気づき、締め付けていた健介を解放する。

だんだんとスピードが落ちていくデンライナーの傍に電気が一斉に消えてしまい、ワツと驚くように騒ぎ始めた。

「どうなってるんだ!?電気が消えたぞ!?!」

「美奈子ちゃん、僕から離れないでね!」

モモタロスは何事かと周りを見回し、ウラタロスは慌て始めて美奈子を落ち着かせようとフォローする。

すると非常灯が点滅して周りは青白い光となるが、その中心でいつの間にかいたのか、白い髪形をした青年が顔を下に向けて立っていたのだ。

「何だお前は!?!」

愛翔は青年に問いかけると、青年の顔が上がる。その顔を見た愛翔は思わずゾツとする。

まるで死人のような顔だからだ。

「・・・俺を見たな・・・？」

「何？」

すると青年が黒いベルトを取り出して腰に巻くと、不気味な音楽が鳴り出した。さらに右手には驚くことに、康博と同じライダーパスが握られている。

「変身」

## SCULL FOAM

パスをセタッチすると青白い炎が現れ、バリアジャケットに装備される他その姿に康博とコハナ、そして目が覚めたキンタロスを含むイマジン達は驚く。

黒い姿に、額には髑髏のマーク。  
モモタロスは叫んだ。

「あいつは幽霊野郎!？」

その幽霊は仮面ライダー・・・

仮面ライダー幽汽だ。



## 第9話「悪化する暗雲と不気味な幽霊」（後書き）

第9話でした。

まさかまさかと、デンカメンスラッシュに乗って必殺技を連発するという夢のような技に自分も脱帽です。

今回はかりは何かとグダグダですが、次では突如現れた仮面ライダー幽汽に必見です。

それと明日、いよいよオーズが放送されるようなのでぜひ第1話を見たいと思ってます。そんでもって、オーズを本作で出そうとしている予定でございます。

はたしてどのような感じにオーズが登場するのかも楽しみにしてください！

## 第10話「歌と警察と地獄兄妹とコイン」

駅長の元へと急行していた康博たちの前に、突如幽霊仮面ライダーの幽汽が現れた。

幽汽は両腰にあるサヴェジガッシャーを組み合わせると剣にすると愛翔に近づいていく。

「ヒャツハアアツ!!」

幽汽は勢いよく振り下ろすが、カリスに変身と同時にカリスアローで受け止める。後ろには健介が降り、避けたら切り殺されていたからである。

「ま、愛翔・・・!!」

「離れる健介!こいつは俺を狙ってやがる!」

標的が愛翔なら話は早いと外へ出ていく。それを幽汽は逃がすわけなく外へ出て追いかける。

「オーナー、あの仮面ライダーは俺達が倒したはずじゃないんですか!??」

「確かにそうですけど、変身する前の青年は何か様子がおかしかったようですねぇ・・・特にモタロス君は何かに気づいていたようです・・・」

「ああ、途轍もなくヤバいほどの匂いだ。アイツは前のような奴じゃない・・・!」

このままでは愛翔が殺されてしまうと、康博は黙っていられなかった。

「どうしよう、アイ君があんな怖い人にやられちゃったら・・・」

「美奈子ちゃん・・・」

美奈子もだんだんと不安になり、康博はベルトを巻いて彼女に言った。

「大丈夫だ。お前の彼氏は俺が・・・いや、俺達が助ける。それまで待っててくれ」

S  
W  
O  
R  
D  
  
F  
O  
A  
M

「よっしやあつ！いくせい！いくぜい！いくぜえ！！」

「貴方……もしかして、10年前にミナを助けた赤い人……！」

「んなことより康博！行くぞ！」

（そうだな。それじゃあ、行ってくる！）

[illegible]

「くっ、くっくっ……！」

こうなればと『リモートタイプA』でカテゴリーK3体、コーカサスアンデット、ギラファアンデット、タランチュラアンデットの召喚に加え、バックルに戻したカリスラウザーに『エボリューション』

パロドキサ』でワイルドカリスへと変身する最強チームで応戦した。  
「うおおおおお!!」

愛翔達は一斉に走り出す。5対1へと変わったこの戦況に幽汽は一步も動かず、そのまま攻撃を受けるのかと思いいながら突っ込んでいく瞬間、

スルツ・・・

「えっ・・・!？」

「・・・・・・・・」

なんと幽汽の体を愛翔達はすり抜けていったのだ。そのせいで攻撃はスカとなり、幽汽に隙を見せられる。

「フンツ!」

「うわぁっ!？」

横一線振り回したサヴェジガッシャーが真空波となって5人に直撃、分身していたカリスや召喚していたアンデット達が消えてしまう。

（愛翔!）

そこへ康博がデンガッシャーを手に現れる。愛翔は立ち上がり、幽汽を押し返そうと立ち向かう。

（大丈夫か!？）

「ああ。けどこいつ、幽霊みたいにすり抜けやがった!只者じゃない!」

（何だって!？）

攻撃をしていく康博改めモモタロスは、幽汽のすり抜ける体にイラついていた。

「だぁー!なんでこいつに攻撃が当たらないんだよ!？」

「当然だよ」

その時に幽汽は言った。

「だって俺、死んでるからさ・・・」

## FULL CHARGE

幽汽はパスをセタッチした。康博は危険を感じてモモタロスに警告する。

（離れるモモタロス！この距離はマズい！）

「もう遅い！死ねえ！！ターミネイトフラッシュ！！！」

サヴェジガツシャーを地面へ振り下ろした直後に衝撃波が康博に襲い掛かり、その後ろにいた愛翔も間寄贈で吹き飛ばされる。

煙が晴れた時には憑依が抜けて変身が解除した康博とモモタロス、そしてダウン寸前の愛翔が砂の上で倒れる。

「くっ・・・お前のバリアで助かったのはいいけど・・・」

「ああ。リフレクトを破る程の威力なんてありかよ・・・！」

あの時に『リフレクトモス』を使ったのはいいか、幽汽の必殺技があまりにも強力なために防御しきれなかったのだ。

幽汽はそのまま彼らに近づいてくる。

「さあ、俺に呪われる。クズどもが」

「誰がテメエなんかに呪われるか・・・！！」

モモタロスは諦めていないが、今の状態では無理だ。やられてしまうのがオチである。

サヴェジガツシャーは愛翔に向けられた。

「止めだ」

「！！！」

振り下ろしてきたところをワイルドスラッシュで受け止めるが、どんと幽汽は力を強くしていく。

（くっ、ここまでか・・・！）

絶体絶命となる愛翔。踏ん張りに限界が来た次の瞬間に何処から歌声が聞こえてくる。

お化けなんてな〜いさ、お化けなんてう〜そさ

ね〜ぼけ〜たひ〜とが、見間違〜えた〜のさ

だけどちよつと、だけどちよつと、ぼ〜くだって怖いな

お化けなんてな〜いさ、お化けなんてう〜そさ・・・

「な、何だこの歌・・・？」

「うおおおおおおお！！？」

その時、幽汽がサヴェジガッシャーを手放して頭を抱える。

「やめろおおおお！！その歌を歌うなあああああああ！！」

幽汽が我を忘れていることにチャンス到来だと、愛翔はワイルドスラッシャーで切り込んで行く。すると攻撃が当たるようになり、一気に形勢を逆転させる。

「悪霊退散！！」

「ぐうわああああ！！？」

痛恨の一撃を与え、弾き飛ばされる幽汽は後ろに現れたオーロラへ飛び込んで消えてしまった。オーロラが消えるとそこには黒い衣装を着ている幼女が愛翔の前に現れ、愛翔にお辞儀をしたと思いきやオーロラの中へと去って行った。

「何なんだ、今の・・・」

愛翔は変身を解いて康博たちの元へと来る。

「立てるか？」

「なんとかな、モモタロスも無事だし・・・」

康博がモモタロスを見る。だがそのモモタロス顔は妙にも疑いを持つ顔となっていることに気づくのはその数秒後だ。

「モモタロス、どうした？」

「・・・イマジンだ」

「え？」

2人同時に声を出した。

「あの女からイマジンの匂いがしやがった。それも、さっきの男と同じ匂いがよ」

「ええっ！？」

モモタロスはイマジンを察知する嗅覚で追いかけているのだが、今回の幽汽と幼女には同じイマジンの匂いがしたとすることで2人は驚く。

「まさか！人型のイマジンなんて聞いたことがないよ！イマジンに憑依された人間じゃないのか！？」

「いや、あの匂いは奴自身がイマジンそのものだった。俺でもありえねえことだけどよあ・・・」

「信じられないな・・・けど、アンデットだったらあり得る。」

Q、K、ジョーカーには人間に変身できるってことを聞いたからなさらに細かく言えば、愛翔自身もトリアルへ変身ができるがそんなことを一度もやったことはない。むしろ自分がどれほど恐ろしい姿になっただけでも身を震わせてしまう。

だがその時、デンライナーの汽笛が鳴ったと思って見てみると、何とデンライナーが動き始めているではないか。

「ちょ、勝手に動くなっ！？」

「乗るぞ！」

3人はデンライナーが加速する前に乗り込み、奥で待っている美奈子達の元へと向かった。

「あ、戻って来たみたいだよ」

「！ アイ君！」

走っていたせいで息が上がっていた3人の前に美奈子が駆け寄る。

「アイく〜ん！無事でよかつた〜・・・」

「お、おい！抱き付くな！？」

抱き付かれている愛翔は、あのライダーと少女が気になっていたが忘れることにし、電力を取り戻したデンライナーは駅長の元へと進んでいった。

そして目的地が見えてくるのはその10分後だ。

「康博、あのデカい奴は何なんだ？」

見えていたのは赤くデカい列車だった。

「あれはキングライナー。あの列車はあらゆる時間を繋ぐ中央駅になつていて、あの中に駅長がいるんだ」

「そうか・・・そういや、オーナーと駅長って知り合い関係があるみたいだけど、どうなんだ？」

「俺でも知らないほどに縁があるらしいよ。しかも驚くことに・・・」

「

そういつて康博はニヤニヤとした顔になる。

「驚くことに・・・何んだ？」

「見れば分かる」

愛翔は訳が分からないままθειながら、キングライナーへと到着して駅長のいる部屋へとやってきた。

そしてこの時、愛翔は康博がニヤニヤしていた理由が今ハッキリと理解される。

「お、オーナーさんが・・・！」

美奈子も健介もあり得なかった。

「ど〜も」

「お久しぶりです、駅長」

駅長の正体はオーナーにそっくりな人物だったのだ。



「もしかしてオーナーさん……実は双子なんですか？」

「気のせいです」

[illegible]

「……なるほど、世界の融合ですか……」

早速干渉の原因のことを説明するオーナーを駅長は理解した。

「駅長さん、何か方法ってありませんか？ダメもとでもいいので・・・」

•  
L

「ええ、あるにはありますよ」

「えっ！？それは？」

愛翔は駅長に残されていた提案を聞こうとすると、駅長は誰かを呼ぶように指をパチンと鳴らした。

「入ってきてくれるかな？」

駅長そう言つと、奥にある扉から若い警察官と、康博そつくりの青年と藍色のイマジンがやってきた。

「今度は康博が2人!？」

「すごいすごい！ヒロ君にそつくりだよ！」

またまた驚く愛翔達。特に美奈子は康博をヒロ君と呼ぶようになり、もう1人の康博は何となくだが照れてしまう。

「ヒロ君ってのは止してくれよ。木村でいいんだからさ」

「木村？」

愛翔は康博と木村の顔を見比べる。顔が瓜二つなら双子しかありえないことだからだ。

「愛翔。あいつと俺は双子なんかじゃないよ」

「双子じゃない？じゃああいつは誰なんだ？」

康博からは双子ではないと答えられ、木村に何者なのかと尋ねてみると、彼は正直にこう言った。

アナザーワールド

「俺は反転世界に存在する木幡康博、つまり同一人物だ。とはいえ名前が同じだと分らないから、俺は木村康弘って名前で呼ばれてね。そしてこっちにるのが俺の相棒イマジンのテディだ」

「テディです」

パートナーとなるテディは礼儀よくお辞儀をする。少なくともこのイマジンとはモモタロス達とは違って賢いようだと愛翔が思っているのは余談なことだが・・・。

ちなみに彼はNEW電王とい仮面ライダーに変身する者らしい。

「そして彼は、私達よりも先の未来で活動している時間警察のアダム君です。今回の事件に急遽、私の元へと駆けつけてきたわけなのです」

駅長が警察官の説明をすると、今度は彼が警察手帳と思われるパスを取り出して紹介を始めた。

「先程紹介された、時間警察のアダムです。今回の事件では本部より、この時代にいるという電王の方との共同のもとにやってきました」

「共同ですか？その前に、今回の事件ってことは何か知っているんですか？」

康博は原因を聞いてみることにと、アダムに質問した。

「今回起きている干渉の原因は全て本部に届いています。この原因では向こう側、すなわち別世界の方から干渉を発生させ、あらゆる世界につなげているのです。その1つが今この世界です」

「別世界・・・って、なんだか頭が狂いそうだよ。さっきから訳が分からないことだらけで・・・」

健介は今でも信じられないことを見続けていたせいか、頭を抱えながら立っている。

「皆さんはデンライナーで時間を移動するように、私自身で時間を移動することはできませんが、別世界への移動は不可能です。しかしこのキングライナーなら別世界への経路が可能で、そこで原因を発生させている世界に移動できれば・・・」

「干渉を止めることですか・・・」

大抵話した説明に一同は納得する。

「康博、ここはやろうぜ！」

そう愛翔は言った。

「そうだな。これからは俺達や愛翔、そして相棒やアダムさんと協力していきましょう！」

康博と愛翔は互いに握手をした。

「君が電王の変身者だね？改めて私はアダム、またの名を仮面ライダーG電王だ」

握手している2人にアダムが近寄る。

「貴方も仮面ライダーってことですか？というより、何故Gなの？」そこに愛翔が何かと失礼な質問を言い出した。関係ないことだが、彼はG電王の「G」が何の意味かを気になっていたようである。

「私をご説明しましょう」

「！？」

すると何処からか声が聞こえて驚く愛翔。アダムはパスを愛翔の前に出すと、何と機械の面をした何かが移りだしたのである。

「だ、誰！？」

そう言うのと親切そうに喋り出した。

「人工イマジンのイヴと申します、お見知りおきよ。G電王のGについてですが、日本語で政府と呼ばれる「Government」のイニシャルからきているものなのです。ご理解はできましたか？」

「は、はあ・・・」

「よろしいでしょう・・・それとこちらから質問したいことがあるのですがいいですか？」

質問に答えてくれたのはよかったが、今度はイヴは逆に愛翔へ質問

してきたのである。一応聞けることを聞こうと愛翔は受け入れる。

「いいですけど、何ですか？」

「ありがとうございます。では質問ですが・・・貴方は何者ですか？」

「・・・は？」

いきなり何者と言われて愛翔は啞然とした。

「私は一度貴方を見て気になったので、スキャンしてデータを調べてみました。そしたら貴方は、人間以上のデータが判明されていたのです」

「それは本当なのか、イヴ」

「はい。これを見てください」

イヴは目からデータ化された2つの映像を映し出した。内容は身体能力に関するデータみたいだ。

「左に映っているのは成人の平均データです。しかし右の彼のデータだとご覧のとおり、ケタが違います」

「マジで？」

木村は愛翔のデータを見て信じられない様子だ。

「そりゃあ当然だよ。俺は人間じゃないんだし」

「では、貴方は何者なのですか・・・？」

木村もイヴも愛翔の答えを聞きたいようにしており、愛翔は素直に答えた。

トリアル

「俺は改造実験体って言って、改造化された人間だ。別のことで言えば、俺も貴方と同じ仮面ライダーで、カリスって呼んでいる」

その他、過去のことと説明するにつれて木村達もその悲しさに同情した。

「信じられない・・・世界を我が物にしようとした人間がいたなんて・・・」

「けどあいつは懲りたんだから大丈夫だ。アンデットも全て封印しているし、俺の戦いは終わったように見えただけ・・・」

「それで相棒と出会ったってわけか・・・なるほどな」

『改造実験体である貴方は、カードに封印されたアンデットの力を借りて戦うライダーとして封印し続けていた・・・それが貴方、仮面ライダーカリスである黒崎愛翔さんということですね?』

愛翔はそうだと頷く。

「電王だけでなく、君も力を貸してくれるとは有り難い。よろしく頼む」

「はい、よろしく願います」

こうしてカリス、電王、NEW電王、そしてG電王の4人のライダーが互いに力を合わせ、いざ出陣といわんばかりにその世界への準備が始まった。

アダムが提供して経路を繋ぐが、干渉による妨害がひどいために走行中に危険をもたらしてしまう恐れもあり、何か策がないかと調べ始める。

その間に愛翔達はデンライナーで待機をしていた。

「愛翔、1つだけ聞いていいか?」

「何だ?」

康博は愛翔に話しかけてきた。

「お前達が別世界へ行くことになれば、最悪の場合には2度と元の世界には戻れなくなるかもしれない・・・それでもいいんだね?」

「・・・構わないさ。俺が平和を保っているんだし、もう一度平和を守ってやるよ」

「キュートな彼女の為にもか?」

「なっ!?!」

突然と木村のやらかしで愛翔が怒った。

「俺は平和を保つためにつて言っただぞ!?!」

「そう?じゃあ今の彼女をってみるよ」

「?」

愛翔は美奈子のいる方向に顔を向けた瞬間に啞然となった。のちに美奈子が近づいてくる。

「アイ君、ナオミさんと同じ服着てみたの!似合うでしょ?」

まさかまさか、美奈子がナオミと同じ服を着てコスプレしていたのだ。

「お前、どこでそれを……」

「えへへ。キングライナーに駅員グッズが売られてたから買ったの、アイ君の財布を借りてね」

そう言って美奈子は愛翔の財布を返す。

(此奴いつの間に……!?)

「うんうん、俺はとても似合ってるよ！可愛いし、男性から人気あるよ！」

「ねえアイ君、似合ってるかな？」

(・・・あれ？彼女ってアウトオブ眼中？)

木村は気に入っていたようだが無視されてしまった。玉砕だ。

その一方で愛翔は啞然が続いており、美奈子の姿をじっと見つめる。

「・・・もしかしてアイ君、ミナに惚れちゃった？ミナのことを好きになっちゃったの？」

「  
・  
・  
・  
^  
つ  
!  
?  
」

その時に愛翔は目を覚ましたが、目の前には美奈子が抱き付いてくる様子がある。

「そこまで思ってたなんてミナは嬉しい！アイ君大好き！」

かつして、平和を守った一人のライダーが未来の仮面ライダーと出  
会い、そして平和を守るために立ち上がる黒崎愛翔。

はたして彼に待っているのは何なのか……。

そして、突然消えてしまったというリュウタロスの行方とは……？

そんな読者の皆さんにリュウタロスは今頃どうしているのか、少し様子を見てみよう。

所変わって、幻想郷の雲の上にあるという天界『有頂天』。

ここには退屈そうにするある天人がいるのだが、現在はというと・

・

「うわああああ！！どうしよおおおおおつ！？」

何やらバタバタと急ぎ足でいるようだ。

「どうしよう、寝過ごしちゃった！！寝ぼけている私を衣久が起こしてくれるというのに！！」

服を着替えて部屋から飛び出す。桃のついた帽子、白い服装、長く青い髪をしたこの女性ひななは比那名居てんし天子。この有頂天で暮らしている天人だが、退屈な生活のせいで外に出たりもするのだが、それは天界としては許されない規則だった。

そんな天子が向かっている場所は彼女を担当とする永江衣久ながえいくのいる部屋で、慌てながらも彼女の部屋にたどり着く。

「お、おはようございまゝす・・・」

だがそこに彼女はいなかった。天子は『？』のマークを頭に表しながら扉を閉める。

いないのかとほかの部屋を探すが誰もおらず、では外かとのことで外へ出てみる。するとそこにはボロボロな黒い衣装を着て、頭に黒い帽子をかぶる女性がジベタで座っているのを目撃したのであった（あの帽子って衣久よね？なんなのあの恰好・・・）

天子は彼女だと把握したが、首を傾げるようにして彼女・・・衣久に近づく。

「あの・・・衣久？」

「私に龍宮の使いなんて眩し過ぎよ・・・」

喋りだした衣久だが、なんだかマイナスな様子である。無論、顔もなんだか暗い。

「あのく、衣久さくん？もしもくし？」

手を振って目を覚まそうとする天子だが、返事は全くないまままでいた。

「天子、私は悟ったのよ。こんな空の上よりも、私は地の下にいた方がお似合いだって・・・」

「ちょ、何空気を讀まないことを言ってるんですか！？いつもなら空気を讀んでいるというのに！それに今日の衣久はいつもの衣久じゃないわよ！？」

「こめん天子、私はもう地獄に落ちちゃったのよ・・・これからは地獄で暮らすから、今日でお別れよ・・・」

衣久はいさいさと何処かに去ろうとすると、その先には同じぼろくで黒の衣装を着た男性が待っていたかのように立っている。

「兄貴お待たせ。挨拶してきたわ」

「じゃあ行くか、相棒・・・」

「ちよつと待つて！！」

立ち去ろうとしたところを天子が立ちふさがる。

「どういうことなの衣久！なんでこの人と一緒にいるというの！？そもそも貴方誰！？」

「・・・俺は地獄から来たやつだ」

男はそう言つと、彼女を誘うようにして言った。

「なあお前、どうせなら・・・」

「一緒に地獄へ落ちないか・・・？」

「っ・・・！！」

そんなの断ると言おうとしていた天子。ところがその言葉が言えず、



彼から流れ出ていた殺気に身を引いてしまった。

「そ．．．そんな脅しで私に喧嘩でも吹っかけるつもり！？だったら上等よ！？」

天子は緋想の剣ひんそうを握り、お前なんか怖くないと顔を無理矢理苦笑こころざしいに変える。

（何よ！あんな人なんか怖くなんて．．．！）

「天子」

その時、衣久は天子に言った。

「貴方．．．今兄貴を笑ったね？」

「え．．．？」

「．．．許さないわ．．．！」

すると衣久は銀色のベルトを取り出し、バックルを展開させると何処からか茶色のバックルが現れ、衣久の手に渡った。

「変身」

## H E N S H I N

バックルをバックルにセットするとアーマーに包まれ、茶色いバックルへと変身した。

右腕に装備されている『アンカージャッキー』。そしてバックルにあるバックル型メカ『ホッパーゼクター』。

極悪なオーラを身に纏うその者は、仮面ライダーパンチホッパーである。

## C H A N G E   P U N C H - H O P P E R

「．．．ハアアッ！！」

変身した衣久は天子に拳を振り回す。

「何するのよ衣久！私はあの人に．．．」

「いいえ、貴方は兄貴を笑ったわ！そういう奴は許せないのよ！！」

「そんなの・・・私は笑ってなんか無いわよ！」

「いいえ、笑った！」

「笑ってない！」

「笑った！」

「笑ってない！」

「笑った！」

お互いににらみ合う2人。その内の天子は衣久に腹を立てているが、原因といえばあの男、怪しそうな雰囲気である彼が何かやらかしたのだろうと想像する。

「ちよつと貴方！衣久に何をしたっていうの！？」

「・・・」

しかし男は何も言わず、ふと何かに気づくようにその方向に向いた。

「・・・衣久、あっちの方で地獄があるようだ」

それを聞いた衣久は止まり、彼のもとに来る。

「本当なの？」

「いくぞ。地獄が俺達を・・・」

男もベルトをつけて、今度は緑色のバツタが飛んできたところを手取る。

「変身」

H E N S H I N

C H A N G E   K I C K - H O P P E R

男が変身したのは衣久と同じ姿だけど色が違った仮面ライダーキックホッパー。

たかが同じだといえど、身に纏うオーラは全く違う。まさに地獄からの使者といえる存在だ。

その間に2人は地上へ繋がる穴へと飛び込んでいく。

「ちよつと待つて！！」

天子も追いかけようとして穴へ飛び込もうとしたその時だ、

「貴様・・・欲望があるな？」

「へ・・・？」

後ろから何か聞こえたかと思いきや、そこには驚のような怪人が天子の真後ろにいたのである。

「ならばその欲望を利用してもらおう」

「えっ！？ちよつと！？」

天子は何されるのか分からないまま焦ると、死神の怪人は彼女の頭を支え、後頭部に出現したコインの投入口に銀色のコインを投入する。すると天子の体の中からなんとミイラが現れたのだ。

「ええっ！？何これえ！？」

ミイラは見た目によらず、早足で衣久のいる部屋に入ると部屋中にあるモノを何と食べ始めたのである。（どんなものかはご想像で）

「ちよつと！衣久の部屋を何荒らしてるの！？やめなさいよ！」

部屋へ戻った天子は見て止めさせようとすると、ミイラの体が脱皮してアホウドリの姿へと変わる。のちに驚の怪人もやってきた

「まず手始めだ。この女をやれ」

「キエエエエツ！！」

アホウドリの怪人は天子に突進。天子は左に避けては外へと逃げ出し、追撃してきたアホウドリの怪人を空へ飛んで回避をする。

「びつくりした・・・けどなんなのコイツ！？」

「逃がすな！！捕えろ！！」

アホウドリも空を飛んで追跡してくる。こうなれば迎え撃とうと、剣を構えながら一枚のスペルカードを取り出す。

「これでも食らいなさい！！要石『カナメファンネル』！！」

カードを手に技の名を叫ぶ天子。ところが何も起こらない。

「・・・嘘！？スペルカードが発動しない！？」

「キエアツ！！」

アホウドリの怪人が爪で天子にひっかいてきた。難なくかわせたも

の、油断したせいで地面へと落ちてしまふ。

「どうしてなの！？なんでスペルカードが使えないの！？」

スペルカードが使用できないことにショックを受けてしまふ。だがそうしているうちにアホウドリが急降下してきて、爪から発せられる風を飛ばした。

「きゃあっ！！」

天子は風に飛ばされて地面を転がり、素早く立ち直ってはアホウドリの猛攻を剣で止めていく。

（どうしよう・・・このままじゃ！）

見たこともない怪人に苦戦する天子、だがそれをうまくひっくるめてしまふと言った、信じられない展開がこの後に発生する。

天子と怪人の上には紫色の光が飛んでおり、光はゆっくりと天子へ近づいて背中に回り込むと、そのまま勢いよく体の中へと飛び込んでいった。

「！？」

天子も怪人も何が起きたのかと立ち止まった。だがその直後・・・

「イエーイ」

「何・・・！？」

天子は紫色の瞳になり、何故か可愛い人形を吊るして踊るやんちゃ少女へと変身してしまったのだ。

『えっ！？何！？何が起きたの！？っていつか、体が勝手に・・・！』

天子は自分の動く体が制御できないままにいる。驚の怪人は天子（？）に問い詰める。

「貴様、まさかグリードか！？」

「ん？グリード？何なのそれ？」

何やら知らない様子である。しかも声は子供っぽい・・・。

『貴方誰！？私に何をしたっていうの！？』

「僕の名前？僕はリュウタロスイマジン。今ちよつと体を借りてるんだよ」

この時に皆さんはもう分かっていただろう。

そつ、彼が電王が探していたイマジン、リュウタロスなのであるのだ。（以降はR天子）

「イマジンだと・・・？」

そんな驚の怪人・・・グリッドを無視してR天子はベルトを腰につけて紫のボタンを押す。ポップな感じの音楽が流れ始めた。

「変身！」

G U N   F O A M

天子の体は紫のボディとビクトリースキャンアイが装備され、仮面ライダー電王・ガンフォームに変身する。

「お前倒すけどいいよね？答えは聞いてない！」

## 第10話「歌と警察と地獄兄妹とコイン」(後書き)

一気に2話更新しました。

ついにオーズが放送されてみた感想ですが・・・

「パンツ一丁は危ないか!!??」

との一言です。金とパンツが命な主人公なんて今までにないほどのシニールさを感じました。

そして変身面ではやはり歌いながらの変身・・・だとタカキリバでは歌わないようなので安心しました。

今回の敵であるグリードですが、内容にしては欲望ある人間を利用して怪人を生み出す構成とされていて、これからどんなことが起きかと楽しみにしています。

もちろんグリードは本作でも登場します。というか早速出しました。はたして天子の前に現れたリュウタロスとどんな運命になることか・・・そして本作で登場するオーズは誰が変身するかは今後のお楽しみにしてください。

なお、ここでカリスサイドは終了となります。次回は誰のサイドになるかもぜひご期待！

## 第11話「剣と巫女と魔法の森」

暗い闇の中、回る光とサイレンが鳴り響いているその場所に男が立っていた。

藍色のジャージを着ており、男は誰かを探すように周りを見回している。すると空からイナゴの大群が現れ、男は突っ込んできたイナゴをかわす。そしてイナゴの大群はひとつとなり、何とイナゴの姿をした怪人へと変化したのであった。

「貴様か！！貴様がみんなを・・・！！」

激情と化している男は、1枚のトランプ（スペードのA）と箱みたいな道具を取り出し、トランプを箱の挿入口に入れて腰に持つてくるとトランプの束が男の腰を一周したベルトが作られた。

シグナルの音が鳴り、男は右手をゆっくり左上へとあげてはグルンと返す。

「変身！！」

叫んだと同時に両手を交差させ、右手は箱の右側にあるレバーまで持ってきた勢いよく引いた。

TURN UP

トランプを挿入していた面がレバーで裏返し、スペードのマークが表になったと同時に電子音が認識をする。そしてベルトから青光でできた壁が放出、イナゴの怪人にぶつかって吹き飛ばされると、男は壁に向かって走り出した。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

男は壁へ激突するかと思いきやそのまま通り抜けていく。しかも通り抜けた瞬間に男の体が鎧に包まれ、青いカブトムシのような戦士

へと姿を変えたのだった。男改め、青い戦士はイナゴの怪人に殴り掛かり、それをイナゴの怪人は防御していく。それならばと青い戦士は左腰に収められている剣を抜刀して切りかかるが、これも防御しながら青い戦士に反撃を始めた。どうやら青い戦士は怒り狂っている様子で、先程の勢いが瞬く間にイナゴの怪人のものとなってしまう。青い戦士は距離を開けて近づいてきたところを剣で切りつけようとしていたが、接近して切りつけるところまではよかったものの、足で止められてさらに片方の足で蹴り飛ばされてしまう。その拍子で剣を手放してしまい、地面へ転げ落ちた青い戦士が立ち直ろうとしていたその直後、左の視界に赤い何かがいるのを確認してその方向に向いてみた。

赤くクワガタの姿をした戦士だ。

「橘さん……何故見てるんです！？」  
たぢい

赤い戦士はどうやら橘というらしく、その場で青い戦士をじっと見ているだけだった。その束の間にイナゴの怪人が奇襲して、殴られていくところを橘はただ見守るとしかないままにいる。

「橘さん！本当に裏切ったんですか！？」

それでも橘は見続け、青い戦士はイナゴの怪人の背中を抑える。

「アンタと俺は、仲間じゃなかったので……ウエアッ！？」

しかし抑えているのもほんの僅か、イナゴの怪人は振りほどいて青い戦士の腹を叩く。

すると橘はその場から立ち去って行ってしまふ。まさかと思うが、青い戦士は見捨てられたと判断する。

「そんな……そんな……ウエイッ！！」

青い戦士は吹っ切れてしまい、目の前にいるイナゴの怪人に八つ当たりを始めた。



「何故だ！！何故だ！！何故だあつ！！！！」

鳴り響くサイレンの中、その答えを教えてくれるものは誰もいない・  
・と思っていたその時、青の戦士の視界は朝日が出ている寝室へと変わり、姿も男の姿へと戻っていた。

「・・・夢・・・だったのか？」

男は周りを見てみると、そこは医療具などが置かれており、ここは病院だろうと把握する。

だが男には知らないことだが、ここは永遠亭。すなわち輝夜達のいる屋敷だ。

「わはー」

「！？」

横から子供の声が聞こえて振り向くと、そこには黒い服に金髪の髪を生やした少女がニッコリと笑いながら男を見ていた。

「な、なんなんだ君は！？いや、それよりも俺は今までどうしてたんだ！？」

いきなりだったので動揺している様子な男。

まずここは何処なのか分からない。

この女の子は誰なのか分からない。

そして男は今までどうしていたのか分からない。

この3つが同時に出てきたせいで整理できるどころではなかった。するとその動揺を解消すべくと、第3者の声が現れるのだった。

「貴方は魔法の森の中で意識を失っていたところを彼女に助けられたんですよ」

その声が出た方向には、すでに起きている天野川 星司の姿が立っていた。また、この影響で男の動揺は自然に止まる。

「君は・・・？」

「天道さんが言っていた。俺は天の川に輝きし星を司る男、天野川星司。そしてこの子が、貴方をここへ運んでくれた少女のルーミア」

「ルーミアなのだー」

少女、ルーミアは男に寄り付く。

「お、おい待て！寄り付いたら・・・」

男は止めると言おうとしたが体をよく見ると、両腕などに包帯が巻かれていたのである。

（そうだ！確か俺は森の中で化け物の奇襲を受けて怪我して、歩いてたらだんだん意識を失って・・・。いや、それよりも包帯巻かれているってことは俺の正体がすでに・・・！）

男はしまったと焦り始める。何やら隠し事があるようだが・・・  
「あまり動かない方がいいわよ。それとルーミア、患者に寄り付かないでちょうだい」

さらに永琳もやってくる。ルーミアは男から離れ代わりに永琳が男に寄って包帯をとる。

「あら、傷の治りが早いね。新しい妖怪がこの世界に来て早々と瀕死寸前だったのに、よく無事でいられたわね」

「・・・へ？」

男は目を丸くした。そんな馬鹿なと男は永琳に問いかける。

「ちよつと待つてください！俺は妖怪なんかじゃなくて、アンデツトって言う怪物なんですよ！？何故すんなりと・・・」

「私が説明するより、星司君なら話しやすそうかもしれないわね。彼も貴方と同じ外の世界の者だから」

「外の世界？」

「ここが何処なのか、そして何故信用してくれているのか・・・言えることを全部話すよ」

星司は幻想郷や妖怪のことを具体的に説明した。

説明を終えた時には男は信じれないような顔でいる。

「そんな・・・本当にこの世界に妖怪がいるなんて・・・！」

「ルーミアもこう見えて妖怪なのだー」

ルーミアは自分の正体を男に話した。彼女は少女とはいえ、実は常闇の妖怪であり、人を食べるといった狂暴ある者らしい。男はルーミアをじつと見つめるがそうには見えないと思ひ込む。

「けど外の世界では聞き覚え無い妖怪もいるのね、私と同じ不死の存在か・・・」

「まさか、貴方もアンデットなんですか!？」

男は永琳に質問攻めをする。

「私はアンデットじゃないわ。蓬莱人<sup>ほうらいじん</sup>って言う不老不死の人間よ。

言い忘れていたけど、この世界にいるのは妖怪だけでなく、ちゃんと人間もいては、幽霊や鬼、神もいる世界なの。信じられないけど、ここでは全てを受け入れ、はたまた外の世界での常識が通用しない世界、それが幻想郷よ」

「幻想郷・・・」

男は頭をかきながら困り果てる。とんでもないところに来てしまったと・・・。

「それより、私の名前を言ってなかったわね？私は八意永琳、ここ  
の薬師をしているわ。それと貴方の名前も聞かせてくれるかしら？」

「思えば、名前を言ったのは俺達だけですし・・・」

確かにそうだと星司とルーミアは頷いた。この男にはまだ名前を聞いてはおらず、その名前を聞くことにした。

「・・・俺は剣崎<sup>けんざき</sup>一真<sup>かずま</sup>。前は仮面ライダーをしていた」

剣崎は名前とついでに自分は仮面ライダーであると、その変身ベルトを見せながら説明する。

「・・・これって、トランプ？このカードですか？」

剣崎が見せている13枚のトランプを見て星司は言う。

「これはラウズカード。このカードの中にはアンデットが封印されていて、俺達は53体にも及ぶアンデットを封印してきた。だが・・・」

剣崎は黙ってしまふ。

「だが、どうなの？」

「・・・俺は最後のアンデット、ジョーカーを封印することはできなかった・・・。アイツだけはどうしても封印したくなかった・・・！そんな俺は自らジョーカーになって、もうアイツとは戦わないとを誓ったんだ」

「それは貴方の大切な人なのね？」

「ああ。相川<sup>あいかわ</sup>始<sup>はじめ</sup>。俺達の力にもなってくれた仮面ライダーであつて、俺と同じジョーカーだ。ジョーカーは世界を滅ばす危険な存在だけど、俺はそんな奴を封印したくは・・・」

剣崎は悔しそうな顔で蹲る。するとその悲しさを変えてしまつべくと星司が剣崎に話してきた。

「剣崎さん。貴方のしていたことは間違つたことではないですよ」「何・・・？」

剣崎は星司の顔に向き、星司は人差し指を上へあげた。

「天道さんが言っていた、人は人を愛すると弱くなる。だが恥ずかしがることはない、それは本当の弱さではないことだってな」

「本当の弱さじゃ・・・ない・・・？」

星司は手を降ろして剣崎の顔に向く。

「剣崎さんは自分から仲間を消すようなことをしていたけど、貴方は最後まで正義を捨てずにいたんですからそれでいいんです。今の剣崎さんは辛いでしょうけど、それは後悔したことじゃないですよ」「・・・」

剣崎は黙りこみ、自分が今持っているベルト『ブレイバツクル』を見つめた。

『誰に命じられたわけでもない・・・俺は全ての人を守りたい・・・そう願つた！』

ふと剣崎の過去に発した言葉を思い出す。カテゴリーKとジョーカ  
ーが残り、ケルベロスと融合を果たした天王寺との戦い……その  
時に剣崎はこの言葉を言ったのである。

その記憶がもう一度流れ出たとき、彼は星司に言う。

「星司君、君の言うとおりだよ。俺は始を守るうとしたんだ。アン  
デットだろうと始は始だ」

剣崎はブレイバックルをしまつてベットから起き上がった。

「まともに動けるくらいまで回復しているわね。あとは栄養かしら  
？」

「栄養？」

剣崎は永琳からの処方結果が書かれた紙を見せる。

「貴方は怪我だけでなく、化け茸の胞子のせいで倒れていたのよ。  
あの胞子は外の人間では死に至る程の危険性だけど、貴方は最低で  
も栄養を失うだけで済んだみたいよ」

「胞子……そういえば、あの時に何だか体の言うことが聞かなくな  
ったりしたけど、あれって胞子が原因だったのか。恐ろしい森に  
いたもんだな……」

剣崎はゾツとする。それなら二度と入らない方がいいだろうと思っ  
ていたのだが……

「けど大丈夫よ。一週間ほど滞在していれば胞子を浴びようとも無  
害になるわ」

……意外と安心できることだと剣崎は思った。

「ねえねえ、お腹空いたから何か食べさせてくれる？」

ルーミアは何やら腹を空かせているようである。どうやら朝食をと  
っていない様子である。

「仕方ないわね。じゃあ貴方の分も「俺も作りますよ」え？」

その時に星司は永琳に手伝うと言ってきた。

「俺も料理はできますし、昨日のお礼も返さなきゃいけませんから」  
「……フツ、それもいいかもね。じゃあ星司君もお願いね」

「一真、行こうよ」



「そう、随分と派手にしてくれているみたいよ。スペルカードを禁じて、私達を不利にさせた・・・」

主のレミリア・スカーレットは言う。あの後にアギトから説明された話を霊夢に伝え、霊夢は信じられないと思いながらソファアに腰を掛ける。

「その代り、私達は新しい力を得た・・・いや、外界の力を得たと言っていていいようね」

「外界の力？何のことなの？」

「これよ」

レミリアはカイザギアの入ったケースを差し出して霊夢に見せた。

「アギトが言うには、外の世界には100を超えるほどの戦士の力・・・ライダーベルトが存在している。それがたまたまこの世界に流れ着いたみたいなのよ」

「ライダーベルト・・・それより、この世界を付け狙っている敵ってなんなの？妖怪とは思えないけど・・・」

「外界じゃあ、テロリストっていう名称があるらしいわよ？今回はそういった巨大な集団『スーパージョッカー』って言うていたけど・・・」

「これまた派手な敵ね・・・けど使えなくなっただけよ。スペルカードだけよね。しかたないけど、今は変身できるアンタと、アギトって奴に頼んでもらうしかないわね」

「暫定ではね。けどその反面、私達の前に助っ人が現れようとしているわ」

「助っ人？」

「この原因を解決する王に会うことを今、咲夜が外界に向かっているところよ。それに今後の運命では、もっと他の助っ人も現れようとしている。あと、霊夢の身にも面白いことが起きようとしているわ」

「私にもって・・・死亡フラグは止してもらっわ。仮に来ようとも打ち返すだけよ」





輝く太陽を掴むかのような手で霊夢に名を名乗るのは、星司を育ててくれた師匠でもある男、仮面ライダーカブトこと天道総司だった。

「天道……？何よそれ」

「分からなくてもよい。ただ、お前にプレゼントを渡しに来た。これだ」

天道は三つの穴があるアイテムと、赤、黄色、緑、黄緑のコインを霊夢に渡した。

「……何これ？」

「説明する前に俺からの説明を聞いてほしい。この世界の秘密のことを簡単に話す」

「この世界の秘密？」

「そうだ。昔この世界には、妖怪、神、幽霊などといったもの以外に、凶悪たる古の怪物が暴れていた。スキマ妖怪である彼女が封印をしたものの、どうやらタベにその封印が解かれてしまったらしく、幻想郷で暴れ始めている」

「封印が？……そんな話聞いたことないわよ！」

「無論、この話を知るのは彼女とある男のみだと言われている。そしてその封印された怪物の名は……『グリード』。そのメダルから生まれた者達だ」

「メダルの……怪物……？それがこれと何の関係があるの？」

「簡単な事だ」

天道はそういつて次のことを言った。

「博麗霊夢、お前は仮面ライダーオーズとしてグリードと戦ってもらいたい」

「・・・そういうことね」

レミリアの言っていた言葉をようやく理解した霊夢は呆れ顔でいた。  
「大体、何故私にこれを与えるというの？」

「それも簡単な事だ。こんな感じに・・・」

天道は指をパチンと鳴らす又何も起こらない・・・と思いきや、霊夢は何故か後ろを素早く振り向いた。

「まさかお金！？それは私の者よ！？」

オリンピック選手でも驚くほどの足の速さでダッシュして天道のところに戻ってくると、霊夢の右手には銀色のメダルがある。

「ちよつと、まさか私を計ったわね？」

「計ってなどいない。これはお前の敏感な反応を利用した只のテスト。もうこれで分かるだろう」

「・・・1つ聞くけど、これはお金になるの？」

「耳寄りな話ではいい価値をしていると聞く」

「乗った！やつてあげるわよ！」

霊夢は目に『¥』のマークをしながら引き受けることにした。

「それじゃあ使い方をこの紙に書いてあるからよく見ておいてくれ。俺はこれから重大なことをやらなければならない」

天道は右腰にあるスラップスイッチを押すと、その場から姿を消した。

霊夢はもう一度、彼からもらったベルトを見つめる。

「仮面ライダー・・・オーズ・・・」

霊夢は説明文を読み始め、オーズの戦い方を覚えていった。

「えーつと・・・まずドライバー腰に付ける」

霊夢は早速、オーズドライバーを腰に当ててみる。するとベルトが作られ、腰に巻かれたのである。

「次に右から赤、黄色、緑の順にメダルを入れる」

右から赤い鷹のメダル、黄色い虎のメダル、緑のバッタのメダルをセットすると、バックルが左下へ少し傾いた。

「最後に右腰のオースキャナーでスキャンすれば変身・・・か」  
試しにと霊夢は右腰のオースキャナーを手に取る。

ギユイン、ギユイン、ギユイン・・・

オースキャナーから変身待機音が鳴り出し、霊夢はオースドライブ  
ーヘスキャンしに手を持って来ようとする。が、その時、

「霊夢、遊びに来たぜ」

「へっ!？」

空から誰かの声がした驚いた霊夢。だがスキャンする手は止まらず  
にそのままオースドライブを通過してしまった。

タカ!トラ!バッタ! タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ!

霊夢の体は一瞬にしてオースへと変わってしまった。のちに空から  
降りて来た魔法少女は直後に啞然とする。

「・・・霊夢、ついにやってしまったか・・・」

「なっ!？違うわよ!？これは試しにただで・・・!!」

「いやいや、いいものを見せてもらいましたよ・・・霊夢さんが  
まさかのコスプレとは・・・」

「というよりコスプレの領域から離れてるなこりゃ。ってか、たと  
ばって何か知らんけどその歌はちよつとなぁ・・・」

降りて来たついでに鳥居からはカメラで撮影している少女と、角  
を生やしている幼女がやってきた。

「クソカラスに萃香まで・・・」

腹を立てている霊夢は変身の解除方法を読んで操作すると元の姿へ

「あやや、もう少しさっきの姿でいてほしかったんですが・・・」

「だ・か・らコスプレじゃないわよ!!!」

改めてこの少女達は霊夢と長い付き合いをしている者で、魔法少女の名は霧雨 魔理沙。霊夢の親友とともに妖怪退治をしている少女だ。

次に殴り飛ばされたこの少女は射命丸しゃめいまる文あや。文々ぶんぶんまるしんぶん。新聞の記者で鴉いぶきすいか天狗の少女である。

そして角を生やした少女は伊吹萃香。いぶき すいか お酒を好む鬼の子で、山の四天王の一人と呼ばれているかなりのんぺえな少女だ。

この3人からオーズの変身を見られた時に霊夢は思う。

[illegible]

「そうよ、それを天道つて人に任されたのよ」

「そういえば、昨日の出来事で赤いカブトムシの目撃情報があると聞きました。がそのことじゃないですか？」

「そうよ。確かに赤いカブトムシの姿だったけど、どうにも変だったのよね・・・」

「変って何のことだあ？」

「……あの天道って人の姿が仮の姿じゃないのかってね」

霊夢は天道のことが気になっていた様子で、その答えを3人に言った。

「ということは！あのカブトムシには秘密があるということですね！？」

目を輝かせて取材に持ち込もうとする文。だが霊夢はこれを却下した。

「私は天道に任されたことを言われてるのよ。話をズラしたから忘れるところだったけど、どうにもメダルの怪物が復活したみたいよ？しかも、犯人は特定されているみたいだし」

「犯人まで分かっているんですか？さすが霊夢さんですね」

霊夢は紅魔館のことも説明した。

少女説明中・・・

「・・・スペルカードの封印ってありかよ・・・」

「あやややや、それは大変ですねえ」

「お酒も不味くなつたじえ」

「そして、そいつらが封印を解いた可能性が高いつてわけよ。あとは此処へやってくる王様に会うことみたいだけど、そろそろ来てる頃かしら？」

「会いに行くってことか？だったら私もつれてもらわなきゃなあ・・・」

「」

「当然私も！」

「暇だしついて行くよ？」

「・・・勝手にしなさい」

ということで霊夢達は紅魔館へと向かうことにした。



「!? 霊夢、森の様子が変だぜ!」

魔理沙が下を見たときにはなんと、森に見たことない建物が次々と現れた始めたのである。

[illegible]

一方で天道は妖怪の山にいたが、突如森で起きた現象に気づく。

「！始まったか……世界の融合が……」

天道は急がねばならぬと、クロツクアップで走り始めた。

[illegible]

「おいおいどうなってんだぜ！？森が変な建物とごちゃ混ぜになっ  
たぞ！？」

森は既に植物に覆われた建物と一体化していた。

「おー、人とかもたくさんいるぞー？」

萃香は森をよく見てみると、人間が騒ぎながら逃げ干せている様子があった。助けてくれといわんばかりに人間は森をさまよう。

「どうする霊夢、一応人間を助けるのも巫女の仕事だよな？」

「……どっちでもいいわ。兎に角助けましょ」

逃げている人々を助けに降下する少女達だが、騒ぎが酷いせいで誰も言うことを聞いてはくれない。

「我を忘れてやがる……どうするぜ霊夢」

「そんなの私に聞かれても・・・」

その時、人間達が急に大人しくなったかと思うと、誰かを見るように一同がその先一点へと集まった。

「あや？大人しくなりましたねえ」

「ねえ、もしかしてあの人じゃないの？」

萃香はその先に見える青白い光に指を差した。

「あの光に何かあるってことだよな」

「行ってみましょう。どっちにしても調べなきゃいけないみたいだし」

すぐ向かってみると、そこには青白い光を放つ少女がいた。青く長い髪にメイドの服を着た少女・・・それはファンガイアの王、琴芭英次から街の様子を見てほしいとの命令で調査していたチェリーだったのだ。

「人間の皆さん、私が安全な場所まで導きます。目を瞑り、祈りながら心を落ち着かせてください」

そういうと人間達は祈り始め、チェリーは剣を抜くと強く念じ始めた。

「闇に在りし魔の力よ。この者達をゆとりある地へと導き、命を守りたまえ・・・！」

すると人間達の足元に魔方陣が現れ、人間達は光に包まれながら消えてしまった。

「ひ、人が消えた!？」

魔理沙は驚き、人間達を避難させたチェリーは剣を収めてすぐこの場から立ち去ろうとしたその時、霊夢は前に立ってチェリーに話しかけてきた。

「待ちなさいよアンタ！」

「・・・何か用でも・・・？」

チェリーは立ち止まって霊夢に言う。

「アンタ、ここの人たちを何したというの？大体アンタは何者よ!」  
そう言われたチェリーは霊夢の方向に振り向く。



「今貴方に見せたのは転送術でございます。ここにいる人たちを安全な場所へと避難させました・・・」

「・・・じゃあ、アンタは誰なの!？」

「霊夢の横に魔理沙達もやってくる。」

「・・・なるほど、貴方がたはこの世界の住人ですね・・・？」

「？ それって貴方が外来人ということですか？」

「文が外来人であると理解するとチェリーは簡単な説明をした。」

「私はファンガイア族の王、琴芭英次様に仕えるチェリーと申します・・・。私は王であり、主である彼からの命令で街の調査をしていたところです・・・」

「街の調査？ つか、王って・・・霊夢！」

「魔理沙はまさかの顔で霊夢の顔に向く。」

「貴方、王様の使いよね。王様もこの世界に来ているの？」

「はい。紅魔館へと向かわれているようです・・・」

「じゃあ私達も行きますよ。もしかしたら既に着いてるかも」

「霊夢達は空へ飛び上がり、紅魔館へと目指した。」

「・・・話してみるのも悪くはないでしょうね・・・」

「チェリーは身軽な動きで木々を飛び移りながら追いかけていく。」

## 第11話「剣と巫女と魔法の森」（後書き）

どうも作者です。

ということですが、オーズは霊夢が変身することになりました。けとこれでは天道は彼女達の心を筒抜けじゃないのかと疑って困るのも作者の悩みです。いや、むしろ彼は自分が捜査しているのですから下手すれば・・・それだけでゾッとします（え

さらにここで原作キャラが本格的に登場しました。今回は物語の冒頭から出ていた天道と、相川 始と別れてその後に登場していた（第4話より）剣崎の2人です。

そろそろ戦いにも勢いが出てくるか？と思われますが、まだまだ登場するキャラは出てきます。

次回は霊夢達のサイドからお送りしますので、どうぞお楽しみに。



んたつてアタイはサイキョーだもんね！」

「で、でも・・・」

ワツハツハツと高笑いする青い幼女だが、実際に言うところの2人は妖精である。

1人は此処、『霧の湖』で生活をしている氷の妖精チルノ。そしてもう1人はチルノの親友であり、妖精の中で上をゆく大妖精こと大ちゃんだ。

チルノは毎日蛙を見つけては凍らせるという悪戯好きであるが、自分が最強であるとのことではやっているとのこと。とんだ趣味だと思うが、彼女は本気である。

この調子でガンガンやろうとしていたチルノだが、ふと凍らせていた蛙がパリンツと砕かれてしまう。

「あーっ！アタイの凍らせた蛙が粉々になってる！」

「チ、チルノちゃん！後ろ後ろ！」

大妖精はチルノに危険を知らせ、チルノは言うとおりに後ろを向いた。

するとそこには、緑色のクワガタをした怪物が立っていたのである。

「貴様のその欲望、解放してやる」

チルノの額にメダルの投入口が現れ、怪物は銀色のメダルをチャリンと投入した。するとチルノの体からミイラが這い出てきて、2人はあまりにもな出来事に驚いてしまう。

「何？何なのこれ！？」

「アタイの体から変なものでたよ！？」

「そいつは貴様の分身だ。貴様の欲望を食らいつくす分身・・・またの名をやミーと呼ぶ」

ヤミーは近くにいる蛙を見つけると素手で掴み、何と食べてしまったのである。その姿はとても2人が見せるものではない。

「酷い！蛙を食べちゃうなんて・・・」

「蛙は私がやるのよ！？」

チルノの考えていることは違うことだが、ヤミーが蛙を食べ終えた

瞬間に脱皮して蠅螂の姿へと変わった。

「食い足りねえ・・・もつと俺に欲望を食わせろおおっ!!」

ヤミーは2人に向かって走ってきた。危ないと思いながら空へ飛びあがり、なんとか回避する。

「どうしようチルノちゃん、あんな怖いのを相手なんてできないよ・・・」

「だからアタイがやるのよ!勝手にアタイの縄張りに入るのも困るからね!」

チルノは地上に降りてヤミーと向き合った。

「さあ、アタイが相手よ!必殺のパーフエクトフリーズ!!」

チルノは両手を前に出して冷気を放つ・・・のだが、

「・・・って、あれ?出ない?」

何故か放出せずに啞然とするチルノ。だがそれをヤミーが情けをかけるわけがないままに襲い掛かるうとしたその時、

「させるかぁーっ!」

飛びついて来たヤミーに横から何かと激突して怯んでしまった。

「うおっ!!今度は何だ!?!」

チルノは何が起きたのかと周りを見回すと、青年が駆け付けにやってくる。

「おい、大丈夫か!?!」

青年はチルノは両肩を掴んで言う。

「な、何よあんた!一応怪我はないけど・・・」

「チルノちゃん!」

大妖精もチルノのもとに来て、その様子を心配そうに見つめた。

「ここは危険だから逃げるんだ。俺達が食い止めている間に早く!」

「は・・・はい!」

大妖精はチルノの手を引いて逃げようとするが、

「えーっ!でもアタイの蛙を邪魔されたんだよ!あの蠅螂みたいな

妖怪に！」

「何だつて？」

青年がヤミーとクワガタの怪物を見ては驚き、納得した。

「・・・成程、そういうことか」

青年はヤミーと対決している金色の蝙蝠に声をかけた。

「キバット、変身だ！」

「おっ！その言葉待つてたぜ！」

蝙蝠は青年の元へと来て、青年は蝙蝠を右手で掴みとると右手にガブリと噛ませた。

すると青年の腰に赤いベルトが現れ、青年は蝙蝠をバックル部分に装着させる。

「変身！」

「ファイガイアじゃない奴でもキバツていくぜー！」

青年は赤い蝙蝠へと姿を変えた。

もうここまで見ている人には分かるだろうけど、青年の正体は咲夜に連れられて紅魔館を目指していた琴芭英次こと、仮面ライダーキバだ。

「人が・・・蝙蝠に・・・？」

大妖精は変身した英次を見て思わずと声を出す。

英次はヤミーに向かって戦闘を始め、ヤミーは両手の鎌を使って応戦すがスイスイとかわされ、英次のストレートパンチをあびてしまふ。

「ぐおあっ!？」

ヤミーが後ろへ押された直後、英次はジャンプしてから手刀をヤミーの頭上へと振り下ろした。

「大切断アアアンツ!!!!」

英次は勢いを込めた掛け声でヤミーを一刀両断。ヤミーは爆発し、メダルがあちらこちらにばら撒かれる。

バックルに止まっているキバットはメダルを見て言う。

英次は先程の戦いを見ていたグリード、ウヴァに問いかけた。

「仮面ライダーキバだ。覚えておけ！」

[illegible]

!

単に言えば、彼女の耳にチャリンと音がしたのである。

「近くにいるわ！封印が解かれた例の怪物が！」

文は下に指を差すと、ちょうど英次がウヴァと戦っている様子が見えていた。

「間違いない……あれね！」

「ムッ！？英次、右から何か来るぞ！」

キバットは霊夢が接近していることに気づいて英次に知らせると、ウヴァと同時にその方向に振り向いた。

「でやあああああつ!!」

ものすごい速さに両者は振りほどいて回避。霊夢は受け身を取りながら地面へと着地した。

「あれは・・・女の子?」

立ち直る英次は霊夢をじっと見て疑った。

「あんたよね?グリードっていう怪物は・・・」

「だったらなんどいうのだ?また俺達を封印する気か?」

「嫌でもするわよそんなこと。寧ろ、あんた達がどれだけム力つく奴かは把握したわ!」

霊夢はオースドライバーを取り出して腰に付けた。

「! あノベルトはまさか・・・!」

英次とウヴァはベルトを見て驚き、霊夢は3枚のメダルをドライバーにセット。オースキャナーを右手で握りながらメダルをスキャンした。

「変身!」

タカ!トラ!バッタ! タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ!

赤いタカの頭、黄色いトラの腕、緑のバッタの脚のボディをした仮面ライダーオーズ。その変身者である霊夢を見た英次は啞然としていた。

「あれが、オーズ・・・」

「オーズ・・・貴様あつ!!」

ウヴァは霊夢に一発と雷を放ち、霊夢はそれを素早くかわしていく。「ハアツ!」

トラクローを展開したアームでウヴァの腹を切り裂く。最初の一撃



が利いたことで腹からメダルがボトボトと零れ落ちていき、これを見た英次はウヴァの傷口にめかけて右手を突っ込ませた。

「ぐああっ！？貴様・・・まさか・・・！？」

「ああそうさ。コアメダルはいただくぜ！」

英次は勢いよく右手を引くとウヴァの傷口からクワガタの模様をした緑色のメダルが引きずり出され、ウヴァを覆っていた緑色の装甲が消えてしまう。

「今だオーズ！」

英次はウヴァの両腕を支えて拘束させ、霊夢に攻撃のチャンスを与えた。

「あんた・・・何のつもりなの？」

「お前と同じだ！仮面ライダーは世界を守ることを与えられた正義の戦士。人間を守るのが俺、王の資格だからな！」

「！王つてあんた、まさか・・・！？」

霊夢は彼こそが王だとのことに驚くが、英次にその余裕などは許されなかった。

「グスグスするな！！早くグリードを倒せ！！」

霊夢は我に返り、オースキャナーでドライバーをスキャンした。

スキャニングチャージ！！

バツタレッグが光り出すとバツタそのものの脚へと変わり、霊夢は高く飛びあがると同時に赤、黄色、緑のリングを潜りながらウヴァへ右足を突き出す。

「お、おのれええええええっ！！！！」

「ハアアアアアアアッ！！！！」

オーズの必殺技である『タトバキック』を受けて爆発が発生。それに巻き添えとなった英次は湖へ放り出されてしまった。

煙が晴れて変身を解いた霊夢は湖に落ちた英次が無事でののかを心配そうにしていると、水面から緑色のボディをしたキバが飛び出て地上に着地した。

「ふう……こういう時にレモンは役立てるよな。また何かの時には頼むぜ」

（？ 独り言……じゃないわよね？）

霊夢は誰かと会話しているかと思い込む。すると緑色から赤へと変わり、霊夢の方向に向いた。

「オーズ。どうやらあのグリードは逃げられちゃったようだぞ」

「……え？」

啞然としていたところを更に啞然となる霊夢。英次は変身を解いて説明を始める。

「当たる瞬間にメダル化して、気づかれない隙に離脱しやがったんだ。不覚だな……」

「メダル化って……あいつ、そんなこともできるの!？」

「それだけじゃない、人間に化けることもできるから見つけるのは難しいと思う」

霊夢もオーズから元の姿に戻ると、空で見物していた魔理沙達が地上へ降りてきた。

「やったな霊夢！早速怪物をやっけるとは流石だぜ！」

魔理沙は霊夢に向けてサムズアップをするが、霊夢はため息をつきながら喋り出す。

「魔理沙、悪いけど逃げられちゃったみたいなのよ。此奴が当たる直前に脱け出したんだって」

「こ、此奴って……この方を誰だと思って言ってるんだ！無礼だぞ！」

キバットは霊夢に怒鳴り出した。

「いいかお前等！この方は人間とファンガイアの平和と秩序を守っている王、琴芭英次様なんだぞ！一同頭が高い！」

「ははっ」

キバットが時代劇のように演説していると、何故か文は英次の前でひれ伏した。

「何やってんのよアンタ」

「いやだつて、相手は王様だから・・・」

「そんなわけないでしょ！此奴の何処が王様よ!?」

霊夢は激怒していた。どうやら嘘っぱいと思われるようである。  
「構わねえよ。どちらかというと普通に名前で呼んでくれればよし、何よりも驚きなのは・・・」

英次は魔理沙の方向に顔を向いた。

「まさかこの世界にも魔法使いがいるとは予想外だよ。あいつもきつと喜ぶかもしれないよ?」

「あいつつて?」

「お前と同じ魔法使いさ。こちらではウィッチ族って言っけどな、お前みたいに箒に乗って空飛んだりとかもするんだよ」

「じゃあ、王様のいる世界にも魔理沙さんやアリスさん以外の魔法使いがいるってことですか!?!」

文は神社の時よりも目を輝かせながら英次に問いかけた。

「そうだけど・・・」

「すごい！すごいですよ霊夢さん！どうせなら私自身がその世界に行ってみたくらいですよ!」

「じゃあ1人で行け!!!」

ギャーギャーと騒ぎ出す霊夢と文だが、この展開で忘れ去られていた者が突如割り込んでくる。

「コラー!!!アタイと大ちゃんを忘れるな!!!」

「.....あ、.....」

一同は静まって2人に顔を向けた。

「大体れーむにまりさ！ここで会ったが100万光年目、今日こそアタイにやられてもらうよ!」

「それは距離よ、この?」

「だからアタイはバカじゃないってばー!」

この時に誰も知らないが、キバットはこの瞬間に笑いかけていたのは言うまでもない。

「でもチルノちゃん、あの事のおかげで助かったんだから少しはお礼でも・・・」

「大ちゃんは甘い！情けなんてものはブヨウよ！」

「それを言うなら情けは無用だぜ」

今度は魔理沙がツツコむ。

「・・・と、とにかく勝負よ！」

「（相変わらずの？ね・・・）悪いけど、相手している暇なんてないわ」

霊夢はチルノが吹っかけてきた勝負には乗らないと断言した。

「今私達はスペルカードが使えなくなってるのよ。あんたも同じように使えない状況よ」

「スペルカード？」

英次は聞いたこともない顔で霊夢に聞いてみると、文が見本となるカードを見せながら解説する。

「私達が揉め事を解決するために行う方法、弹幕ごっこで使用するカードですよ。つまり得意技です」

「得意技・・・ってか、使えないってどういうことなんだ？」

「どうやら私達、敵の罠でカードの力が封印されてしまったようなんですよ。スーパードンとかとやらにでして・・・」

「！ 英次、まさかあいつ等の仕業じゃ・・・！」

「ああ、状況はかなり把握できたぜ」

此処へ連れてこられた理由が把握できた英次。その直後にフランを連れている咲夜とタツロツト、霊夢達の後を追いかけていたチェリが同時にやってきた。

「キング様！先へ進んでいったので心配しましたが、ご無事のように何よりです・・・」

「咲夜か。それにチェリーまで来てたのか？」

「町の住民は全員避難させました。当分は安心できるでしょう・・・」

「チエリーは被害状況を知らせ、咲夜に連れられていたフランは魔理沙を見てはキヤツキヤツと喜ぶ。」

「魔理沙、久しぶり！」

「よう、フラン！最近顔を見せてなかったけど、また外に出てたのか？」

「・・・いきなり出てきてですけど止めにしておきませんか？英次さんはこれからあの館へ行かなきゃいけないのですよ？」

咲夜の横にいたタツロツトは湖の向こうに見える紅魔館を見て皆に言った。

「確かにこんなところで道草食ってる場合じゃないよな・・・」

「アタイはイヤよ！これかられーむとまりさにリベンジしてやるんだから！」

すぐに出発しようとしていたが、チルノは納得できないようである。

「じゃあ一つ問題を出すわ。15×35はいくつ？」

「え？それは・・・えーっと・・・」

チルノは咲夜に出された計算問題を計算し始めた。

「さあキング様、今のうちに行きましょう」

「えっ、あれで・・・いいのか・・・？」

イマイチ納得しない顔にいるが、咲夜達はすぐにその場を後にした。ハッキリ言ってこの世界、ハチャメチャだとは本人の身で体感したのであった。

そしてようやく紅魔館へ到着すると、美鈴が英次の到着を見て咲夜の元へと来る。

「咲夜さん！予定より遅かったのですがどうしたのかと思いましたよ・・・」

「少し邪魔者がいただけよ。・・・とは言え、この日だけよく寝ずにいられたわね」

「そりゃあ王様がお見えになられる大事なことですから・・・って、それじゃあ私が印象悪いことを王様に言っているのではないのです」

か!？」

「自業自得よ、早く通してくれるかしら？」

「は、はい!」

美鈴が門を開けて通れるようにした。

「それで咲夜さん、王様の姿が見当たらないのですがどちらに「俺だよ」え？」

英次は美鈴の前に立つ。

「俺がファンガイアの王だ」

「え・・・ええっ!？この人ですかあっ!？」

ナイスリアクションで美鈴は動揺した。

「ハッ、すみません!王様なのだから高貴な方とされていたのですけど、予想外の上で・・・」

「気にしてないよ。じゃ、通るので」

「ついでに私達も通るぜ!」

咲夜に続いて英次が門を通る直前、彼の後ろにくつつくように魔理沙がこっそりと通ろうとしていたが・・・

「貴方はダメです!!!」

素早く掴んで進行を妨害した。さすが門番である。

「なんだよー、王様に会うのが目的で来てるのにさ」

「またパチュリー様のところで借りるつもりでしょうが!」

「魔理沙さんは相変わらずの泥棒っぷりですからねえ」

「泥棒？」

英次はふと気にしていたが、咲夜に声をかけられたために話はお預けにして奥へと去って行った。

魔理沙は美鈴にこの通りだとおねだりする。

「頼むからさ。今回だけでいいだろ?な？」

「二言なんてありませんよね？」

「無い!」

「本当にですね？」

「本当!」

何時から睨めっこしているのかはさておき、美鈴は考えた末に答えを出した。

「分かりました、通つてよし！」

「サンキューだぜ中国！」

「だ・か・ら私は中国じゃありません！」

魔理沙は笑いながら門へと入って行った。他の3人も入ろうとするのだが……

「……ハア……やっぱり私は帰るわ」

ふと、霊夢は紅魔館へ入るつもりが急に帰ると断言したのであった。

「あや？霊夢さん、どうかしたのですか？」

「もつたいないぞ？」

「いいのよ別に、私はああいう奴が気に入らないから……」

そう言い残して霊夢は潔く空へと飛び去って行った。

「あやや、相当機嫌を損ねてますね」

「仕方ないからワシらだけで行くかあ」

結局靈夢派のことは放っておいて紅魔館へと入る2人であった。

[illegible]

一方、霊夢は博霊神社へと降り立つ……のだが、

「あれは誰かしら？」

霊夢の前には、男性が賽銭箱の前でお祈りをしている様子があったのだ。

折り紙のような赤い鳥と、青い狼、そして緑色の猿が彼の周りにい

ながらである。





霊夢「とりあえずスッキリしたわね。では代わりに私達が担当するけど、どうもひどく感じないかしら？」

幽香「全くね。でもこれも彼の手で動かしているんだし、あと2回くらい半殺ししなきゃいけないみたいだけど…」

霊夢「…で、今回の様子じゃ最後に出てきたこの男よね。まだサイドが続きそうだけど、他のは大丈夫なの？」

幽香「さあどうかしら？やはり彼の考えではなくて？」

サイドもちゃんと替えていきます。

霊夢「それじゃあ次回に持ち越しね」

幽香「ではまた次回ね、彼がもし使死んだら私たちが代わりにやるけど…フフフ…」

次回からは普通に私がやります。

幽香（チツ…いい加減なことを…）



「ああ、ルリオオカミのことか。結構鼻が利く奴だから吠えたりするんだよ」

「ルリ・・・オオカミ？」

「そう、俺の相棒って奴。それでこの鳥がアカネタカで猿の方がリョクオオザル」

とりあえず吠えるのをやめさせようと、右腰に付けていた道具を軽く振るう。すると音楽で使われる音叉へと変わり、ルリオオカミに軽く叩いた瞬間に青い円盤状のディスクへと変わってしまったのだ。

「狼が丸い奴に変わった・・・？」

「これらはアニマルディスクって奴だ。俺をサポートしてくれるんだけど、ルリオオカミが何か嗅ぎ付けて追って見たらこの神社にたどり着いたんだよ。お祈りはそのついでさ」

その時に霊夢はこの男が何者なのかすぐに理解した。

この男は間違いなく、外来人である。

「・・・1つ聞くけど、名前はなんていうの？」

「俺？俺はヒビキだよ。シュッ」

その男性、ヒビキは指をクルッと回して挨拶をした。

「シュッ？」

霊夢はさっきの動作が、手分からなかったようである。

「これは俺の癖だ。それで君は・・・」

「ここの主よ。名前は博麗　霊夢」

霊夢も自分の名前を言う。

「それじゃあヒビキ・・・いや、年上だからヒビキさんでいいよね？私が言うことをよく聞いてくれるかしら？」

「？」

ヒビキはどういうことなのかと首を傾げ、霊夢は説明を始めた。

少女説明中・・・

「・・・ふーん、別世界かぁ・・・」

「やけに驚かないのね。普通なら『そんな話信じられるか！何を証拠にそんなこと！』って言うのに・・・」

「なーに、俺がいた場所も信じられないことばかりだから、要するにそれと同じことだろ？けどここにも魔化魍じゃないけど妖怪がいるんだなぁ・・・」

「まかもう？」

「ん？知らないのか？」

「そりゃ聞いたこともない名前だから・・・」

「そつか。魔化魍ってのは俺達の世界にいる化け物さ。悪魔の『魔』、化け物の『化』、魑魅魍魎の『魍』。この3つを合わせて魔化魍まかもうって呼ぶんだ。見た目は霊夢ちゃんが見るような妖怪ばかりだよ」

「じゃあ別の方向からいうと、ヒビキさんは魔化魍を退治してする専門家ってことでいいのね？」

「専門家というより、鬼だ」

「鬼？」

「そう、鬼だ。響く鬼と書いて響鬼ひびきと呼んでいる」

ヒビキ・・・彼はまたの名を響鬼と呼び、魔化魍を退治する役目を持つているのである。

霊夢は逆にこちらが信じられないと思っていたのは確かだった。

「思えばオロチ現象は大変だったなぁ・・・あ、オロチ現象ってのは魔化魍が大量発生することだ」

ヒビキは知らぬ間に過去を語っていた。そんな霊夢は彼を見て何かと感ずる。

（この人は何か違う気がする・・・裏に何か隠しているような気が・・・）

秘めたる力というべきか、霊夢は彼の強さに息を飲む。

「霊夢ちゃん？どうかしたのか？」

ふとヒビキが霊夢の様子を伺った。

「何でもないわ。それでヒビキさんはこれからどうするつもり？行く当てはないのでしょ？」

「そうだなあ。霊夢ちゃんは俺を元の世界に返してくれるんだよね？」

「できるけど、今ここで非常事態が起きてるから忙しくて無理なのよ」

「非常事態ってのは？」

「封印されていた怪物の復活よ。グリードって奴だけど・・・知らないわよね」

「聞いたことない奴だけど大変だなそりゃ」

ヒビキはこれからどうしようかと考えていたその時、ルリオオカミがまた吠え始め、さらにリョクオオザルも跳ねながらヒビキに何かを伝えようとした。

「ゲヘヘ、うまそうな人間が2人いる・・・」

「うちの子の餌になりそうだ」

突然不気味な声が聞こえ、霊夢は身構えた。すると鳥居から見慣れない化け物が現れる。見た感じではこの世界にいてふさわしいほどの妖怪の姿である。

「グリード・・・？」

「ありゃ怪童子と妖姫だな。魔化魍を育ててる奴らだ」

ヒビキは見おぼえあるようにして霊夢に言った。そう、彼らは男女2人で魔化魍を育成している化け物、童子と姫なのだ。

「じゃあ、あれが魔化魍の一種ということなの？」

「本来はもつとデカい。だが此奴らは下級の魔化魍ってところさ」  
ヒビキは音叉を人差し指のところに軽く叩く。

キーン・・・・・・・・

森の中で感じるような音が神社に響いた。

「ここは俺がやろう。鬼がどついう風して戦っているかを見せてあげるよ」

「それって、変身ってことよね？本当に鬼になれるの！？」

「見てればね」

ヒビキは音叉を額へかざすと鬼の模様が現れ、次の瞬間にヒビキが火達磨へと化したのだ。

「ちょ、火達磨ア！？早く鎮火しないと・・・！」

これじゃあ変身どころか焼け死ぬと思つて鎮火に取り掛かろうとしたその時だ、炎の中から声が聞こえてくる。

「はあああああああああああ・・・たああつ！！！」

炎は中にいるヒビキの腕の振るいで吹き飛び、そこには藍色のマジョーラのボディをした鬼がいた。

この姿こそがヒビキの変身する仮面ライダー響鬼であるのだ。

「お、鬼だと！？」

「こいつ、鬼だったのか！」

童子と姫は動揺した。魔化魍に取った鬼は天敵のようで、童子と姫は警戒態勢を張る。

「よっしゃ、行くぞ!？」

ヒビキは背中から武器である『音撃棒・烈火』をとりだして戦い始めた。相手も返り討ちにしようとするが、ヒビキはスイスイとかわしつつ、奴らを太鼓のように叩きつけていった。

「ぐっ・・・!？」

ラッシュを受けて引き下がりそうになる童子と姫。ヒビキは一気に片付けようと両腕に力を入れると烈火が燃え上がり、それを勢いよく相手へと振るった瞬間に火球が放たれた。

「うおおっ!？」

回避しようとした2人だが、姫が避けきれずに火球を受けて爆発した。

「ギエエツ! 貴様アツ!!」

童子は怒り狂って襲い掛かるが、ヒビキは素早く烈火の片方を左手で持ち、手ぶらとなった右手でバツクルにある『音撃鼓・火炎鼓<sup>かえんつづみ</sup>』を取り外す。

「それっ!」

ヒビキは走ってきた童子の腹に火炎鼓をうまく押し込む。すると火炎鼓がみると大きくなり、大太鼓へと姿を変えてしまい、ヒビキはもう一と烈火を両手で持ちながら構えた。

「音撃鼓・火炎連打の型!」

火炎鼓へ烈火を力いっぱい叩き始める。しかもその一発が物凄く、霊夢も足を踏ん張らせているだけで踏みとどまれないと思わずにいた。

「たああっ!!」

ヒビキが止めに強い一撃を放つと、童子も姫同様に爆発。辺りは紙吹雪のようにハラハラと舞い落ちている。

「うん。衰えもないし、練習になれたから上出来だな」

烈火を収めたヒビキは霊夢に顔を向けると、何かを求めるようにして彼女に言った。

「霊夢ちゃん。お願いがあるんだけど・・・部屋を貸してくれない



かな？」

「・・・は？」

霊夢は哑然とした。

「いや実はね。変身しちゃうと服を失って、元に戻るには隠れる場所を借りて服を着替えなきゃいけないんだよ」

「それってもしかして・・・今・・・」

「そういうことなんだ。この通り！」

ヒビキは手を合わせながら言う。

「・・・分かったわ。できるなら早めにしなさい！」

「助かるよ」

ヒビキは早速神社の中へと入って行った。

男性着替え中・・・

「お待たせ！」

服を着替えてきたヒビキが戻ってきた。

「全く、一体どういう仕組みなのよそれ。見ている私が恥ずかしく思うじゃないのよ」

「俺でもよく分からないからなあ・・・というより、服の調達がしたいんだがどうすればいいかな？」

着替えていたヒビキは唐突に悩みだした。どうやら彼の所持している服がもう無いようなのである。

「人里に行けば服くらい買えるわ。ここから見えるでしょ？」

霊夢が指を差す先には里がはつきりと見えている。

「ほお。じゃあ、そこへでも行くとして服を買いに行きますか。霊夢ちゃん、少しだけだったけど世話になったよ」

「それはどうも・・・それとお賽銭もしてくれたらうれしいけど」「賽銭？まあいいけど・・・」

ヒビキは霊夢に言われたとおりに寶錢箱へチャリンとお金を入れた。  
（チツ、８０円かよ・・・）

しかし入れてくれたのは良いものの、少なかつたために腹を立てていたのは放っておくでしょう。

「これでいいよね？それじゃあ俺はこれで」

ヒビキは手を振りながら神社を後にし、霊夢はため息をついた。

「全く何よあの人……はあ、あ、疲れたわ」

霊夢は神社でゆっくり休もうと中へ入って行った。

[illegible]

「  
バ  
ン  
」

その頃の有頂天では、ヤミーとの交戦が今でも続いているところだった。

むしろR天子が変身する電王が押している様子だ。

「へへッ、君ダンス上手だね。もつと踊る？」

R天子はデンガッシャー・ガンモードでヤミーをドンパチ撃つていき、撃たれているヤミーはクルクルと回りながらダメージを追っていく。

「何なんだ此奴は！？全く動きが読めないだと……！？」

グリードはR天子の実力に啞然しており、加勢してもやられると危険を感じていた。

「ねえねえ、どうせなら君も踊ってみる？」

「ギクツ！？」

R天子から気づかれてしまい、グリードは逃げようと空へ飛びあがるが、R天子は逃すまいとグリードを撃ち落とす。

「ま、待て待て待て！俺は音痴だから踊り方知らないんだ！見逃す

だけでも・・・ガハアッ!？」

撃ち落としたところに追い打ちをかけるR天子、銃口をグリードへ向けた。

「それじゃあ最後行くよ? いい?」

「ダメダメダメ! 絶対ダメ!」

グリードは両手をあげながら否定するが、R天子は首を横に振り一言言う。

「答えは聞いてない」

R天子はパスケースを取り出してベルトのバックル部分にセタツチをした。

F U L L    C H A R G E

ベルトからエネルギーが両肩のジュエルへと伝ってチャージを開始。デングツシャーに球体が現れた。

「ええい! お前が身代わりにでもなれ!」

やむを得ずにグリードはヤミーを捕えて盾代わりにでもなろうとする。

「無駄だよ」

R天子は引き金を引いて発射する。

が、発射されたのはチャージされた光弾ではなく極太のビームで、塞ごうとしていたグリードもろともに姿を消し飛ばしてしまった。

辺りはその一撃で飛んだ跡とセルメダルが残されているだけである。

「・・・ふう」

R天子はベルトを外すと体から紫色の龍みたいな怪人改め、リュウタロスが脱け出し、天子の姿へと戻ったのである。

「・・・あれ? 私・・・」

ふと天子が目覚まして周りを見渡すと、そこにはやはりリュウタ

ロスが天子の顔を見てはしゃいでいた。

「だ、誰！？」

思わず天子は腰を抜かす。

「僕リュウタロス！ちようどお姉ちゃんが襲われてるのを見たから、僕が助けたんだ」

「お姉ちゃん・・・？私のこと？」

「うん！」

リュウタロスは元気良く頷いたが、天子は首を横に振りながら言い返した。

「変なこと言わないで！私は比那名居　天子って名前があつて、てんこでもお姉ちゃんでもないの！！」

自分の名前を言う天子だが、リュウタロスは突然と首を傾げるようにして天子の顔を見た。

「でも、康博のお姉ちゃんにそっくりだよ？」

「どこがそっくりなの！？」

「顔とか、髪とか、全部！」

次々と返していくリュウタロスに天子はため息をつきながら落ち込んだ。

### 第13話「響きと魔化魍と紫の龍」（後書き）

またしても長くして申し訳ない、作者でございます。

先週と二週間前から新しくガタキリバコンボとライオンメダルが入ってきたとの話で、近いうちに霊夢もガタキリバに変身できるようにしております。

とはいえガタキリバの能力はやバいですね^^;

まさかの分身に鳥肌が立ってしまったので使える！と思ってました。

（その代わり必殺技はキックのようですが・・・）

さてさて、本日で三人目の原作キャラクターのヒビキさんが登場しました！以降彼がどれだけ重要になるかってことでいわゆる主要キャラクターとなります、どうぞ応援をよろしくお願いしてもらえば幸いです。

とりあえず霊夢サイドはここまで！次回は久々に星司サイドへと移ります！

## 第14話「恋人は仮面ライダー!？」

剣崎が星司達からの話を聞き終えたその後、朝食の支度を終えて食事をする一同に混ざって剣崎も一口とドレッシングが入ったサラダをいただく。

「！これ、すごく美味しい・・・！」

「それは星司君が作ったドレッシングだって。家の材料を使ってここまで美味しくするなんて流石ね」

「栄養も抜群なので体にもいいですよ。あとルーミアちゃんが食べているの料理も俺が作りました」

ルーミアが今食べているのはオムライスであるが、これも星司の腕によって美味しくないとかわせないかのような仕上りの故、次々とルーミアの口の中へ放り込まれていった。

「星司は料理が上手いのだー」

「・・・それで、星司や剣崎さんはこれからどうするつもりなの？何もすることなんてないわよね？」

「俺は外へ行くつもりだよ。ワームを多く退治しとかなきゃいけないから」

「ワーム？」

星司は外へと出てワームの勢力を減らそうとしている予定だが、剣崎は聞きなれない言葉に目を丸くする。

「ワームとは宇宙から来た生命体です。人間に化けながら近づくのが奴らの目的なんです」

星司が説明をして剣崎は納得した。因みに剣崎のいた世界でも人間へ変身できる上級アンデットやトリアル、そして彼の正体でもあるジョーカーが存在している。

「とはいえ、外への行き方が分からなければいけませんよね・・・」

「それなら大丈夫よ。ルーミアは道筋を覚えているから彼女を頼りにしてちょうだい」

ルーミアは剣崎をここまで運んできたのだから、永琳は彼女について行けばよいと言う。が、しかし・・・

「うーん・・・ルーミアは剣崎と少し遊びたいから、今は案内できないよ?」

「え?俺と?」

意外にもルーミアは剣崎を気に入っていたようである。妖怪同士だからかどうかは知らないが、彼女がいなければ外には出られない。

「じゃあ、鈴仙はどうなの?」

「私はその・・・師匠の手伝いがあって忙しいから・・・」

「じゃあこれならどう?東側へ進んでいく、家が見えてくるのだけど、その家にいる人に頼めば外へ案内してくれるわよ?」

「八意さん達以外にも他にこの竹林で生活している人がいるんですか?」

「ええ、普段は迷い人を案内するのが役目。名前は・・・」

その時、永琳はその名前を言う直前に止めてしまった。何故か知らないが、輝夜が殺気を放っているのが目に映る。

「・・・名乗りたいところだけど、姫様はその人と仲が悪いので言えないわね・・・」

（仲が悪い?気になるけど、輝夜さんの機嫌が悪いのは事実か・・・）

何か因縁があるのかと思った星司は、食事を済ませると玄関へと向かった。

「星司、昼はどうするつもり?」

てゐる星司を見送りに来て質問する。昼は自分で何とかするというと、星司は戸を開けて面へと出ていく。

「じゃあ、行ってくるよ」

「行つてらっしゃい!」

戸を閉め、永琳が言っていた方向へと進み始める。空には日光が星のように光り輝いており、左手で光を避けながら歩く。

辺りは涼しく、とてもいい一日にはなりそうだ・・・都合が良けれ

ばの話だが。

それから5分ほど歩くと家が見えてきた。あれがそうだろうと小走りで向かい、ドアのところまで来てはノックした。

「すみませ〜ん！誰かいますか〜？」

声をかけてみるがどうも返事がない。鍵は閉まっているようなので留守みたいだった。

都合が悪かったなあ・・・と星司が思っていると、ガタツクゼクターが現れて星司に何かを話しかけるしぐさをする。

「・・・どうかしたのか？」

ガタツクゼクターはその方向に向いて飛んでいく。星司も追いかけてみると竹の陰に誰かがいることに気づき、その場へと来てみる。するとそこには女の子が泣いていた。白衣の服に緑色のツインテールをした女の子である。

「どうかしたの？迷子にでもなったの？」

「ぐすつ・・・うつつ・・・」

泣き止みそうにはない。星司は女の子の頭を撫でる。

「よしよし、俺と一緒にいてあげるから。もう泣かないで」

女の子の涙をぬぐって笑顔を見せる星司。

だがその時だった。星司の脚に力が抜けてしまい、女の子もろともに仕掛けられていた落とし穴に落ちてしまう。

星司は女の子を抱きかかえながら落ちた先へ背中から叩きつけられる。

「イタタタ・・・大丈夫？」

女の子が無事かを確認する・・・が、星司の腹の上には女の子がいなかった。何が起こったのかと思っている度、上からさっきの女の子が釣瓶に乗りながら降りてくる・・・というより、釣瓶が浮いているではないか。

「き、君は一体・・・！？」

星司は信じられない光景に驚く。すると何処からか声が聞こえてきた。



パルパルパルパルパルパルパルパルパルパル……

なんとも不気味な声である。動物の鳴き声かどうかと思っていると、その正体は17歳くらいの少女だった。

「貴方の周りはいつも賑やか。地底から見えていたヤマメが貴方に恋して、おまけにキスメに優しくして……貴方は本当に妬しいわ」

「妬しい……じゃなくて、地底ってどういうことなんだ!!それに君達は俺を計っていたのか!？」

ワームかどうかは知らないが、何か怪しいと感じていた星司はガタツクゼクターを手に取る。

「まあまあ、落ち着いて私達の話聞いてくれないか。悪気なんてハナから無いんだしさ」

物凄い剣幕へと変わりつつあった雰囲気はまた別の者によって消される。次に現れたのはその中で年上の女性、何よりも角がある。

「貴方は……?」

「私は星熊勇儀ほしくま ゆうぎ、sonでもってコイツ等は私の連れ。私達はお前をここへ案内しようとしてたんだが、信じないだろうと思ってたから方法がこれしかなくて無理矢理でもキスメに演説してもらったわけさ。何しろ、ヤマメがお前のことが好きになって気にしてるようだ

し」

勇儀が話すには、星司に恋した女の子がいるようで、直で告白できない彼女の為にと星司を連れくすることを考え、先程のような演説をしていたらしいのである。

「事が済めばお前を地上へ返してやるよ。だから少しの間だけできないか？ ヤマメを何とかしてやりたいし、本人の思いも本当みたいだしさ」

勇儀の話を聞き終えた星司は考え、答えを出した。

「彼女に案内してくれないか？」

「決まりだな。こつちさ」

星司は本人に会うことを決め、勇儀たちは彼女の元へと案内した。ちょうどその先には茶色い服装をした女の子がいる。

「ヤマメ、お前の相手がお出迎えだぜ」

勇儀の言葉に彼女、ヤマメは怯えるようにして星司に振り向く。

「天野川 星司だ。話は聞かせてもらっているから、君の名前を聞かせてもらつよ」

「・・・黒谷ヤマメです・・・」

「じゃあ、ヤマメ。今からいうことをよく聞いてくれないか？ あまりこつというのは言いたくはないんだけど・・・」

「・・・それって、断りにきたってことですか・・・？」

ヤマメは星司に言う。

「私は貴方が好きになっても、私のせいで病気になるから・・・だから、私に近づかない為に断ろうとしにきたんじゃないんですか・・・？」

ヤマメは泣きそうになる。何やら消せないような悩みを抱えているらしい。

すると星司は彼女の頭を撫でた。

「ヤマメ。俺はそんなつもりで言いに来たんじゃないよ」

「じゃあ、貴方は何を・・・？」

星司は微笑み、地の中から天へと人差し指を上げる。

「天道さんが言っていた、良い者に悪い嘘は似合わない。君はさっき、自分の恋心と悩みをハッキリと俺に言った。俺が認めるのは、正直に話せるその優しい心だけだ」

「！」

ヤマメはこの言葉を聞いて思い出した。始めて彼を好きになった直後の話である。

『だったら告白するべきだぜ！ヤマメは正直者なんだしさ！』

『で、でもあんな人なんて無理だよ・・・』

『大丈夫！私達がアイツのキューピットになってやるからさ！』

「優しい心・・・」

「ああ。俺は素直に話せる奴しか目を見ないから」

ヤマメは顔を赤くして自らの胸に手を当てた。

（ドキドキしてるのに、普通に話せる・・・もしかして、この人は私とまともに話す為にわざわざ・・・？）

ヤマメ自身のことを考えていた星司を見て、彼女は思った。

（そこまで考えていたなんて・・・やっぱり私が思っていた人・・・うん、そうだよ！この人は、私の思っていた人だよ！）

ヤマメの顔に笑顔が現れた。見守っていた3人はというと・・・

「イイハナシダナー」

「うっ」

勇儀とキスメは感動。しかし残り1人は嫉妬を流していた。握り拳をしながらである。

「・・・あ~~~~！もう！我慢ならないわ！」

「え！？ちよつと、パルスィ！？」

勇儀は嫉妬を貯め込みすぎて爆発寸前な彼女を呼び止めようとしたが既に遅し、星司とヤマメの元へ来て星司に指を差した。

「その貴方！！死んでもらうわよ！！？」

「え？」

星司は唐突のことに固まった。そんな彼女、パルスィは懷からサイのマークが書かれたケースを取り出す。

すると星司の目つきが変わった。

（あのケース、どこかで見たことが・・・！？）

パルスィがケースを前に突き出すと、腰にベルトが出現し、ケースをベルトへセットした。

「変身！！！」

すると彼女の体が鋼鉄の鎧をしたサイの姿・・・

仮面ライダーガイへと変身したのである。

## 第14話「恋人は仮面ライダー!?」(後書き)

どうも、作者です。

今回ではまさかの告白シーンとのことでやりました。何故ヤマメにしたかといえと答えはただ一つ、虫仲間だからです(蜘蛛とクワガタだから)。

ですのでヤマメは今緊張感ある状態ですが、後程に通常の設定となります。まあ病気はうつさない程度にしますので主役の死亡フラグはまずありません。ご安心ください。

そしてやはり、嫉妬の女王様であるパルスイが殺しにかかりと次回から大変なことになります。

ここからは今日のことについての余談なのですが、今回のオーズではついにらーたーのコンボが出ました。どうやら高熱の力を持つ超高速戦士なので、かなり強いコンボだと思っではおります。

まさに灼熱の獅子ガオ　ツドみたいに(違  
スキヤニングチャージもキックではなく高速で接近してのクローです。・・・

おい！セロ距離に来てからクローをしてない！！??

普通なら貫くように切り裂くはずが、期待外れでした。しかしライオンの咆哮がプラスなので許しますがw

さらにさらに、青のメダルも手に入れた様子なので次回、さらに次回も楽しみです！これからも映司君がどこまで強くなれるか(明日のパンツに限る)来週も見ざるを得ませんなあ。

ではまた次回！

## 第15話「トゲトゲハートの旋律」

「ヤマメ！」

「きゃああっ！」

いきなり星司に襲い掛かってきたパルスィから辛うじて避ける2人。星司はヤマメを抱きかかえたまま彼女を睨む。

「いきなり何をするんですか！貴方たちはこの子の為に手伝ってたんじゃないのですか！」

「黙りなさい！妬しい貴方に私の気持ちなんて分からないわよ！！」襲ってくるパルスィに必死で逃げる星司とヤマメ。星司は一旦、勇儀の元まで来るとヤマメを離して彼女に引き渡した。

「この子をお願いします！俺は彼女を・・・」

「あいつと戦うのか！？お前じゃ無茶すぎるぜ！」

勇儀は人間が相手できるものじゃないと星司に忠告する。が、

「ヤマメがどうして俺を好きになったかの理由が分かったんですよ。寧ろ、これを見たから

そうじゃないのかと思ったはずですよ」

星司はガタツクゼクターを手にして叫んだ。

「変身！」

H E N S H I N

ベルトに付けた直後に星司の体がガタツクへと変身する。その時にヤマメはハッとした顔で驚いた。

「・・・あの時の姿・・・」

「何？」

勇儀はヤマメの言葉に耳を傾けた。

「やっぱりそうだったんだね。これはあくまでもメカだけど、勇儀の説明の中であつた蜘蛛<sup>むし</sup>さ」



そんな2人の前に足音が聞こえ、暗い闇の中から青年が現れる。星司とは違って何やら怪しい雰囲気をしている。

「話を聞かせてもらったけど、いい方法があるよ？」

「だ、誰・・・？」

勇儀は青年の怪しい気に警戒した。すると青年が懐からサイのマークがある黒いケースを取り出すと、パルスィに渡した。

「・・・これは？」

「カードデッキ。そのデッキを映るモノなら何でもいいからそこに向けるんだ。そして現れたベルトに付けてごらん」

「？　こう・・・？」

幸いにも溜池の近くにいたので、水面にデッキを向けてみた。するとパルスィの腰にベルトが現れ、デッキを装着したところ・・・

「！？　何なのコレ！？」

パルスィはガイへと変身したのだ。さらに目の前の水面からサイが飛び出し、パルスィの前で大人しくしながら見つめる。

「これで君は、メタルガラスと契約を果たして仮面ライダーへとなった。君は今日から仮面ライダーガイだ」

「契約？仮面ライダー？・・・どういうことなの？」

パルスィはおろおろと自分の変身した姿を見て青年に言う。

「心配はない、デッキを外せば元の姿に戻る。だけどこれだけは言っておくよ」

「？」

「君はこれから、多くのモンスター、そして仮面ライダーを相手しなければならない。負ければそこで終わりのサバイバル勝負。ただその代わり、君にとって最高のストレス解消にできる。嫉妬があるのなら是非それを使って、晴らせばいい。それじゃあ・・・」





ところをガタツクダブルカリバーを両手に取りながら鉄へと組み立てる。

## RIDER CUTTING

パルスィがメタルホーンを振りおろし、星司がダブルカリバーで受け止めるようにキャッチした。

「パルスィ、と言ってたよね？友達が少ないのはさぞかし辛いはずだけど、ここまですることは無いよ。もう一度考え直してみたら・

・

「しつこいわね!!」

メタルホーンに重圧がプラスされ、ダブルカリバーを押しつけた。そのせいで星司の態勢が大幅に崩れ、攻撃を許してしまう。

「うわあっ!?!」

胸部の鎧に火花が散った。距離を開けるがパルスィはそれを許さない。

（パワーもあって身軽・・・ライダーの力か、はたまた彼女の嫉妬心のせいかな・・・それならこうするしかないか!）

星司はゼクターホーンを左へと操作し、ガタツクゼクターを元の形に戻した。

## PUT ON

マスクドアーマーが再装着されてマスクドフォームに戻った。クロックアップもライダーキックも使えない代わりにパワーで応戦しようと、両肩のガタツクバルカンが火を噴きだす。

「!?! クツ・・・!!」

銃火器が飛んできたことでメタルホーンを盾にしながら防御する。もらった!と、星司は彼女へタツクルを仕掛けようとしたその時、パルスィはカードを引いてすぐさまメタルバイザーに読み込ませた。

## A D V E N T

次の瞬間に星司の真横から強い衝撃が走り、星司は突き飛ばされてしまった。

「な、何なんだ・・・!？」

その時星司に見えたのは、サイだった。パルスィが契約したモンスター、メタルゲラスである。

「敵は1人だと思ったかしら？さあ、ここから貴方を畳み掛けてあげるわ！」

マズい。2対1であり、どちらもパワータイプの者。そんな奴らを相手にするなら勝ち目がほとんどないではないかと確信する。

（クロックアップしちゃったら彼女に痛い目を合わせる。かと言ってこのままでは・・・）

星司は袋のネズミにされてしまう。そうしたピンチの中、動き始めようとして者が現れる。

「!!」

「どうかしたの、剣崎？」

剣崎一真だった。適当に外に出て何かしようかと考えていたその時、ジョーカーである彼に気配を感じ取らせたのである。

剣崎はルーミアに言った。

「ごめん、ルーミアちゃん。すぐここに戻ってくるから待っていてくれ！」

剣崎はルーミアを残し、星司が向かって言った東の方向へと走り始める。

「・・・どうしちゃったのかなあ？」

ルーミアは真剣な様子の剣崎を見て不安になっていた。  
すぐに向かっていた剣崎は、星司が落ちた穴を発見する。

（この穴から変な感じ・・・まさか、アンデット!?）

剣崎は疑う。そもそもアンデットは剣崎のいる世界で2匹のジョーカー以外は全て封印した。となれば残るのはただ1つ、もう一匹のジョーカーだ。すなわち・・・

「・・・始？」

封印したくなった彼、相川 始かと思っていた剣崎。兎に角真相を確かめるべくと穴へ飛び降りると、そこには剣崎が思っていたのは全く違うものだった。

「星司君!？」

そう、パルスィとメタルガラスに苦しめられている星司だったのだ。近くには勇儀達がいる。

「おい、あれは一体何なんだ!？」

剣崎は彼女達にこの状況を聞くことにした。

「何って・・・誰なんだお前」

「そんなことはいいから聞かせてくれ!何で星司君がこんなところにいるんだ!!」

「そ、その・・・」

するとヤマメが怯える様子で剣崎に話し始めた。

「私の友達が誤解で、星司さんを襲ってるんです・・・私は星司さんが好きになったからここへ連れてきただけなのに・・・」

「誤解・・・?」

「つまり、嫉妬のせいで怒ってやがるんだ。お前が止めようとしても無理だ。あのサイの妖怪を連れてる間は・・・」

勇儀がその様子を剣崎に見せると、剣崎は驚いた。

（気配はあの怪物からなのか!けどこいつはアンデットじゃない、別の何かなのか・・・!?)

メタルガラスを連れているパルスィのことも気になっていたが、彼はやるしかなかった。

「・・・止めるさ」

「え？今なんて？」

勇儀はもう一度と耳を傾ける。

「あの怪物と仮面ライダーを・・・止める！」

「・・・ハア！？」

勇儀は啞然とした顔になった。

「お前どうみても人間だろ！？無理に決まってる！」

「無理じゃない。俺は仮面ライダーなんだ！」

剣崎はすぐさまブレイバツクルとラウズカードを取り出した。勇儀達はまさかと思いつながらじっと見ていると、ブレイバツクルに挿入されたラウズカードを腰に当てた瞬間、シャッフルアップが剣崎の腰を回ってベルトが作られる。

ブレイバツクルからシグナルの音が鳴り、剣崎は右手をゆっくりと左上へあげ、勢いよく裏返しては叫んだ。

「変身！！」

素早く左手と交差し、右手はターンアップハンドルへと持ってくる。と同時に勢いよく引く張った。

## TURN UP

スピードのマークが表へと捲り上げられると、そこからオリハルコンエレメントが放出してはメタルゲラスへと直撃した。

「何！？」

パルスィは自分から左側の方向に向くと、青い壁があることに気づく。すると・・・

「ウエエエエエエエエエエエッ！！！！」

壁から剣崎が飛び移ってきた。いや、剣崎がその壁に入った瞬間に青い仮面ライダー、ブレイドへと変身したのである。

「け、剣崎さん！」

星司はその声に気づき、剣崎はパルスィに自ら持つ醒剣ブレイラウ

ザーを振るった。

「仮面ライダーが増えるなんて・・・何様のつもり!?」

「それはこっちの台詞だ!!」

パルスィと剣崎との言い争いが直後に発生する。

「君の友達を手伝ってしたことを、何で自分から崩すんだ!! いい加減に目を覚ましたらどうなんだ!？」

「五月蠅い!! 五月蠅い五月蠅い!!!! うるさあ                      いっ!!」

「!!!!」

メタルホーンを手に襲い掛かるパルスィに、剣崎は素早くブレイラウザーを逆手で持ち、ホルダーを扇状にオープンしてはスピードの7のラウズカードを引き抜いて、横側にあるスラッシュリーダーにカードをラウズした。

M E T A L

電子音が認識完了を確認し、剣崎の体が鋼鉄化する。そこへパルスィのメタルホーンが振り下ろされるが、ガチンツ!と音が響いて跳ね返されてしまった。

「硬い...!？」

油断したところを剣崎が鋼鉄化から元に戻り、また別のカードを2枚同時に抜いてラウズを行う。

S L A S H                      T H U N D E R

カードが読み込まれると刀身に電気が流れ、剣崎は身構える。と、そこをパルスィがカードをデッキから抜いてメタルバイザーに読み込ませた。

C O N F I N E                      V E N T

パルスイのカードが発動された直後、剣崎のブレイラウザーに流れている電気が突如消えてしまう。

「何!？」

「こういうカードがあるって、知ってたかしら？」

パルスイは今起きたことを余裕かましながら言う。

先程使用したカードは『コンファインベント』といい、カードの効果を無効化してしまう特殊なカードであるのだ。

それならもう一回!と、剣崎は同じカードをラウズして発動させるが…

## CONFINE VENT

パルスイもまた同じカードを使って無効化してしまった。

「カードは1枚だけじゃのよ？」

またもや余裕をかます。

剣崎にはもはや決めが封じ込められているのだと思いながら、態勢を立て直した。

「なんて奴なんだ…カードの効果を封じてしまうライダーなんて」

「それほど嫉妬心が酷いのかもですね。けどなんだか可愛そうにも思える気がする…」

「何？」

「言っただままの通りですよ。彼女は友達が少なくて孤独なのですから…それが嫉妬を生むことに繋がったんでしょう」

星司からの事情を聞く剣崎はどうすればいいのかと星司に言い返す。だが、星司にも彼女の怒りを止めるのは難しいとの判断が下され、もはや戦って止める以外に方法はないと考えていた。

パルスイの変身する仮面ライダーガイと、契約モンスターのメダル外ラスを倒さなければ…。

「やりましょう、剣崎さん!俺達2人で押しとめるんです!」

「…分かった。そうしよう!」

星司はキャストオフしてライダーフォームへと変わり、ガタツクダブルカリバーを手に取りながら剣崎と共に前へと走り出した。

星司はパルスィに、剣崎はメタルゲラスを相手にして攻撃する。

「ハッ！」

星司はパルスィの上を飛び越して背後に回り込み、ダブルカリバーで切り裂く。

「くっつー!!」

背中をやられたパルスィは怯み、その拍子でメタルホーンを手放してしまう。

その隙に星司はマスクドフォームに変わり、パルスィを取り押さえに出た。

「離しなさいよ!!」

パルスィは抵抗するが、マスクドフォームの耐久性にビクともせずと彼女を拘束していた。

「落ち着くんだ！俺は君の気持ちを知らただけなんだから！」

「そんなの、今見ただけで分かるでしょ！？どうせ私なんか!!」

「違う！君がやっているのは、せっかく作った友達を傷つけていることだ！君の親友までも巻き込ませて！」

星司かそういつて瞬間にパルスィはハッ和我に返り、ある人物へ顔を向けた。

勇儀である。

「私が…勇儀と親友ってことを知ってたの…？」

「星が教えてくれたからね」

パルスィの抵抗は止み、星司は彼女を開放した。



「相当辛いことを背負ってるみたいだけど、親友がいるのなら少しは耳を傾けてもいいんじゃないか？ 何か見つかることだってこの世界であることだからさ」

「……」

パルスィは黙りこみ、変身を解除した。その一方で剣崎を相手にしていたメタルゲラスは変身の解除により消えてしまい、剣崎は星司達の方角に振り向く。

星司も変身を解除して元の姿に戻る。

「俺もこの世界に来る前、孤独だったんだ。見えていたのは死を目前とした悪魔達の群ればかりで、俺は殺されそうにもなっていた…。そしたら俺に救いの光が現れて、初めて俺を救い出してくれた人と知り合えたんだ。その人は今どこで何をしているか分からないけど…今の俺は幸せだ。友達ができたときだってそうだ、俺はすごく幸せな気分になれた。それまで俺は生きるだけに必死だったけど、心が折れたりしなかったんだ。それは強い意志をもっていたからじゃないかって思ってるけど、もし君が俺と同じように強い意志があるのなら…きつと、嫉妬心に振り回されずに頑張れるんじゃないかなって思ったり…」

自分の世界で起きていたことを話す星司だが、これで彼女が分かってくれるのか不安があった。

けど似ている個所はいくらもあり、結果は彼女の返事次第で待っていると、パルスィが喋り出す。

「…やっぱり妬しいわ…」

「…どうも執念深い様子…かと思いきや、

「…でも…ありがとう…」

「…！」

パルスィは星司の目から背いた。

「別に私は、貴方の話を聞いて理解したわけじゃないわ。同情してるつもりでもそのなので話せるわけじゃないから…」

「…クスッ」

ふと、星司が笑った。

「な、何よ！私の何が可笑しいの！？」

「違うよ。可笑しいんじゃないんだ」

星司はにこにことした顔で言った。

「天道さんが言っていた。すべての女性は等しく、美しいって……」  
「！？」

これを聞いたパルスィは顔を赤くしてしまった。

「ば、馬鹿ーッ！！貴方なんかもう知らないっ！！！！」

パルスィは怒りながらも勇儀達を通り過ぎてその場から立ち去ってしまい、それを見ていた勇儀はニヤニヤと星司の顔を見て言う。

「お前、ヤマメだけじゃなくパルスィのハートまで射止めやがるなんて流石だな」

「いや、あれはどう見てもからかっていたような……」

剣崎は変身を解いて勇儀に話しかける。どう見てもおかしいだとツッコむが、勇儀にはソレをお構いなしに聞かないままだった。

「けどまあ、パルスィも少し理解はしてくれたみたいだし……。ありがとな、星司」

「礼には及びませんよ。これで俺と剣崎さんを地上へ返してくれますよね？」

「ああ、約束通りに地上へ返してやるよ」

どうやら他の皆が心配する前に戻れそうだ。星司と剣崎は勇儀達に地上へ行く梯子に案内される。

「この梯子で地上に出られるぜ」

「ありがとうございます。けど……」

星司はありがたくは思っていたのだが、話したいことがあのかな顔で勇儀に言う。



|| || || || || || || ||

その頃、地下深くにある世界、旧都のこと…。

ここは勇儀達が生活している場所で、パルスィは橋の上から自分の顔が映っている水面をじっと見つめていた。

「何よ、私のためにあんなこと言って…馬鹿…」

パルスィは星司が言っていたあの言葉に腹を立てていた。

「人間とじゃつき合ってられないわ。…ハア、妬しい…」

と、パルパルとつぶやく彼女の近くから足音が聞こえてきた。

誰なのかと気づくパルスィは、端の向こうにある陰に顔を向けると、黒いジャケットとジーンズに、態度の悪そうな青年が彼女に近づいてくるのであった。

「随分と良い欲望を持つてるじゃないか」

青年は不敵な笑顔で言う。

「だ、誰よ…?」

「俺か?俺はだな…」

青年が応えようとしたその時、背後にぼんやりと悪魔の姿が浮き上がり、自分の名乗り出た。

「800年前に封印されていた怪物、グリードだ。お前の欲望を解放してやる」

チャリン、と旧都の空に聞こえた気がした…。

## 第15話「トゲトゲハートの旋律」(後書き)

あけまして申し訳ございませんでした。作者です。

ものすごく放置していたので大変だと思い、ようやく作り上げたのがこれです。

今回はパルスィにメインがある話でしたが、同情したりもする星司に何故か2828する人もいるんじゃないんでしょうか？

そしてついに！親玉らしきグリードを終盤に入れました！

果たしてこのグリードは誰なのかを大いに期待してくればいいです。

また、サブタイトルについてですけど、これは皆さんもわかるとおりに「ギザギザハートの子守歌」を変えてトゲトゲハート(ケロロ軍曹の絵描き歌タママverにあった歌詞)とマイナスな歌とかけて旋律にしたことになりました。

さて、次回からは霊夢も動ける様子もありそうなので、合流の期待に頑張らなくてはなりません。

皆さん、今年もよろしくです

## 第16話「超絶なる闇 悪魔のグリード、アール」

幻想郷のどこかの洞窟。

ここは800年前にグリードが封印された場所で、その地にはこの場で復活したグリード達が集まっている。

そこへ、以前に英次との戦いでコアメダルを奪われてしまったグリード、ウヴァが帰還したことに一同が目を見張らう。

「ウヴァ、鎧が無い…」

まず最初に言ったのはサイの姿をしたグリードのガメル。

「おい、もうオーズにメダルを取られやがったのか!!」

情けないと言わんばかりに怒鳴り出すのは、カブトムシの姿をしたグリードのカイ。

「うるせえ!それにオーズじゃなく、赤い蝙蝠の野郎に取られたんだ!!」

「! それはまさか、キバか…?」

ウヴァの話に心当たりを持つのは、カメレオンの姿をしたグリードのステル。

「おおっ!とうとうキバがこの世界に来たんだべか!」

「フンッ、腕が鳴るぜ。相手にとって不足は無いからな…」

「……………」

気合を入れるのは、パンダの姿をしたグリードのケンゲと、蟹の姿

をしたグリードのザミ、

そして無口のままでウヴァを見つめるピューマの姿をしたグリードのヴェイン。

「…ところで、アール達はどうしたんだ？」

「アールとガザリは別行動で出かけている」

「メズールはリートと同行でメダルの調達だべ」

残りのグリードの行方をステル、ケンゲが話した直後だった。

ウヴァがやってきた通路から大量のピラニアが現れ、そこからシャチの姿をしたグリードと、若い青年がやってくる。

「お待たせ、メダルが大量に手に入ったわよ」

「メダル、いっぱいある…」

ガメルの機嫌が良くなり、ピラニアは1匹ずつメダルの塊へと変わっていく。

「それじゃあ、俺達もいただくとするか…」

「あいつ等の分も残しておけ。グリードにもメダルは不可欠だ」

そっけんのは青年、リートだった。リートはメダルを掴んで右腕に強く抑えると手の中へと吸い込まれていき、握り拳をしながら見つけた。

（俺は実体のないグリード…。そのために、俺を道連れにしようとしたこの男の体を借りてはいいものの、ここ800年で大きく変わってしまったか…）

リートは恨みがある。すべては彼らを封印した妖怪と、あの男に…。





ことはそちらと同じってことだし！」

「何処がよ。どう見ても邪魔しに来たようだけじゃないの？」

「そんな事だったら俺がいい話を提供することはしませんよ」

「いい話ですって？」

「ええ、まずは勇儀に説明しなきゃいけないけど…居間で話すとしようか」

一旦居間へ移動して話しやすいようにと、星司は勇儀達を入らせる。

「じゃあ改めて紹介しておくよ。この人はこの屋敷の主の輝夜さんで、月に住んでたお姫様なんだ。何より、この人はパルスイと同じカードデッキの所有者なんですよ」

星司が輝夜の説明をした直後に3人はえつと驚く。

「この人がカードデッキの所有者だって？」

「パルスイ以外にもいたなんて…」

「何？どういう意味なの？」

どうも意味が分からない輝夜だが、星司が彼女以外にデッキを持つ者を簡単に説明したことで納得した顔になる。

「なるほどね、これを鏡に向けると変身できるってこと…」

輝夜は自分の持つカードデッキをじっと見つめていた。これを最初には知らなかったのに、今知った時に何か不安が出てくる。何故なら勇儀が言っていた謎の男のことだ。

「私はあの時に騙されてるんじゃないかって思ったんだ。鬼の直感って奴だけど、普通人間が地霊殿に入れるのは無理があるのが通だ。

だがあいつは何とも無いように私達のもとに来たってことは、あいつはただの人間じゃない。それに、妖怪とは思えない気迫もしていた」

「じゃあ、星司の言うワームかしら？人間に擬態できるって話だけど…」

ワームは現実世界に住む怪物。妖怪以上の能力を持つ奴らにそんな気はあるのだろうか…星司は何か違うと輝夜に申し出た。

「実は、昨日の夜にワームじゃない化け物を見たんですよ。妖怪鬼が襲われそうになって助けたんですけど…人以上の力を得てはいけないって俺に忠告を言っていました」

「忠告？どうしてなの？」

「奴は自分自身を神と名乗ってたからですよ。俺は最初は信じられませんでした。俺が思うには俺達は神々に逆らうことをしているんじゃないかってそんな風にも思ったりするんです」

「神々ねえ…」

勇儀は腕を組みながら考え込んでいると、ルーミアが慌てた顔で居間にやってくる。

「星司ー！大変なのだー！剣崎が変な化け物に襲われてるのだー！」

「なんだって！？」

星司は聞き捨てならず表へ出ようとした。

「輝夜さん達はここで待っていてください！」

そう言い残して表に出たところ、ブレイドに変身している剣崎が見えていた。すぐにも加勢しようとかタクゼクターを呼び出すが…

「星司君、来ちゃダメだ！！こいつはお前を狙っている！！！」

剣崎が言った言葉に星司の手が止まった。  
相手は木製人形の姿をした怪人であるようだが、その怪人から声が出てくる。

「…妬ましい…妬ましいわ…」

「その声…まさかパルスィ!？」

なんとその声はパルスィそのものだっただ。

「貴方なんて…死んじゃえばいいのよ…死ねばいいのよ…!」

パルスィは剣崎をのかし、手に持っている鋸で星司に襲い掛かってくる。星司はパルスィの動きを読んでかわし、ガタツクゼクターをベルトにセットして変身。パルスィの鋸攻撃を微動だにせず、パンチひとつでパルスィを4メートルほど吹っ飛ばした。  
パルスィの体からはチャリンとセルメダルがこぼれ出す。

(? 体から何か出た…?)

星司は体からこぼれ出たセルメダルに気を取られている隙に、パルスィは右腕を伸ばして星司をからみつけた。

「なっ…!？」

意表を突かれた攻撃に星司は身動きが取れなくなると同時に、体中からエネルギーがパルスィの腕を伝って吸い取られていく。  
見たところは腕の伸縮だけでなく、吸収能力もあるようだ。このままだと星司の体力が失われてしまうと、剣崎はすぐ助けにブレイラウザーにカテゴリー2のラウズカードをホルダーから引き抜いて読

み通した。

S L A S H

ブレイラウザーがカードを読み込みに合わせて光り輝き、切れ味の増した刀身で星司の絡みついた木をの枝を切り飛ばす。

「くっ…助かります、剣崎さん…」

「だけど、彼女がどうしてあんな姿に…？」

「分からない…けど今の彼女はワームでもアンデットでもない、何か別の怪物に取りつかれてるんだと思う…」

「そのとおりだ」

真上から2人の前に青年が現れる。パルスィと出会ったあのグリードだ。

「誰なんだお前は!？」

剣崎は警戒をした。この者が原因だといち早く察知したからだ。

「俺はアール。800年前にこの世界で封印されていたメダルの怪物、グリードだ」

「グリード?封印されていた怪物？」

「そうだ。俺達グリードは欲望を食す怪物だ。俺は彼女の欲望を開放し、このヤミーを彼女ごと飲み込んで動かしているのさ。今の彼女は、お前を殺したいとの欲望でいっぱいだ」

アールがヤミー（パルスィ）の説明をした時、星司にショックと怒りの2人が同時に現れる。

「どうして欲望なんかを…」

「この世は全て欲望でできているからだ。建物も、自然も、人間自身も全て、人間の欲望から生まれている」

「そんな…そんなまさか!」

「嘘ではない。その力も、お前達人間の欲望の塊。手に入れたいの欲望でできたものさ」

余興を終えたアールは悪魔の姿をしたグリードへと変身。立つだけで精一杯な威圧感が流れ出る。

「お前達もろとも、俺達に飲み込まれて消えてもらおうか!」

「っ…!!」

襲つてくると星司はすぐさまキャストオフをする。

「キャストオフ!!」

CAST OFF

CHANGE STAG-BEETLE

ライダーフォームになったガタツクに続いて、剣崎は左腕に装備されているアイテム、ラウズアブソーバーを起動。JとQのカードを引き抜き、Qのカードをインサートリーダーへ差し込んだ。

ABSORB QUEEN

次にJのカードを端のスラッシュリーダーへ通す。

FUSION JACK

ブレイドの背中に黄金の翼『オリハルコンウイング』が生え、鎧には金色の鷲の紋章をした『ハイグレイトシンボル』が刻まれた。

仮面ライダーブレイド・ジャックフォーム。

イーグルアンデットの力を融合させた強化形態であるのだ。

「剣崎さん、速攻で行きましょう！」

「ああ！」

星司はスラップスイッチを押してクロックアップ。剣崎はオリハルコンウイングを広げて滑空し、アールとヤミーに突撃する。

このままつば競り合いになるかと思われたのだが、激突する直前に2人はアールを受け流しながら通過した。

何故そうしたのか、じつは2人の目の前にヤミーが立ちふさがったので、このままだと彼女を致命的なダメージを与えてしまうのとで攻撃をキャンセルしたのだ。

「どうしたお前等、攻撃しないのか？」

「五月蠅い！人質を盾に使うような手段を柄やがって…！」

「だったら俺がパルスィをやりませう！ 剣崎さんはあの怪物を！」

星司はクロックアップを再び行つてヤミーに接近、そのまま彼女を掴んで移動を始めた。

「グッ…！？」

「パルスィ、君の戦いに相応しい場所に移動するよ！そこで決着だ！」

人気のない場所へ来た星司はヤミーを振り払い、腹へパンチを2、

3 発当てては素早くダブルカリバーを手に取って斬撃を当てる。すると切り裂かれた腹からメダルが再びこぼれ出て、星司はまた立ち止まった。

（そういえばメダルの怪物って彼女を取り込んでるんだっけ…。  
もしかしたら、彼女を引き出せば力が弱まるはず…！）

欲望を取り込んでるのなら、動力を抜き取ってしまえば大幅に下がるだろうと考えた星司は試みてとりかかりだした。  
ダブルカリバーを構えながら走りだす星司にヤミーは反撃すべく両手を伸ばして襲い掛かるが、星司のクロックアップでそれを回避して一気にゼロ距離へ、そして勢いよく腹へ振るった。

「ハアッ…！」

斬撃が決まって腹に切り口ができる。

今だ！とダブルカリバーを捨てて右手を突っ込ませ、彼女を探り出した。

（どこだ…どこにいる…！）

それらしいものが掴む様子がなく、必死で手繰り寄せていたところで剣崎が飛んできた。そのあとにアールもやってくる。

マズい、今このままでいたらやられてしまう。かといってこのチャンス以外に何処にもないだろう…。

「フンッ。目障りな奴から止めを刺すつもりだが…まずはアイツからやったほうがよさそうだな…！！」

アールは左手から雷を放射。2人に電撃を浴びさせる。

「うああっ！！ お前…この怪物もまさか…消す気で…！！？」

「当然だ！！このまま中にいる彼女も同時に殺してやるさ！！人間を取り込んだ状態でヤミーが消滅すれば、中にいる奴も同時に消滅する…。もともと欲望を解放した後に殺すのが、俺達グリードの仕事さ！！欲望を持った人間ってのは本当に馬鹿な奴だぜ！！ハッハッハアツ！！」

「そんなこと…俺が止めてやる！！」

剣崎はホルダーをオープンしてラウズカードを取り出し、カードをラウズした。

S L A S H      T H U N D E R

L I G H T N I N G      S L A S H

翼を広げ、雷の剣を手に取りアールへ突進した。

「ウエエエイ！！！！」

アールへ切りかかろうとしたその直後、目の前をバリアに遮られてしまう。

「何っ！？」

「無駄だ。吹き飛びなっ！！」

バリアは剣崎を押し返して吹き飛ばし、通常のブレイドへと戻ってしまった。

「ぐっ、なんて力だ…！！」

「俺はどのような攻撃も通用しねえよ。けどどうしても倒したけり



や、オーズを呼んでくることだな。ま、それは無理だろうけど…」

アールは星司達に向いて雷の威力を上げる。

「オラオラ！とつとと死ねやあつ！！」

「ぐっ…ああああつ！！」

ガタツクの装甲に火花が散り始める。このまましていると炸裂してしまつとの危険を感じた剣崎は、星司に離れろと声をかける。

「離れるんだ星司君！それ以上は…！」

「そんなことはできない！！俺が手放したら、彼女は助からない！！」

星司は剣崎の命令を無視する。

「俺は絶対に助ける！俺は天道さんに言われたんだ！『女と付き合い合えるいい男』になれと…！！俺は…俺は彼女を…！！」

「嫉妬よくぼうに落ちた彼女を助ける…！！！」

自分の命を賭けてまでも彼女を守ろうとする星司は強い気持ちを全開にまで上げて叫ぶ。

だがこれ以上はガタツクゼクターの限界を超えて炸裂する恐れがあるが、それが思うまでもなく起きてしまった。限界を超えてしまったガタツクゼクターは火花を散らしてベルトから外れてしまい、星司は吹き飛ばされながら変身が解除される。

「うああっ!!」

飛ばされて地面に叩きつけられる星司。その直後…

「グッ…アアアアアッ!!!!」

ドオオオオオンッ!!!!

ヤミーは爆発し、体を保つセルメダルが当たりに散らばった。取り込まれていたパルスィは影も形も無いままで散っている。

「…そんな…そんな…! うあああああああああああああ

「！！！！！！」

背に力を入れて起き上がる星司だが、ヤミーの消滅と同時に叫んだ。  
今度はさっきよりも大きい声でだ。

「どうして馬鹿なことをしたんだ！！大切な友たちを俺は、俺は見殺しにしまった！！俺は大事なものを失ってしまったんだ！！！！！！」

後悔する。星司は阿鼻叫喚に陥られ、泣き叫ぶ彼をアールはじつと見ながら笑う。

「何が助けるだ！何がいい男だ！所詮人間って奴は欲望ありや生きていけると思ってたか？んなのはご法度だ！人間は全員死だ！この世に生きる価値なんて全く無しだったの！ギャハハハアツ！！」  
「……貴様アツ！！！！」

剣崎は怒りを沸騰させてラウズアブソーバーを起動。今度はKのカードを引き抜いてラウズした。

## EVOLUTION KING

認識完了の音声が鳴るとブレイバックルから13枚のカードが出現し、ブレイドの周りを覆いながら黄金の鎧が装備され、巨大な剣『キングラウザー』を掴みとる。

カテゴリーK『コーカサスアンデット』の力から13体とのアンデットと融合した最強形態、キングフォームである。

剣崎は右手に現れた5枚のカードをキングラウザーへ投入する。

SPADE・TEN・JACK・QUEEN・KING・ACE

LOYAL STRAIGHT FLASH

「お前だけは、絶対に許さない……!!」

「無駄な悪あがきを……」

アールはそれでも余裕でいるが、剣崎の前には5枚の立体化したカードのオーラが出現し、必殺技のロイヤルストレートフラッシュが放たれようとしている。

この技はかつての戦いで強力な威力を誇り、封印不可能だったトライアルシリーズをちりにするほどの力ならアールを倒せるはず……。剣崎は怒りを合わせた渾身の一撃をキングラウザーに託して振り下ろした。

「ウエエエエエエエ」

「イッ……!!」

振り下ろした瞬間に巨大な光線が発射され、アールへと一直線に行くがその直前にまたバリアが張られる。

少しは押しているようなところで爆発が発生し、剣崎は様子を伺うのだが……。

「!?!? そんな……!?!?」

煙が晴れて見えたのは無傷のアールだった。あの技を受けてもダメージを受けないなんてありえない。剣崎は言葉を失った。

「だから俺には通用しないって言ってるだろ? しつこいようだし、そろそろ消えてよ」

アールは右手から黒い球を生み出し、巨大な球へと膨らみます。いくら不死身な体をしている剣崎にとって、こんなのを食らうことになれば消滅するのも過言じゃないほどの大きさだ。

「死ねっ…!!」

アールは剣崎へ球を投げつけた。剣崎へ迫ってくる球が圧感でさらに巨大化した球に見えている剣崎は避けれる様子なく、このまま受けて消えてしまう末路を辿るのかと思っていた次の瞬間である。

MAXIMUM HYPER TYPHOON

剣崎の前に赤いカブトムシが現れ、赤く輝く剣で一閃すると弾がカブトムシの前でまばゆい光を放ちながら消滅してしまった。

「何！？ お前は…！」

球を消されてしまったことにアールは赤いカブトムシを見ては動揺する。

「天道…さん…？」

星司は掠れている視界をこじらせてもう一度見てみると、覚えのある顔が見えていた。

そう、彼を育ててくれた男、天道総司こと仮面ライダーカブトだ。

「久しぶりだな、星司…」

## 第16話「超絶なる闇 悪魔のグリード、アール」（後書き）

皆さんお久しぶり。コメントをつけ忘れて書き直した作者です。長くしているから何してるんだと思いますが、新ライダーのバースのやタジャドルオーズの詳しいデータを手に入れるのに手こずっていたので時間がかかりました；

ガンバライドのタジャドルオーズが半端ない強さだと聞いていて昨日からチャレンジを始めてるんですが、やはりレアは出ませんねえ……。あと、バースの能力もすごすぎる、まさかの二段必殺ですよ！？そんなの酷過ぎじゃないですか！と言いつつほしいと思っている。そんな私は、ブレストキャノン装備のバースも狙ってます（かなりレアだが）。

ガンバライドも進化している中、ついにダディさんもやってきましたようですね。クライマックスヒーローズオーズの影響だろうと思いますけど、必殺技「バーニングデイト」は必見です！

話によれば攻撃を当てる瞬間に伝説のセリフ「サヨゴー！！」を言うみたいです、本当です。

原作を完ぺきに再現しますから、タジャドルオーズに食らわせたらもる原作設定です（笑

さて、ここからは今回登場したグリードのことを説明します。

幻想郷で封印されているグリードはすべてオリジナルグリードで、ウヴァ、ガザリ、ガメル、メズールはネタバレですけどリートによって生み出される設定になっています。

グリードの詳しいことは次のページで確認してください。

ついに天道と出会えた星司もこれから起きることに期待が膨らみますねえ。無論、霊夢も登場させるつもりなのでご期待ください！

## グリード紹介のお知らせ（前書き）

前のページを呼んでくれた皆さんどうも、作者です。  
ここではオリジナルグリードの紹介を行います。  
暇つぶしに見てもらえればなのでどうぞお願いします。

## グリード紹介のお知らせ

### リート

グリードの中のボスで、強い執念と精神の持ち主。何にも分類されないグリードで、無のコアメダルを持っているのだが実体がないため、メダル3枚自体が正体である。

封印するときに男が道連れでスキマ妖怪に封印されるが、封印された空間の中で男性の体に乗っ取り自分の体にしてから今に至っている。

その後に幻想郷中に広がっている欲望で封印が解かれ、現在は800年前に邪魔された仮面ライダーオースの元適合者、河城一樹をねらう。

幻想郷ならではの能力を持ち、「欲望を操る程度の能力」の使いである。

### カイ

昆虫系グリードでカブトムシ、キリギリス、ゴキブリのコアメダルを持つ。

角からの電撃に背中から発される超音波、そして超高速が武器で、戦闘力はかなり高いのが特徴だが気の荒さがデメリット。

失敗したヤミーにはキツイお仕置きをしないと気が済まないタイプなので多少エグい部分がある。

因みに同じグリードであるウヴァとは仲が悪い。



## ステル

爬虫類系グリードでカメレオン、ヤモリ、ワニのコアメダルを持つ。透明や擬態などの変色能力や水中移動が得意で、その他に足の速さもある。

冷静沈着で、戦いでは鋭い直感で相手を予測する頭脳派なタイプ。全身がサメ肌で触れた者にもダメージを与える武器が供えられており、防御しつつのカウンターを狙う。

## ケンゲ

重量系グリードでパンダ、カメ、バイソンのコアメダルを持つ。体術攻撃が得意で、カメの防御とバイソンの突進と、威力はカイよりも強い。

少々のんきな性格で人称では「パンちゃん」、口癖では「〜だへ」と言っている。

かつてはある女性の師匠なのだがグリードだという秘密は知られていないらしい…。

## ザミ

甲殻類系グリードでカニ、サソリ、エビのコアメダルを持つ。

空間切断能力を持ち、次元を切り裂いて内側のモノも切り裂くことができる。

強い者相手に燃えてくるタイプなので熱血な一部があり、一度動けば止まる様子がないのが悩みの種。

甲殻類なので防御もよく、カウンター攻撃も得意としている。

## ウェイン

猫系グリードで、ピューマ、スミロドン、ジャガーのコアメダルを持つ。

素早さではなく力強さで攻め行くグリードで、爪攻撃と衝撃波が武器である。

無口無心で攻撃の予想ができず、言葉も一切しゃべることがないのだがリートはそれを理解しているらしい。

## アール

悪魔系グリードで、デビル、ジャベリン、ゴーストのコアメダルを持つ。

硬い鎧と足音1つすら立てない無音の足が特徴で、リードの右腕に出る実力者。

残忍で人間を屑扱いにする正確だけでなく、自分勝手に余裕ありげな一面もある。

その理由はあらゆる攻撃も通用しないバリアを持っていることなのだが、ライオンメダルによる「ライオネルフラッシュ」が弱点。

## 第17話「獅子の光、そして告げられる全貌」

星司と再会する前のこと、天道は山の中を移動しているところであるモノを発見していた。

見つけたのはエメラルドのように輝く大きな岩で、天道は岩の前に立つ。

「かなり大きい奴か：回収される前に早く壊しておくのがいいだろう」

そう言つてベルトに付けているカブトゼクターのフルスロットルを左から右へ順番に押し始めた。

ONE、TWO、THREE

ゼクターホーンを左へ操作し、天道は身構えた。

「ライダー…キック」

RIDER KICK

ゼクターを右へ操作するとチャージを開始し、右足に來たエネルギーを岩へ痛快なキックを与える。すると岩は粉々に砕かれてしまい、サラサラと光の粉が天道の周りに舞い上がった。

と、その直後に天道の右横から緑色のバツタの姿をしたメカが現れ、目をチカチカと光らせながら天道の元へと近づいてくる。

『天道さん、隕石の数は大半減りましたよ。いったん休憩はどうですか？』

驚くことにバツタから女の子の声が出てきた。  
天道そんなことで微動だにしない様子でメ力を掴みとりながら話しかけた。

「そうだな、もうすぐで昼というのなら是非休ませてもらおう。腹を減っては戦はできぬだ」

『そうですね。あ、ちなみに私の好物の胡瓜とかそんなのじゃなくて、早苗さんの料理ですから気にしないでください。天道さんは料理上手って聞きますけどたまには他の人の料理もいかがですか？』

「フツ、それもいいことか…。お婆ちゃんが言っていた、どんな調味料にも食材にも勝るものがある。それは料理を作る人の愛情だと

…」

輝く粉の上空から照らす太陽へ、天道の人差し指が天へと指す。

俺は正義、神の化身だと主張しているかのようだ…と、そんなことをしているのも束の間だった。

太陽の光から小さめのカブトムシが現れ、天道の元へと落下してきたところを、天道がうまくキャッチする。

カブトムシ…というよりは何かのアイテムみたいな形をしており、丸いオレンジのスイッチの表明にはZECTとの文字が書かれているそのアイテムを、天道はふと感じた。

これはカブトをさらに進化させるZECTの最終兵器『パイパーゼクター』。新たに司空間を移動するシステム『ハイパークロックアップ』や『マキシマムライダーパワー』を引き出す非常に強力なアイテムである。

ハイパーゼクターを手にした天道だが、更に木の陰から誰かが現れた。

黒と黄金の体に赤い目…以前紅魔館を訪れ、レミリア達に予兆を伝えていた青年、アギトである。

「カブト、大変なことが起きているようだ。お前には昔、星司という男を育てていたことを知っているか？」

「ああ。だがその様子だと…」

天道はすぐに理解を把握した。ハイパーゼクターにアギトの言うことと、彼が危険だということを知らせるためにハイパーゼクターが現れたんだろうと思っていた天道は黙っていた。いらなかった。

星司が幻想郷へ来たことは既に話を聞いており、それ以降は彼の様子を見もっていた天道なのだが、ついにその時が来たようである。

「アギト、彼の居場所？」

「迷いの竹林だ。現在は闇のグリードに苦戦している」

「なるほど、それは相手が悪いな…。ならば彼女の力を借りるとしよう、お前は彼女にこれを渡してくれ」

天道は黄色いメダルをアギトに渡した。表面はライオンの模様が書かれており、アギトはそれを見て天道の顔を見た。

「お前が渡すのではないのか？」

「久しぶりに会ってみたいと思っていた。今から向かうつもりだ」

天道はハイパーゼクターを左腰にセットし、ホーンを下へ倒した。

H Y P E R   C A S T   O F F

カブトの装甲がさらに強化され、C H A N G E   H Y P E R   B  
E E T L E   の音声と共に仮面ライダーカブト・ハイパーフォーム  
へと変わる。



口になっている星司の姿が見えていた。

危ないと天道の傍から雀蜂、蜻蛉、蠍の3匹の虫…ではなくゼクターと合体剣『パーフェクトゼクター』が現れ、パーフェクトゼクターを握った直後にゼクター達がパーフェクトゼクターと合体。そのまま柄の箇所にある4つのボタンを赤、黄、青、紫の順番に押していく。

KABUTO・THEBEE・DRAKE・SASSWORD  
POWER

ALL ZECTOR COMBINE

パーフェクトゼクターの刀身が巨大な光の刃へと変わり、天道は剣崎の前へと走り出してはアールの放った球の前にたどり着き、パーフェクトゼクターを振るった。

MAXIMUM HYPER TYPHOON

パーフェクトゼクターは球を両断し、まばゆい光とともに消滅する。

「何！？ お前は…！」

「…天道…さん…？」

星司は今現れた天道を見てそう言い、天道は星司に顔を向けた。

「久しぶりだな、星司…。怪我はないか？」

星司は頷くが悲しんでいた。

「ても…俺は見殺しに…助けようとした女の子を…」  
「そうか…なら、俺がその運命を変えよう」

## H Y P E R   C L O C K   U P

天道は2回目のハイパークロックアップを行う。このシステムは移動だけでなく、一種のタイムマシン機能がついており、これでパルスィが殺される前までの時をさかのぼる。

そしてその瞬間へと戻った天道は、星司が吹き飛ばされた直後に素早くヤミーの腹に手を入れる。

（！　この子か…）

それらしい手を掴んだ天道は勢いよく引つ張ってヤミーから引きずり出した。気を失っている様子だが怪我はなくて無事の様子だった彼女を連れて現在の時間へと戻っていく。その直後にヤミーは爆発を起こした。

現在の時間に戻った天道の両腕には、彼女がお姫様抱っこされながら眠っている姿が星司達の目に映る。

「パルスィが…生き返った…」

「バカな！！時間を変えやがるなんて…！？」

アールは見事に形勢を逆転された天道を見て悔しさを現す。

天道は少し離れた場所にパルスィを寝かせ、アールの方向に体を向かせた。

「未来というのは一つだけではない。俺は既に未来を掴んでいる…。俺という正義だけが、この世の未来を掴めるのだ」

「黙れ！！黙れえっ！！！！そんなのは偽りだああっ！！！！！！！！」



アールは怒り狂い天道へ襲い掛かる。

「天道さん気を付けて！！あの敵はあらゆる攻撃が通用しません！  
」

「分かっている。無論俺の攻撃も通用はしないが、奴の弱点は御見通しだ」

「何だと…！？」

攻撃を続けているアールは、それを避けている天道に言い返した。

「俺に弱点だと？何バカなことを…」

「そう言っただけ揺れているお前はどうか？もはやバレている顔だぞ？」

「うっ…。だが！それは奴が来なければ意味がないことだ！！今更来ようとも…「それはどうかしら？」」

アールの背筋が一瞬にして冷えてしまう。また別の声に後ろを振り向くと、赤い巫女の服を着た少女、博麗霊夢と青年アギトの姿がそこにあった。

「オ、オーズ…！？」

「聞いたわよ。アンタはこれが弱点なんですよ？」

霊夢は黄色いメダルを取り出してアールに見せた。

「ラ、ライオンメダル…！ 待て！そいつは…！！」

「今更命乞い？好き勝手やってよく言えるわねその事。いい？幻想郷でのルールでは、人に害を与えた妖怪は消去される妖怪になると、これが何かわかるわよね？」

「アンタは、私に倒される妖怪なの？」

霊夢は既につけていたオーズドライバーにライオン、カマキリ、バツタのメダルをセットしてオーズキャナーでスキャンした。

「变身！！」

ライオン！カマキリ！バッタ！

3つのメダルが霊夢に力を与え、ライオンの仮面、カマキリの双剣、バッタの脚をした仮面ライダーオーズ・ラキリバコンボへと変身。仮面からライオネルフラッシュがアールを照らした。

「ぎゃ ああああああああああああああああああああああ  
 ー！！！！！！」

アールは光を浴びた瞬間に炸裂し、メダルの大半がこぼれ出てしまった。その中には黒いメダル、コアメダルも飛び出し、霊夢へ飛んできたところを彼女はキャッチする。

「ガハッ……！俺の、コアメダルが……！」

アールはコアメダルを失ったせいで胸の鎧が消えてしまい、アールの力が一気に減ってしまった。

「さて、どう料理してあげようかしら。焼き加減はレア？ミディアム？それとも…炭焼きまでかしら！？」

もはや殺意全開である霊夢はカマキリソードを展開し、アールへバツバツサと切り裂いていく。

「ぐあああ！！ま、待て！分かつ、がはあっ！？」

アールに言うことなしなままに霊夢は切って切って切りまくる。

「ちょっと待てー！！少しくらい喋らせろって、ぐへっ！？ 卑怯すぎるだろ！？」

「卑怯もラツキヨウもお金も大好物よ！！ほら食らいなさい！！さあ！！さあ！！？」

この時だが、霊夢の目に『¥』の記号が浮かび上がっているのは言うまでもない。

「もつとよもつと！！もつと私にメダルをよこしなさい！！メダルは全部私のモノよ！！？」

スキャニングチャージ！！

オースキャナーでコアチャージアタックを発動し、バツタレッグに貯められたジャンプ力で勢いよく上へジャンプし、切れ味を増したカマキリソードでアールへ急降下していく。

「私のメダルウウウウウ」

っ！！！！！！！！！！

「お、おのれえええええ」

っ！！！！！！！！！！

フラッシュで無防備になっているアールはカマキリソードによって切り裂かされそうになったその直後、その攻撃がアールの前で阻止されてしまった。

赤く燃えた大剣を持つその者をアールは声を出す。

「リート…お前…!」

そう、霊夢を阻止したのはグリードのボスのリートだ。リートは大剣を振るいながら霊夢のコアチャージアタックを弾き返し、受け身をとって霊夢は距離を空けながらソードを構える。

「またグリードかしら?今日は凄くついているみたいだけど…」

霊夢の話に何事も動じないリート、ただ彼は彼女をじっと見て言った。

「アール、退くぞ。ここにはもう用はない…」

「お…おっ…」

リートは剣を右手で持ちながら空いた左手でカードを取り出す。その時に霊夢が驚いた。まさかとは思いつながらのことであつたが、あれは…

「スペルカード…!?!」

スペルカードは今使えないはず…と言っているのも束の間だった。リートはカードに強い気を流し込んでカード使用の宣言をした。

「『そして誰もいなくなるか?』」

訳の分からないような宣言をした瞬間、リートとアールが姿を消えてしまい、今まで覆い尽くしていた止みも煙のように消えてしまう。辺りは静かで光がさす竹林へと戻った。

「…帰って行ったということか…」

「ええ、なんとか悪い気は去って行ったようです…」

パーフェクトゼクター達はそれぞれ分離して空へ飛び去って行き、天道は変身したままの状態で星司に近づく。

「けど天道さん、どうしてここが分かったんですか？それに、どうしてこの世界に…」

「話したいところだが、俺はこれから飯を食べに帰らなきゃならない。そこにいるアギトから話を聞いてくれ」

天道はその場から立ち去ろうとしたが、最後にもう一度星司の顔を見る。

「久しぶりに会えてよかったぞ、星司」

そう言い残した後にクロックアップで姿を消した。

星司は去って行った彼を見届け、心からお礼をする。

（天道さん…ありがとうございます…）

久しぶりに彼の顔を見れた星司は嬉しく思う。会えないだろうとは思っていた彼に再会した、そしてこれからも会うことはできると信じてその場から背を向けた。

（今は間違いなくスペルカード……。けど幻想郷中では使えないはずだし、あのカードってたしか……）

霊夢は辻褄の合わない顔で考えている。何度も言うがスペルカードは今この世界では使えない。だがリートはそれが使用できたのである。

どうもおかしいと思っていた彼女だが、そんなのはすぐあきらめ状態へとなってしまう。何故なら足元などに散らばったセルメダルに目を取られたからである。

すぐに変身を解いてかき集めようとしたその時、目の前でブレイドから変身を解いた剣崎の姿が目映った。

「ちょっとそのアンタ！メダルを拾うのを手伝いなさい！」

「ウエツ！？」

要求を申し出され、剣崎は「俺ですか？」と自分に指を差す。か、そんなことをしている場合ではないと霊夢がどす黒い（？）眼差しで剣崎を睨んでいる。

「アンタが一番暇そうにしてたから選んだのよ。だけどメダルは全部私のだからネコババしちゃダメよ？それと、アギトもそのアンタも同じよ！」

「……仕方ないか」

「俺は構いませんよ」

変身を解いたアギトと星司もいつの間にか手伝わされる羽目になるが、星司は素直にメダルを拾い始めた。

散らばったメダルは離れたところにもあつて見つけるのは大変だったが、10分程度でメダルの塊が出来上がり、霊夢はメダルの枚数を確認する。

「70…80…90…100枚はあるわね。これくらいあれば…」

目を光らせ、リッチな生活を妄想する霊夢に星司が話しかけてきた。

「ところでですけど、貴方は誰なんですか？それにコレを集めて何の意味が…」

「彼女は結界を守る巫女だ。このメダルは…そうだな…」

「このメダルが高く売れるって天道から聞いたのよ」

アギトは簡潔に説明しようとしたのだが、メダルのことだけは霊夢が話すことになった。

「天道さんですか？」

「結果的に言えば、私はグリードを封印してもらったことを天道から頼まれているわけよ。メダルでできた怪人をね」

「メダル…グリード…たしかあの時も！」

星司はアールから聞いたことを思い出す。

「グリードを封印した報酬ということでメダルを集めてるわけよ」

「けど、こんな大量なメダルをどう運ぶんですか？これだけでも引きずるのは…」

「そこであれの出番よ！」

霊夢は秘策があるようにして西側に指をさした。そこにあるのは人間がぞくつとするほどの赤い鳥の大群で、勢いよくメダルへ突っ込んできた。

その場を離れる4人に鳥はメダルを1枚掴んではどこかへ飛び去り、メダルの塊は一瞬で無くなってしまふ。





永遠亭へ戻ってきた星司達。まずはパルスイを安静させるために救護室へ運ばれ、星司と剣崎は手当てをもらった後にアギトを連れて居間へとやってきた。

「まさかパルスイが怪物に襲われてなんてな…」

「けど、もう嫉妬することは無いと思いますよ。彼女のストレスは全て吐き出されたのと同じですから」

今までの出来事を話した星司に勇儀達は想像もしないことを感じとった。

「大変だったと思うけど、それ以上無茶しちゃダメよ星司君。昨日から怪我をしてたんでしょ？」

「すみません。貴方のおっしゃる通りですよ、八意さん」

これまで一回の戦いでけがをし続けていた星司。来る前にはZECTで強化訓練、来てからはワームとの戦闘、更にもう一回の戦闘、そしてパルスイとの戦闘と疲れるばかりのことに永琳から注意を受ける。

「それで…アギト、貴方の言うその話は本当なの？」

今度は輝夜がアギトの話に問いかける。

「ええ。まず皆さんは、1ヶ月ほど前に何か奇怪なことは起きませんでしたか？」

「その日って確か…ウドンゲ、その辺りに新聞があったわよね？」

「これですか？」



アギトが説明したこの話に、永琳は新聞と見比べてみる。

「その話が本当なら、この新聞のことも…！」

「ええ。そして、この隕石が原因でワームが住みつくことになり、増殖、そして人間に襲い掛かるような状態にまで成長してしまった。最低でもこれだけでよかったんだが…」

「だが…なんですか？」

息を呑みながらアギトの話を聞き続けると、次に出てきた話に誰もが声を失ってしまった。

「この世界の敵となっているのはワームだけではない。それも、その者達はこの世界を覆う博麗大結界を破り、世界を滅ぼそうとしている」

世界が滅ぶ。いきなり何を言うだと思いが、これがどれだけリアルな事なのか…。

剣崎は特に危険な存在なので、自分が世界を滅ぼすようなことをしたら想像しただけで恐ろしい。

「奴らは本気だ。ワームを新しく加えて滅ぼそうとしている」

「じゃあ何者なんです？まさかグリードにも繋がりが…」

「無論グリードにもかかわりがある。気になる奴らとは、巨大組織『スーパージョッカー』。全世界の人間を滅ぼそうと企んでいる者達。奴らはこの世界の力とされるスペルカードに目をつけ、力を奪い取っていたようだ」

「！　ちよつと待って！スペルカードが使えないって…！」

鈴仙は椅子から立ち上がりながら叫んだ。

「どうしてそんなことを!?」

「狙いは特に強い力を持つ者、つまりスペルカードの所有者だ。一筋もいかない相手を手も足も出ないようにするため、相手側がそちらのことを調べていたらしい。しかし気になったのは、あのリートという男だ」

「俺も思いました。妙なカードを取り出してましたけど…」

星司はあの時にカードを見ており、違和感を言葉で表見しながら説明する。

「もし奴らが使用不可能にしたのではなく、力を吸い取ったのならどうだ?それなら、リートが使用できるのもあり得る」

「じゃあ、あの男が原因で…!」

「畜生! 私達のスペルカードを勝手に奪いやがって…!」

勇儀はムカツ腹を立てながら机を強く叩いた。因みに意味もないことなのだが、もともと彼女は力持ちなので机は壊れるのが普通だけど一応は手加減しているのであしからず。

「これじゃあアイツとやりあえないじゃないのよ…。ムカつく人ね!」

輝夜もご立腹だ。

「つまり天道さんは、彼らの気配に気づいてこの世界に…そして、今現在はその調査をと…」

「流石天道の育て子だ。まさにその通りだよ」

これから相手するのはワームではない。巨大な悪の陰謀である。

そんな敵に星司、そして新しく仲間を加えたパルスィと輝夜、アギト、剣崎、天道で行けるのだろうか…？  
不安が過る星司だが、剣崎が星司の顔に向く。

「星司君、俺は君について行くよ」

「剣崎さん？」

「俺は運命と戦い、大切な人々を守ってきた。今度は、この世界を守る！君達と共にだ！」

剣崎はジョーカーだろうと、強い正義で運命と向き合う覚悟を決めていた。

「私もやるわ。だって邪魔されたくないから…」

輝夜も賛同する。

「…ありがとうございます。これからよろしくお願いします！」

天野川 星司。彼はこの世界を守るために巨大なる敵と戦つことをここに決意した。

## 第17話「獅子の光、そして告げられる全貌」(後書き)

ダ〜ジャ〜ドル〜

どうも、作者です。ついにオーズにタジャドルコンボが来ました！能力も凄まじいですよ！背中から羽を飛ばし…ってこれ、仮面ライダー剣にあったピーコックアングットの羽飛ばし攻撃やないかい！！あまりにも同じ攻撃だったから一瞬思い出してしまった。

因みに「MOVE大戦CORE」でタジャドルの曲を期待してましたが、この曲すごくいいです。すぐに気に入りました。

一応は暫定で最強形態みたいですけど、果たしてこれを超えるメダルは登場するのでしょうか？

あと、今回のタジャドルオーズ専用武器「タジャスピナー」にも期待が膨らみます。ガンバライドでは早速使ってるようですが、これは飛び道具のようですよ。

オーズキャナーを通すと内蔵された7枚のコアメダルが高速回転してスキャンされ、「ギガスキャン！！」との音声とともに必殺技が使えるようです。

スキヤニングチャージでは飛んで蹴りをする一般的な技なんですけど、ウィキペディアでは必殺技名まで細かく書いているとはすごい…のはいいけどラトラーターオーズとスカルクリスタルの必殺技可笑しいでしょ、かつこいいに正式名称不明って…(ガンバライドではオーズは「ライオディアス」、スカルクリスタルは何故か「必殺キック」に…)。

なにがともあれ、タジャドルオーズは本作でも出てきます！気になるメダルはいつ出るかは楽しみにということで！

ここで星司編は終了し、次回は新キャラクターへ移ります！誰なの

かもお楽しみね

## 第18話「悲しみの龍騎士」

ミラーワールド。

それは現実の鏡の裏側にある不思議な世界。

この世界ではかつて、鏡の騎士『仮面ライダー』達による争いが行われていた。

人は欲望のため、

人は人生のため、

人は何かを守るため、

13人の仮面ライダー達による争いは苛烈になる中、1人だけは悲しみを顔に嘆いていた。

弱者なる者に待つのは…死だからである。

1人の騎士である青年、織原おりはら 満みつるは血を争うことか嫌いだ。

本当は騎士になることを望んでいなかった。

だが悪魔による運命で争いに満は巻き込まれ、自ら生きるために動いた。

しかしその運命はかなわず、周りの騎士は皆命を絶ち、この悲しき戦いは満の勝利により幕を閉じたのである。



何処かの川がある通路で1人の少女が座り込んでいる。

だがその少女は何か悲しそうな顔でいる。まるでフラれたかのような悲しさにこちらも気になるところであるが、そんな彼女に闇の中から青年が息を切らしながら現れる……と思っているようだが、その青年は満だった。

おそらくこの少女は満の彼女か誰かなのだらうと、満は膝に手を置きながら一息吸って落ち着つかせる。

「由利ちゃん……！」

満は少女、由利に声をかけた。

「……織原君……どうして、ここが分かったの……？」

由利は満の顔に目を向けるが、どうも深い悲しさで顔を少ししか向いてくれない。

彼女の問いに満は近づきながら答える。

「君のお父さんから聞いた話でもしかしたらって思ってたね。ここは君の両親が婚約した場所なんでしょ？」

由利の両親が婚約してからすぐ結婚し、娘の由利が生まれた時に母親を亡くしたことから2人だけの生活を続けていたのだが、今日に限ってその父親が病で亡くなってしまったのだ。

そんな父親が亡くなる前日に満にこの思い出の場所を密かに教えていたらしく、そのおかげで彼女を見つけることができたというわけなのだ。

「…君だったらこう言うかもしれない。『いつか結婚した時には、お父さんも見に行く』って…。それで君は、この思い出の場所で告白すると…」

「…でも、お父さんがいなくなつて、私1人じゃ…1人じゃ彼氏なんて作る勇気なんか…！」

「それは違う！」

涙ぐむ由利を満は言い、彼女の顔の高さまで合わせる。

「もういるよ、君の彼氏は…」

「え…？」

その時に彼女が顔を見上げると、そこには満の優しい微笑みが映っている。

「由利ちゃん…僕は君が好きだ…。お父さんからの話のついでに『彼女を守るのは君だけだ。思い出の場所で幸せになつてくれ』って言われたんだよ。だから僕は、君と幸せになりたい…」

「…織原君…」

涙を拭い頬を撫でられる由利は目を閉じ、満も目を閉じながらそつと彼女の唇に近づけていく…。

「はいカット！お疲れ様です！」

と思いきや周りがライトによって明るくなり、メガホンを持った男性が現れる。

どうやら撮影をしていたらしく、撮影終了にて落ち着いた2人は監督である男性から封筒が差し出された。

「いやゝ2人共いい芝居だったよ。これが映画化されるまで楽しみで仕方ないくらいな仕上がりになってきてるみたいだから期待しているようにね。これは今回のアルバイト料だ」

「ありがとうございます。それじゃあ僕はこれで……」

満はアルバイト料が入った封筒を受け取るとすぐさま自宅へ帰っていった。

家は妹の出雲と2人で暮らしており、前まで大学を通っていたのだがワケあることで中退し、こうしたアルバイト作業を毎回やっているのが日課である。

家へ戻った満がドアを開けてリビングに來ると、出雲ができたばかりの料理を食卓に置いていたところだった。

「あ、お兄ちゃんおかえり！」

「ただいま、出雲」

出雲が兄の満のお帰りに気づいて椅子に座り、満は台所の水道で手を洗った後にもう一脚の椅子に座った。

「いただきます」と2人が食事をいただき始め、満は今回作られた料理を出雲に感想を伝える。

「へえゝ、味を変えたんだね」

「味を変えるとまた違った味になれるって本で書いてあったの。今回は私の力作よ」

出雲は自信満々な顔で自慢する。前まで1人で生活させていたことに心配していた満だが、彼女は寂しいと言うよりも旅立つことが好



||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||

2時間ほどの勉強が終わり、出雲は先に風呂に入った寝ようとしていたところだった。

「ねえ、お兄ちゃん」

出雲が満に話しかけてきた。

「何だい？」

「……お兄ちゃんは今私がいなくても、寂しくなんかないって思ってる……？」

何やら結婚にかかわる話のようだ。

「その話か……。僕にとっては寂しくはないさ、出雲の行きたいところがあるのならそこへ行けばいいんだよ」

「…それ、嘘ついちゃってたりして？」

問題ないと主張していた満だが、この一言に「えっ!？」と顔を振り返りながら反応した。

「冗談」

「な、なんだ……びっくりにしたよ……」

「フッフ、お兄ちゃんってすぐ驚くからいいんだよね。（本当はそ



に目撃も発見もされてはいない。かといって犯行現場からは何も証拠が見つからない完全犯罪とされているようで捜査も難攻しているとか、そんな恐ろしい事件に誰もが謎めていている。

満はそんなことを考えながらジューズを購入して飲み干してくずカゴへ捨てようとしたその時だった。

「ん？なんだろうこれ…」

そのくずカゴの中にはリュウガのカードデッキが入っていた。それを気づいていない満は拾い上げて全体を見してみる。

「アドベントカード…？ 何かのカードゲームかな？」

ケースの中身を見てみると漆黒の龍の姿をしたカードや、同じ紋章をしたカードとさまざまで、左下側には攻撃力となるアタックポイントの数字が書かれている。

しかしどういったカードなのかを知らない限りにルールもわからないし、そもそもこれだけでデッキとは言えない。本来は40枚に束ねたのをデッキというのだが、このカードデッキにあるカードは5枚しかないのだ。

因みに入っていたカードは先程のカードを含め、剣、盾、龍の顔をした武器の3枚を合わせた5枚である。

しかしもつとも疑問に思っているのはこれがなぜ捨てられているのかだ。子供が楽しんでるゲームなら捨てるはずはないのに何故…。興味深いところもしばしばあった満はこのカードデッキを拾うことにした。

「遊んでみると何か面白いかも。まあルール次第だが…」

とりあえず帰ることにしようと公園から離れて町並みの中を歩き続



けた。

右端から宣伝のテレビが映っていたり、ブランドの展示品が飾られていたりと通行人に気を引かせるものばかりだが満には気にせずと家へ向かっていた。

妹に遅れるようなことはしないつもりでいるのでとにかく変えること第一でいる。

その後はこのカードデッキをもう一度見て何なのかを調べてみよう…と、満の今後の予定が頭で弾きだされていた途中にある異変が起きたのであった。

キーン…

「…ん？今の音は…？」

歩いていた満に金属の音が響き、立ち止まった。

周りの人にはソレを聞こえていないのか、そのまま歩き続けている。

（今日の占いってあまり良くなかったんだっけ…。多分そうかも…）

気のせいだろうと再び歩き出したその時だ。満の横にあるガラスに何か大きな影が横切り、そのまま別のガラスへと歩いていくのが彼の目に飛び移る。

（！？　なんだアレは…！？）

錯覚なのだろうかと目をこじらせてもう一度見てみるが、影の姿は

まだ映ったままだ。しかもその影がガラスの前で背もたれしていた男性の所に近づいており、次の瞬間にあり得ないことが起きた。

「！？ うわあっ！？」

男性はなんとガラスの中へ吸い込まれてしまったのだ。近くに友人らしい男性もいたのか、腰を落としてしまっていると今度はそのガラスから糸が飛び出し、その男性を絡め取るとガラスの中へ引きずり込まれていったのだ。

「うわあああああ！？」

これを見た通行人は大騒ぎ。そのガラスから全員が離れる。

「人がガラスの中に…！？」

満は消えた2人のいるガラスに近寄って調べてみる。ガラスの向こうにある天磁場に移されたのかと思いきや、そこには二人の姿が無い。

ただし、あの薄らとした影があるだけで、その影はやがて消えていくのであった…。

「いったい何が…？」

ガラスを触ってみても何の違和感もないようには見えた。すると満のポケットから光が差し込み、目を細くしながら何なのかと取り出してみる。

それは先程拾ったリュウガのカードデッキだ。

「…ケースが光ってる…どういことなんだ…？」



目を開けるとそこは何もない空間の中にいた。

「…ここは…?」

よくぞ来た、鏡の騎士『仮面ライダーリュウガ』よ…

またあの声に前を向くと、この世と言っているのかと思うくらいなものが映っていた。

「りゅ…龍!？」

今にでも食われそうな赤い瞳に黒い体をした龍に満は腰を抜かしてしまふ。

落ち着くのだ。私はお前の契約獣、襲いはしない。

「け、契約獣…?」

私はドラグブラッガー。鏡の中に住む閻龍の化身だ。

「鏡？何のことなんだ！？ここは一体どこなんだ！？それに仮面ライダーって何なんだ！？」

だから落ち着くのだリュウガよ。ここは鏡の世界、ミラーワールド。つまりは鏡の中だ。

「鏡の中だって……？僕はそこに閉じ込められたのか？」

そのことは心配ない。元の場所に戻ることはできるが、戻れるのはそのカードデッキを持つ者だけだ。

「カードデッキって……まさかこれが？」

満はリュウガのカードデッキを見せる。

そう、それが私と契約する騎士のカードデッキだ。私はそなたを選んだ時、手に渡るように仕組ませたのだ。

「僕に仕組ませただって！？冗談じゃないよ！！契約なんていきな

りで分からないけど、そんなのは乗れないよ!!」

ほう。逆らうとならば破棄としてそなたを食い殺すことになるのだぞ。いいのか？

「く、食い殺すなんていきなりすぎるじゃないか!!」

私達は元から人間を食する存在だ。だからそなたが選ばれている場合には即座に…。

ドラグブラッガーは満へ威嚇する。

「…やらなきゃいけないんだね？」

そなたが死にたくないのならばな…。

「だったら命は粗末にはできない。契約…するよ」

これは仕方ない事だった。

だがこれそが彼の最悪の運命のスタートだとは知らずに…。

承知した。ではカードデッキをかざし、変身するのだ。



（あれからもう1年…戦いは終わっても契約は消えないが、味方と  
なってくれるのは心強いよ。けど…）

満はカードデッキを見ながら呟いていると…。

キーン…

「！？」

悲劇は、二度刺そうとしている…。  
満は身をかがめた。



もう戦いたくない。殺したくない。死にたくない。

魔の声から遠ざけようとするが、恐怖心とその声をさらに増していく。

満。戦え…

「！！…ドラグブラッガー…」

その声に気づくと、右側にある鏡にドラグブラッガーが映っている。

戦わなければ死ぬ。そう見て来ただろ…？

「違う！！僕が見てきたのは地獄だ！！どうして殺し合いしなければならなんだ！！」

だがそなたは願いで生き返らせたのだろ？それで良いではないか…。

「それも違う！！願いというのは叶えるものじゃない！！努力するものなんだ！！」

そう言つて満はカードデッキを持ちながら外へ出ていく。  
近くの十字路にあるロードミラーでカードデッキをかざしベルトを  
出現させる。

戦わないのではなかったのか？

「僕が戦う相手はライダーじゃない…ミラーモンスターだ。変身！」  
デッキをセットしてリュウガへ変身した満はロードミラーの中へ入  
り込み、ミラーワールドへと移る。

着いた先にはミラーモンスターである『シアゴースト』の群れが集  
まつており、満は直ちにとデッキからカードを1枚引くと左手に装  
備されている『ブラックドラグバイザー』へカードを装填した。

STRIKE VENT

認識を確認したと同時に右手が青い炎になり、ドラグブラッガーの  
顔をした武器『ドラグクロー』が装備される。

「昇竜突破…!!」

ドラグクローから猛烈な炎が噴き出され、シアゴーストを1匹残ら  
ずと焼き消すとエネルギーを帯びた光があちこちに現れる。

そこへドラグブラッガーが現れてエネルギーを自らの口へ吸いよせ  
ながら食す。とりあえずはこれで大人しくなっただろうと、元の世  
界に戻るうとしたその時だ。

待つのだ満。まだモンスターがいるぞ。

「えっ…？」

ドラグブラッガーに止められた振り返ってみると、遠い先にはオレ  
ンジの蟹のような姿をした何者かが困っているような様子でうつ  
ているのであった。

「あれって…鏡の騎士じゃ…」

ちょうどよい。あいつを倒すのだ。

ドラグブラッガーはそう命令するが満は首を横に振りながら断ろう  
とする。

「相手するのはライダーじゃないって言わなかった？」

そんなものなど騎士ではない。仮面ライダーとは願望の為に戦う  
者だ。

「それは全く違う。仮面ライダーは正義の戦士だ！」

満は無視して相手の方へと向かっていく。



「え？またって…？」

シザースは質問された内容をうまく理解できなかった。

「貴方は前に、僕が殺したはずです。最後に死んでしまった者達を生き返らせ、二度とデッキを持つ者が現れないようにしたはずなのになぜ…」

「え？何！？なんで私が死ななきゃいけないの！？」

シザースはいきなりすぎる話にカビーンとショックを受ける。

しかし今思うことに、何故かシザースの中身の人は女の子みたいな声をしているではないか。

「（さつきから女の子の声って…まさか別人？）外へ出ましょう、そこでなら話はできますから」

満はシザースを連れて外へ出ようと決める。

が、そこへドラグブラッガーが立ちふさがった。

満。その者を倒さなければならぬものだぞ。放っていいのか？

「いくらなんでも、話さなければ分からないことだってある。それにこの子は女の子、殺すなんてみっともないからね。だからあのモニターたちだけで我慢してくれ」

…後悔しても知らないぞ。

ドラグブラッガーは渋々と飛び去って行った。

「い、今のって…何？」

シザースはドラグブラッガーを見た時に驚いていたのか、小声で喋る。

「僕の契約獣さ。さあ、戻って話の続きをしよう」

満は改めてロードミラーの所に戻り、シザースと共に元の世界に戻った。

戻った後に満がカードデッキを取り外して元の姿に戻り、シザースの方向に振り向く。

「さて、君の正体を見せてもらうよ。女の子みただけど、どうしてそれを手にしたのかを教えてくれ」

シザースもカードデッキを取り外し、元の姿に戻った。

最初は月が雲で隠れているせいで薄らとしか見えないが、雲が退いて月の光が差し込むとその姿を徐々に照らしていく。

そこで目にしたのは水色の髪に赤と青の瞳、洋風の服装と下駄を履いており、何よりも折りたたまれた傘を持つ女の子がいた。

「本当に女の子だったんだ…君はいつたい…」

「えっと…その前に、ここって何処なの？」

女の子に質問される。よく見れば迷子とも言える年の子だ。

「市の町だけど、君は迷子なのかい？」



からなんか出てきてどこかへ行っちゃったんだけど何が何だかでよく分からなくて…そしたら次の日に今度は男の人が出てきてコレを渡してくれたのよ」

「男の人？どんな人だったの？」

「アルドラって名前を言ってたんだけど、それ以外のことはよく分からなかった。ただデッキの使い方を教えてくれただけ…」

アルドラか…久しぶりに聞く名前だな。

「！（まさか、知ってるの！？）」

満は心当たりあるドラグブラッガーへ問いかけた。

アルドラは元鏡の騎士で、カードデッキの起源とされた鏡の創設者だ。

（鏡の創設者…？）

そう、私が誕生したのも全ては彼によってだ。だから私はその存在を知っている。

語られた秘密に満の怒りが膨れ上がった。

アルドラが全ての原因となれば、そいつを倒すということだと思っていたのだが…



かといって相手をすれば骨さえ残してはくれんぞ。奴は鏡の騎士  
最強のオーデインを超える者だ。そなたでは勝てん。

（最強を超える…そんな…）

例え私に逆らえたとしても、彼には逆らえぬぞ…。

ドラグブラッガーはミラーワールドへ去って行った。  
辺りは静かとなって、小傘との2人だけになる。

「ところで、貴方の名前は何て言うの？」

小傘が満に名前を危機に話しかけ、満は怒りを鎮めては彼女に答えた。

「織原 満。仮面ライダーリュウガさ」

## 第18話「悲しみの龍騎士」（後書き）

どうも、作者です。

今回から新キャラクターの投入ですがなんとまさかのリュウガです！時にはダークライダーの正義を見せようじゃないかとのことでこうなりましたが、実は新キャラはまだいるんですよ（あと4人くらい）

そして東方側からは小傘改めてシザースが登場です。何故そうしたのかといえば、単なるザコということで決めています（酷いとかは気にするな！

今日はなんと新しいヒーロー戦隊が放送するということで早速見てみましたが、今回は海賊をモチーフにして豪快なる戦隊『ゴウカイジャー』なのですけどなんと驚くことに！

まさかのゴレンジャー！！！！？？？

なんと昭和時代に存在した伝説かつ初代戦隊ゴレンジャーが平成版として復活したんです！まるでディケイドみたいに変身してましたからもういつそのこと叫びたい…

「おのれゴウカイジャアアアアアアッ！！！！！」

これはもはや面白いとしか言いようがない！仮面ライダーオーズと合わせてこっちも見なくては！！

ということでも来週も絶対見るぜ!!そしてこれも続けていくぜ!!

追伸：機会があったらゴウカイレッドだけでも出したいぜ!!

## 第19話「我等、鏡の三騎士」

戻れる方法のない小傘をどうにかしようと、満は彼女を家へ連れて帰ることにしていた。

「ひとつお願いがあるんだけど、僕の家は妹との2人暮らしで、今は寝ているんだ。なるべく音を立てないようにしてほしいんだけどいいかな？」

「うん、それだったら私も静かにしてるよ」

寝る前にミラーモンスターが現れたのだから、もう周りの人は夢の中にいることだろう。

とは言えねている途中にそうされたら余計困ることだとは思うのも、満の中で悩みの種でもあった。

「さあ着いたよ。とりあえず中でお茶を用意するから、ゆっくりしていつて」

「ありがとう。それじゃあお邪魔します」

家に戻ってきた満は扉を開けて玄関へ入る。

「…あれ？」

ふと満が靴置き場を見た時、何かが変なことに気づいた。

この家には満と出雲の2人なので2足が置かれているはずなのだが、出雲の靴とは別にもう一側の見慣れない靴が置かれていたのである。見た目からにしては女の子のようであるが…。

（しまった！鍵を開けっ放しで出て行っただけから泥棒が入られたんだ

…！)

満は妹が無事なのかを調べようと、小傘に懐中電灯を渡す。

「小傘ちゃん、リビングに行って泥棒を捕まえるんだ。君の驚かしで何とかできるはずだよ」

「えっ！？ でも私は…」

「大丈夫、自分を信じて…」

小傘はお化けだから追い払うだけでもありがたいはずだ。可能性を信じてるのだからこそ言った満は、リビングの場所を小傘に教える。

「うん…頑張る…」

「後ろから近付いて、不意を突けばいいだけだ。もしものときは僕も駆けつけるからね」

小傘は懐中電灯を驚かす道具に使用するために明かり無しで前へと進んでいく。

満は出雲のいる二階へ向かい、音を立てないようにしながら部屋の扉を開けると出雲の安らかな寝顔があった。

どうやら泥棒に襲われてはいなようで安心した満は扉を閉め、小傘の向かったリビングへと向かっていく。

一方で小傘はリビングに到着していた。本当に暗くて見えにくくて何が起きるかは分からない様子であったのだが、台所辺りから薄らと明かりが照らしていることに気づいてそこへ近づいてみた。

(！ あれね…)

明かりは冷蔵庫の明かりのようで、そこには家に忍び込んだ女の子らしい影が見えていた。

小傘は懐中電灯を手にスタンバイし、ギリギリまで近づいていく。

（気づいていない、気づいていない、気づいていない、気づいていない……）

頭の中で強く念じながらある程度まで近づくことができた。小傘はその影の肩を軽く叩いて顔を誘わせる。

「ん？」

上手く反応して小傘に振り向いた。今だと懐中電灯を顔に向けてスITCHを入れる。

「うつらめしや〜」

「きゃあああああああああああああああああああああああ  
ああああ                      つ！！！！！！！！！」

「うおっ！？あの声は……」

1回に降りた満は悲鳴を聞き取り、リビングの明かりをつけて駆け寄ってきた。

「小傘ちゃん！泥棒は！？」

「バッチリ驚いたわよ！」

サムズアップして捕まえたと主張する小傘の前ではピクピクと放心状態になっている女の子がいた。セーラー服を着ているので学生かと思われるが、どちらかと言えば航海士のような格好だ。

「さて、この子を早く警察に通報と……」

満は電話機の所へ向かいに行こうとしたその時、泥棒少女が目を見渡した。

「……えーっと……これって、私、見つかったの？」

満と小傘が同じタイミングで縦に振った。

「ご、ごめんなさい！！私お腹が空いてて食べ物が欲しかったんです！！悪気は無かったんですけどどうしても欲しくてしかたなかったんです！！ここが何処なのかも分からないまま死ぬなんてまっぴら御免なんです！！……あ、でも私は既に死んでるんだっけ……」

「此処がどこって……もしかして貴方、幻想郷の住民！？」

小傘はまさかと思っていた。

「ちょっと待って！それよりも君、すでに死んでいるってどういうことなの！？」

満はそれよりもまさかと思っていた。

「そりゃ見てのとおりよ。私は船の転覆事故で亡くなった幽霊なんだから…」

「それじゃあ犯人は泥棒じゃなくて…幽霊!？」

ゾゾツと身震いする満に対し、小傘は啞然としていた。

まあお化けと幽霊は似たようなものだけど、結果で言えば小傘は妖怪、相手は幽霊と似たり寄ったりな分類だ。

しかしこれだけで済むとは満には思わなかった。

「お兄ちゃん、何か声がしたんだけど…」

「ギクツ!!」(大変だ!今の悲鳴で出雲が起きてしまったんだ!)

そこまで考えてなかったと満は極限のピンチに陥ってしまう。

そこで満は台所の視界を利用して隠そうと考えつき、2人をその場へ誘い込ませた。

「2人共!この中に入って!動いちゃだめだよ!」

小声でそう伝えてリビングの入り口に向かうと、とろーんとした目で寝ぼけている出雲がやってきた。

「あれ?お兄ちゃんまだ起きてたの?」

「ごめん、なかなか寝れなくてね…テレビを見てただけど、そしてたら玄関から泥棒が入ってきたんだ」

「え!?!嘘でしょ!?!大丈夫だったの!?!」

「大丈夫、僕が見ていたホラー映画のシーンを利用して泥棒を驚かせて追い出したよ。何も盗まれてなかったから安心して」

「そう…よかった、お兄ちゃんが無事で…」

「あれ?品も大切じゃないの?」

「うっん、私はお兄ちゃんが一番大事だから…。じゃあもう一度寝



てくるね」

「うん…」

出雲部屋へ戻り、上手い芝居で乗り切った満は玄関の鍵を閉めてリビングに戻って一安心する。映画のアルバイトをしていなかったら今頃ばれていたかもしれないのに…というのはそれくらいにしておき、満は2人元へとやってくる。

「もう大丈夫だよ」

台所にひょっこりと顔を見せた満は2人を呼び出そうとしたが、泥棒少女の方は「ひいつ」と驚きながら後ろに下がる。

「心配ないよ。食べ物も少しだけ分けてあげるから、今回は大目に見てあげるよ」

「ほ…本当に…？」

「勿論さ」

満はニツコリと笑い、2人をリビングのソファへ座らせた後にお茶と手軽な食べ物としておにぎりを用意する。

「私もあまり食べてなかったからちょうどよかった。じゃあいにくね」

小傘の分も差し出されて喜びながらいただき、満は反対側のソファに座り込む。

「それで小傘ちゃん、この子に心当たりがあるみたいけどどうなの？」

「うーん…知り合ったことは無いんだけど、幻想郷に住む人達はみ

んな変わってるから一目で分かるくらいなの。因みに、幻想郷には幽霊も沢山いるんだよ」

「沢山かぁ…なんだか怖そうな世界だね…」

「そうかもしれないけど、行ってみると楽しいよ？」

「…では、君はどうしてここへ来たかを教えてくれるかな？最初に名前を聞かせてよ」

どうも知り合いではないらしく、満は直接本人に聞くことにした。

「名前は…むらさ みなみつ村紗水蜜。聖輦船の船長をしてるの…」

「船長か…じゃあ次に、君はどうしてここへ来たんだい？」

「それは…」

答えようとする村紗だが、暗い表情が続いているせいで返事をする様子が無い。

まずはそこから探ろうと満は方針を変えて再度質問した。

「もしかしてだけど、君は元の世界に戻る方法が無くて困ってるんじゃないかな？見たことない場所でこんな目に合えば相当ショックだからね…」

「えっ、どうしてそのことを…？」

「私も貴方と同じ世界の住民なの。だから私も戻る方法が無くて、今は満に拾われてるんだ」

小傘も村紗と同じく戻る方法は無いのでどうしようもないが、どちらかというと彼女は誰からも忘れられている妖怪ということでは1人らしい。

そんなことをするなんて許せないけど、小傘も村紗も戻りたい気持ちはあるかもしれない。けど本当に戻れないのだとしたら…。

「2人共、」  
「？」

満は2人に言った。

「もし戻れる方法が無くて、永久にこの世界に留まることになったとしても…その時は、ここで住んでもいいよ」

「え？でもそうしたら妹の子には…」

「その時は説明するからそれでいいさ。あとは寢床を何とかしたいのだけど…」

もしものことでも心配しない笑顔でいる満に迷いはなかった。悩みが打ち解け、少し落ち着いた様子になった村紗と小傘に寢床のことを考えようとしたのだが…

キーン…

「！　また奴か…」  
「え？」

またミラーモンスターが出て来たらしい。

「ミラーモンスターが現れた。すぐに向かうよ」  
「え？みらいもんすたー？新しい妖怪？」

村紗はどういう意味なのか把握できずに首を傾げた。

「君達も聞こえるよね？この音が」

「そういえばさっきからキーンって…」

「そう、これは鏡の中の世界であるミラーワールドとの次元が開いた合図。その世界の怪物、ミラーモンスターが人間の世界に入り込もうとしている前兆だ」

「鏡の中の怪物…よく分からないけど、どうすればいいの？」

「簡単さ。仮面ライダーに変身して退治するんだ」

満は鏡となる窓ガラスに立った。

「ここからミラーワールドに入り、モンスターに応戦する。カードデッキを持つ小傘ちゃんも手伝ってくれ」

「う、うん…」

小傘もガラスの前に立ち、シザーズのカードデッキを取り出そうとしたその時、

「待って！私も行くわ！」

村紗が2人を止めたのである。

「行くって…まさか、村紗ちゃんも!？」

「小傘のそれを見た時にまさかと思ってたけど…貴方もそうだったのね」

村紗が取り出すのはもちろんカードデッキだった。水色でサメのマークをしたカードデッキである。

「私はアビス。仮面ライダーアビスって呼ばれてるわ」

「アビス？（そんなライダー、前と戦っていた時には無かったはず…）」

ほお、アビスか。これは面白いことになりそうだな。

（！ お前…）

そう喚くな。今はそなたの通りに大人しくしている。ただし、で  
きるだけの食糧を提供してもらうぞ。

ドラグブラッガーは村紗に何かをしでかしそうな様子でいたが、満  
はそれを気にせずと自分のカードデッキを取り出す。

「行くよ」

「うん！」

「OKよ！」

3人はカードデッキをガラスへかざしてベルトを出現させ、同時に  
叫んだ。

「」「」変身！」「」

ベルトへセットし、3人はそれぞれのライダーへと変身する。

水色の鯨をする仮面ライダーアビス。

オレンジの蟹をする仮面ライダーシザース。

そして黒き龍をする仮面ライダーリュウガ。

三騎士はいざ前へ、鏡の世界へと出発を始めた。

## 第19話「我等、鏡の三騎士」（後書き）

あとがきでも何も言うことがない作者です。

また現代に1人訪問者、ムラサ船長が現れました。

実際彼女の性格が分からなくて今回のようになったのは私の責任でしよう……だが私は謝らない。

現代入りとかで見たムラサによればかなりのお調子者で可愛いというらしく、後程にそういった感じにするつもりでございます。

## 第20話「ゲームを始めよう」

ガラスの中へと入って行つた3人は不思議な空間へとやってくる。

「ここ…どこなの？」

村紗は見たことない場所に辺りを見回していた。

「ここがミラーワールドさ。一見は変わってないように見えるけど、モノがすべて逆向きになって人が存在してなく、いるのはモンスターや同じ条件で入ってきているライダーだけ。あと、この世界では必ずデッキを壊さないことを言っておくよ」

「デッキを壊すって？」

「デッキが壊れてしまうと契約破棄になって、そのライダーは契約モンスターに食べられてしまうんだ。ハッキリ言くとデッキは自らの命さ」

「嘘！？食べられるの！？そんなの聞いてないよ！？」

「それだけじゃない、この世界は生身でいても死んでしまう。ライダーに変身しているのは水の中でも適応できる酸素の役割をして、変身している間でもこの世界では時間制限もある。それを越えても死ぬことになるからね」

「そんな…生きてても死ぬ恐れがあるなんて…」

「じゃあ聞くけど、その時間ってどれくらいなの？」

「持って10分。あと9分で僕達は死ぬことになる」

「ええっ！？じゃあどうすればいいの！？まだ私驚かし足りないのに！！」

「その時にはミラーワールドから脱出すれば助かる。ただしデッキが壊れてたら二度と出られることなできないからね」



気を取り直し、3人は家の門を出て外へ出た。

「2人共よく見ておくんだ。ライダーバトルというのがどれほど恐ろしい事か、僕の悲しい過去と合わせて教えてあげるよ」

満がそう言った瞬間に巨大な蜘蛛『デイスパイダー』が現れる。

「デカツ!? こんな化け物もいるんだ!？」

「あんなのを満はどうやって戦うっていうの…?」

2人はあまりのスケールに唖然としている。

満はカードを1枚引き、ブラックドラグバイザーへ差し込んだ。

## SWORD VENT

ドラグセイバーを手にしていざ突撃。デイスパイダーは針を飛ばすが剣と足技で弾いていき、接近したところを脚から切りつける。

急所狙いで攻めているのか、満は標的となる脚に次から次へと切りつけていくのだがデイスパイダーが反撃を開始。切りつけられている脚で満を蹴り飛ばす。

「うわっ! ならばこれ…!」

2枚目のカードを引いてバイザーに差し込んだ。

## ADVENT

「グオオオオオオオオオオオッ!!!!」

カードを使用した瞬間に空から咆哮が聞こえ、ドラグブラッガーが

現れる。

「行けっ！」

満が指示をしてデイスパイダーに火炎放射をお見舞いするドラグブラッガー。その威力にデイスパイダーが怯みだした。

「今だ！これで！」

満はチャンスだとデイスパイダーの真上へ飛び掛かり、ドラグセイバーを縦に持ちながら急降下して両断。直後に爆発した。

「おおーっ！」

2人は見事退治した彼に感激しており、満が2人の元へ戻ってくる。

「あんな大きいのを相手にできるなんて…満って凄いんだね…」

「感心するのはいいけど、君達も戦わなきゃいけないんだよ？因みに戦いを放棄してしまうと契約モンスターが怒って食べられるからね」

「…え？それってどういうこと？ミラーワールドから出れば死なないんじゃない？」

「そのデツキは命でもありながら『私は契約モンスターに食料を提供いたします』との使命があるんだ。だから必ずモンスターを相手にしなきゃ、外に出ていても食べられることになるから気を付けてよ？」

感激は消えて恐怖へと変わる2人はお互いに顔を見合わせた。

「ねえ…私達、生きていけるわよね…？」

「多分：何かとてつもない予感がするけど…」

「でもまあ、ルールを守ればそんなに心配はないよ。それに君達の相手がお出迎えみたいだしさ」

3人が会話している中でまたもやミラーモンスターが現れた。シアゴーストである。

「アレと戦うの？でもまあ、さっきよりはマシそうだからできるかも…」

「まずは習うより慣れろさ。カードの使い方も後で説明するから、今は相手にしてみて」

とりあえず実践を始めることに、2人はシアゴーストに攻撃を仕掛けた。

「そうだよね…弾幕ごっこみたいにすればきっとできるわよ！」  
「それならなおさら、スペルカードで！」

「傘符「パラソルスターシンフォニー」！」  
「転覆「撃沈アンカー」！」

右手を前へ突き出してスペルカード使用の宣言をする。

.....

が、何も起きない…

「…あれ？」

「????」

2人は何がどうなっているのか全く理解できずに首を傾げていると、シアゴーストがいきなり二人に襲い掛かってきた。

「うわぁっ!?!ちよつとこっちこないで!」

「どうなってるのよ!?!なんで弾幕が出ないの!?!」

「…前言撤回、やっぱり教えた方が良かったか…」

ギャーギャーと騒ぐ2人に満はドラグセイバーでシアゴーストを切りつけていき、2人に近づいた。

「大丈夫?とにかくカードの使い方を教えなきゃいけないみたいだから教えるよ。デッキにあるカードを引いて、それぞれの召喚機『バイザー』にベントインするんだ」

「バイザー…もしかして、この腕についているのに?」

小傘には鋏の形をした召喚機『シザースバイザー』が、村紗には鯨の形をした召喚機『アビスバイザー』がつけられており、2人は同時にカードを引くとバイザーに装填する。

STRIKE VENT

SWORD VENT

小傘が読み込ませたのはストライクベント『シザースピンチ』。シザースバイザーとは違った巨大な鋏が右手に装備される。

一方で村紗が読み込ませたのはソードベント『アビスセイバー』。

二刀一対の剣が両手に装備される。

「…って、私は何でこんな武器を装備しなきゃいけないの！？って言うよりこれ武器なの！？」

「確かに小傘のそれは何だかと思うけど…」

「それめちゃんとした武器さ。もともとカードは決められているから大目に見るようにね」

とりあえず戦おうと武器を握りしめてシアゴーストに攻撃してみる2人。それをしたことで意外にも恐怖感が消えることになるのはモンスターを倒していくことで、次第に戦い方に磨きがかかってくる。

「思ってたよりはそんなに怖くないよね？」

「ここまでできたなら一気に行くわよ！」

小傘はカードを引いてシザースバイザーに装填する。

## FINAL VENT

読み込みと同時に小傘の真後ろから契約モンスターのボルキャンサーが出てくる。

「うわっ！？いつの間に後ろにいたの！？」

「それは君の味方モンスターだ。攻撃はしてこないよ」

危うく攻撃してしまうところだった小傘は落ち着くと、ボルキャンサーが缺を地面に叩きながら何かを伝えようとする。

「…？ここに立ってってこと？」

ボルキャンサーが縦に振って頷いたので小傘はその場に立つ。と、次の瞬間

ブンッ！

「うわぁっ！？何すんのおっ！？」

ボルキャンサーはなんと小傘を上空へ突き飛ばしたのである。そのまま小傘は高速で回転しながらシアゴーストへ突撃する。

「ア

ッ！！！！」

直撃してシアゴーストは大爆発を起こしながら消滅。その場にはバツタリと倒れている小傘だけが残り、村紗は彼女へ駆け寄った。

「だ、大丈夫！？」

「イテテテ…何よあいつ！いきなり突き飛ばすなんてグル！？グルでもしてるの！？」

「違うよ。今小傘ちゃんが使ったのはファイナルベント、必殺技だ」「必殺技…？」

「そう。ライダーに必ず1枚あるカードで、相手を粉砕するほどの威力を持つんだ。ボルキャンサーがシザースを上空へ飛ばし、敵へ体当たりする『シザースアタック』が、小傘ちゃんの必殺技となっているんだ」

「ええっっ！？何かダサい！！」

駄々をこねようとしている小傘だが、三人の体が崩れていく砂みたいになっていく。

「え？何これ！？」

「時間みたいだね。早くここから出よう」

制限時間があることを忘れていた小傘と村紗は満と一緒に元来た窓ガラスから脱出した。

元の部屋に戻つてくると3人の変身が解除される。

「はぁー、間に合った…」

「時間が経つとあなるんだね…」

「そう、だから時間も気にしなきゃいけないんだよ。とりあえずはミラーモンスターも退治したし、これがミラーワールドでの戦いつてことになるんだ。倒していくほどに契約モンスターも成長して強くなるから、よく覚えておくようにね」

ライダーバトルも終了し、今度こそ眠りにつこうとしていた3人。  
ところが…

「待つてよ、異世界の仮面ライダー」

「!?!」

リビングの出入り口から見慣れない青年が現れる。鍵は閉めたはずなのにまだ誰かいたのかと満は警戒するが、小傘は青年を見たことで「あっ！」と閃いた顔になる。

「貴方って…アルドラ？」

「何だって！？あの人…！」

小傘が言ったのは、シザースのデッキを託してくれた彼の名前だった。次に村紗も…

「あ。あの人って私にデッキをくれた人…」

なんと村紗も彼の顔を知っていた。

「やあ、シザースにアビス。そして君とは初めてだね、織原 満君」  
「僕の名前を…貴方、ドラグブラッガーが言っていた元鏡の騎士、そしてカードデッキの創設者なんですよ…？」

満はドラグブラッガーが言っていた話をアルドラに質問した。

「…その通りさ。僕は元鏡の騎士でデッキの創設者。そして、この子たちにデッキを渡した本人だよ」

「どうして…どうして貴方が僕達を殺し合いに巻き込ませたんですか…！」

満はあの過去のことをアルドラにぶつけると、さっきまで普通にいられていた小傘の顔が変わり、満の顔を見て問いかける。

「満…殺し合いって…？」



「2人共、あの人は僕達を騙しているんだ！本当は僕達を殺そうと  
のことでデツキを渡している！そのせいで、僕は…」

「満君は、12人の騎士を殺した。ライダーバトルの唯一の生き残りとしてね」

「ど、どういうこと？アルドラはゲームでもやってみないかって言  
ってたじゃないの！」

村紗もだんだんと怪しい空気になっていることを感じ取っていた。

「貴方は、どうして人を殺し合うことを決めてデツキを作ったんで  
すか？教えてください！」

「簡単さ、その理由は…」

「僕は人が死ぬことが好きだからさ」

「！！！！؟؟？」

ここへきて2人は完全に息を殺す。アルドラの顔がどす黒い笑顔になる。

「刺されて死ぬ人に、モンスターに食べられて死ぬ人、そして阿鼻叫喚になりながら消えていく人…僕はそういのを見ていくことが好きだからね…」

「酷い！完全に人殺しじゃないか！！」

「でも無駄だよ、契約した以上に殺し合わなきゃ。ちなみに契約が解かれるのは死んだ瞬間だよ」

「そ、そんな…そんなの…」

「幻想郷のルールを、違反してるじゃないのよ！！」

小傘と村紗のいる世界では、妖怪は人を襲わないとのルールがある。しかしそれを破れば博麗の巫女により退治されるとの決まりがあり、彼はもう違反をしている。

だがアルドラは、それを気にしてはいない。

「どうしてもイヤ？それなら僕が契約を解いてあげてもいいよ。死にたいのならね…」

「っ！！！！！！」

満は目をクワツと広げ、カードデッキを前へかざす。

「変身！！」

満はリュウガに変身してアルドラにパンチを与えようとした。しかしそれを避けようとせずに受け止めた次の瞬間、3人は目を疑うかのようにして彼を見ながら言うのであった。

「…ミラーモンスター…！？」

そう、彼の姿が人間から、まるで神のようなモンスターに変わったのである。

「これが僕の正体さ。見たからには、どれだけの実力を教えてあげよ、満君」

するとアルドラの真上に小さな光の球が現れ、胸にある突起物に吸い込まれた瞬間、

T R A S H   V E N T

なんとベントインと同じ認識音が発生。そして満のデッキに炎が燃え移った。

「うわああああああっ！！！！？」

「満！？満    っ！！！！」

小傘が叫び、満は絶望と恐怖に怯えながらデッキを見た。火は消えて特に問題は無い様子だが、違和感を感じた満はその答えをはじき出す。

「カードが…失われてる…！？」

「そう、僕が使ったのはトラッシュベント。相手のデッキにあるカードを燃やして使用不可能にする効果がある」

恐るべし効果を聞いた3人は確信していたのか、後ろに一步下がる。  
するつ...

「お兄ちゃん、どうかしたの!？」

なんと最悪にも出雲がリビングに入ってきたのである。そしてアルドラのおぞましい姿を見た彼女は凍りつくようにた佇み、アルドラは人差し指で彼女の額を軽く突くと気を失うようにして倒れた。

「出雲！！貴方、妹に何を！！？」

「記憶を失わせたただだよ。僕達はこれから、ゲームのステージに行かなきゃいけないからね……」

「い、イヤ……」

村紗は耐えきれない恐怖に声が漏れる。

「さあ始めよう、ライダーバトルを」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアア」

ツ  
!  
!

!!

女の子の悲鳴が家に響いた瞬間に窓から光が漏れだし、満、小傘、村紗、そしてアルドラの4人はこの場から消えてしまった。

会場である幻想郷へ、3人は……。

## 第20話「ゲームを始めよう」（後書き）

こんな風なって申し訳ありません！！

ですがこれはあくまでもフィクションなので気にしないでください。  
『ダンガンロンパ』みたいな絶望の中で戦う主人公なので、悲劇の主人公との設定でお願い申し上げます。

### アルドラについて

このキャラは『天装戦隊ゴセイジャー』から、『救世主のブラジア』をモチーフとしており、彼しか持っていない契約モンスターやオリジナルカードを所持しています。  
の内容は以下の通りです。

- ・トラッシュイベント…相手のデッキにあるカードの3分の1を燃やして使用不可能にする。
- ・クエイクイベント…地震を発生させる
- ・ジャンクイベント…使用済みカードを3枚復活させる
- ・リカバリーイベント…体力を回復する
- ・トラップイベント…相手が使用するカードを無効化して爆弾に変える
- ・マインドイベント…相手契約モンスターを自分側に洗脳させる

契約モンスターは以下の通りです。

『鼓動の破壊龍・エクリプスドラゴン』

AP…11000

ファイナルイベント…『ギカンティックエボリューション』を発動。

エクリプスドラゴンと一体化してコントロールを得たアルドラが最大出力まで上げてからの極太の超破壊光線を発射。その威力は世界全てを消し去るほどだとか…。APは14000。

チートすぎるキャラを作ったのは私の責任だ。だが私は…謝ります  
(涙)



日の出と共に照らされる人里の近くに建立された寺『命蓮寺』<sup>めいれんじ</sup>。この寺の主であり、魔界に封印された魔法使いの聖<sup>ひじり</sup>白蓮<sup>びやくれん</sup>。そして彼女の解放をある少女と共に手を貸していた、あの有名な毘沙門天<sup>びしゃもんてん</sup>の弟子である妖怪の寅丸<sup>とらまる</sup>星<sup>しょう</sup>と、雲の体をした入道『雲山』<sup>うんざん</sup>を連れた入道使いの雲居<sup>くもい</sup>一輪<sup>いちりん</sup>の3人は今、寺の奥で瞑想している見慣れないお坊さんを見守るようにして立っていた。

このお坊さんは妖怪退治の使命を代々告げられてきた者で、前までは古い寺で生活してのも束の間に老朽化で倒壊してしまい、新しい住居を探していたところでこの命蓮寺に寄ったといわれている。元々、星が毎回失くしている(らしい)毘沙門天の宝塔をお坊さんが代わりに管理することを条件に泊めているとか…。

そんな話をしていたその時、3人の元へまた別の少女が現れた。第一印象で言えば鼠だ。但し、どこぞの某遊園地のキャラクターではなくて本当に生えているかのようなネズミの耳と尻尾をした少女だ。

「ナズーリン、どうだった？」

星は彼女の名前を言って聞いた。この少女は星を仕える妖怪で、以前は宝塔の探すために役立てていた少女であるのだ。ナズーリンは星に首を横に振りながら答える。

「ううん。ムラサの気配は何処にも…」

「そう…。ねえ聖、彼女は無事なのよね？」

「分からないわ。今はカミカタさんの霊力が頼みの綱だから…」

白蓮はいつ分かるのか知らないとはいえ、この静かさが続けばまさか…と4人が思っていたその時、カミカタの目がクワツと開くと立ち上がり、4人の元へやってきた。



「見えたぞ。彼女がこの場に返ってくる」

カミカタに告げられたのは彼女の生存と帰還だった。まだ無事の子に4人の顔が変わる。

「ムラサが戻ってくるんですか!？」

「! ご主人様、あれを!」

ナズーリンは主人である星に指している方向に向かせるようにして伝え、星達が振り向いた。

そこにいたのは、気を失っている様子の少女2人と青年1人の姿が…

「ムラサ!？」

「つてか、何であの化け傘まで!？」

何やら顔見知りがあるのか、ナズーリンは嫌がる気持ちでいた。

カミカタが近寄って三人の脈を計り、危険じゃないと判断すると3人に言った。

「この3人を運ぼう。どうも精神が酷い様子だが、安静させた方がいい」

「は、はい!」

「えー、アイツも入れさせるのー?」

それでもナズーリンは嫌がっていた。

「仲が悪いみたいだが、白連のことを忘れてはいけないぞ?」人間と妖怪とは平等な関係でいること』つて」

カミカタは青年を担いで寺の中へ、白連達もすぐに取りかかること



……満………！

「しっかりして、満！」

「う、ん……？」

暗い視界が消え、青年満は目を開けた。  
見えていたのは何かの天井、そして…

「小傘…ちゃん…？」

小傘の心配している顔が見えていた。

「僕…今まで何を…？」

「意識を失っていたんです。でも、もう心配ありませんよ」

別の声が聞こえて体を起こした満。小傘とは逆の方向には白連の姿があった。

「貴方は…？」

「聖 白蓮と申します。ここ、命蓮寺の主です」

「寺…でも、僕は…」

「満。ここは、幻想郷なの」

小傘が把握できていない満にそう言った瞬間に顔を小傘へ向けた。

「幻想郷！？じゃあ、ここって…」

「私や村紗がいる世界。戻ってこれたの」

小傘と村紗の元いた世界、幻想郷。そこへ戻ることができた小傘はいつもなら嬉しそうで何よりなのだが、一つ忘れていたことがあった。

「私達、戻れたのはいいけど…満がこの世界に来てしまったから…」

そう。満は現実世界に住む人間。それが別世界へ来てしまい、逆に満が戻る方法を失ってしまったのである。だがそれだけではない…

「そうだ！アルドラは何処へ！？」

満はアルドラのことを思い出し、小傘から居場所を聞こうとしたが…

「ごめん、私にも分からないの。目を覚ましたら私もこの寺に…」

「あの、アルドラって？」

白連はアルドラという名前に引っ掛かり、満の顔を向きながら聞いた。

「あ…えっと…聖さんでいいですよ？今から、僕の話信じてくれるますか？」

「話ですか？」

「はい、実は…」

青年説明中…

「そんなことが…。では貴方やムラサ、そこにいる彼女は戦いに…」  
「はい。アルドラはカードデッキを持つ僕達を本気で殺そうと…」

満は自分のデッキを見せて話したのだが、この後に思いもよらない事実が明らかとなる。

満。

3人の真上からドラグブラッカーが姿を現したのだ。

「ド、ドラグブラッカー！？ 鏡からじゃなくて、なんで天井から！？」

確かに私は鏡の中からしか出てこれない。しかしだ、この世界は現在特殊な環境になりつつある。

「特殊…？」

この世界に疑似なるミラーワールドと融合しようとしている。ほんの一部は既に融合している故に、私は鏡の中ではなくても出てこれるようになったのだ。

「疑似なるミラーワールド…それじゃあ、人間がみんな死んでしまっ  
うじゃないか…！」

安心しろ、あくまでも疑似だ。生身でも死ぬ恐れはない代わりに、  
人間の背後から襲えるようになったのだからな…。

ミラーワールドは人間が保てる世界ではない。だが今起きているのは生身でも死なないミラーワールドが幻想郷と融合しようとしていること。

あり得ない話だが、天井から出て来ただけでも背筋に冷たさが感じ  
てくる3人に、ドラグブラッカーは天井の中へと消えていった。

「…アルドラが言っていた事ってこれなのか…ライダーじゃない人間  
間までも…！！！」

「酷い人ですね…。もしよければ、私も手伝わせてもらえないでしょうか？貴方の話が本当のようですから…」

「はい、是非とも！」

白連も共に戦ってくれることになり、戦力は4人へと変わった。と、思われたのだが…

「その話、私もまぜてもらおう」

部屋の戸が開かれ、今度はカミカタが現れた。

「私はかつて、妖怪退治をやっている僧侶のカミカタだ。話では君とは違うが、戦える力ならある。ぜひとも力になりたい」

「！　ありがとうございます！」

カミカタも満達の戦力になってくれるとのこと嬉しく思った。

いつ以来か、こんな感じに共に戦っていたことを…。しかしその仲間達は戦いで死んでしまい、生き返らせてからは普通の生活へと帰っている。1人で戦っていたはずの彼には嬉しい仲間が4人も現れ、臆された心はいつの間にか消えていく。

「カミカタさん、姐さん、食事の用意ができました」

そこへ一輪と雲山がやってくる。食事の用意ということは満と小傘の分もあるのだろう…。と言いたところだが、満の目の前にいる雲山に目を疑った。

それもそのはず、満は雲山をミラーモンスターと思うくらいに驚いているのだから…。

「外来人である貴方と会うのは初めてですね。私は雲井一輪と申し

「こっちは私の使役の雲山、入道と考えれば分かるかと」

「入道…… あ！そういうば村紗ちゃんは！？さっきまで見ていなかったけど」

今更なことだが、満は村紗がいなことに気づいて白連に聞いてみた。

小傘は戻れたとしても彼女は今どうしているのか……まさかまだあつちの世界にいるのならどうしたらいいのだから……と心配していた彼を止めるべくとカミカタが言い出した。

「村紗って、村紗水蜜ちゃんのことかい？」

「はい、そうですね。」

「それなら大丈夫だ。彼女はもともとこの寺に住んでいる子だ」

「えっ！？そうなんですか！？」

「ああ、村紗ちゃんも目を覚まして居間にいる。さあ食べに向かうでしょう。一輪に後を任せていた料理がどうなっているか、楽しみにしているのだから」

カミカタは一足先に食事をとりに居間へと向かう。

「それじゃあ、私達も行きましょうか。貴方達の方も用意してはいますので、是非」

「あ……ありがとうございます」

[illegible]



居間に来ると元気でいる村紗の姿があり、満が入ってきた時に彼女は手を振ってくれた。

「満！目を覚まさなかったから心配してたんだけど大丈夫だった？」

「うん。心配かけてごめんだけど、もう大丈夫だよ」

「それよりもどういうつもり？なんで化け傘までの分も作られてるのか…」

「ナズーリン、客なのだから致し方ない」

ナズーリンは小傘を見ながらいちやもんをつけており、逆に小傘はムツとした顔でナズーリンを見ている。

「食べる前に私達の紹介もしておいた方がいいわよね。私は寅丸星。毘沙門天って知ってるよね？」

星は満に名前と合わせてそのことを言った。

「毘沙門天って、あの有名な十二天の？」

「そう、私はその弟子である虎の妖怪よ。嘘だと思っけど本当のことよ」

星は証拠として毘沙門天の宝塔を取り出した。

「…確かに本物だ…」

「というより星、それは私が管理すると言っていないかったか？」

するとカミカタが急にしかめっ面な顔になり、星に言いつけに出た。

「どうも無くしたと思い込んだりするだけですって！」

「けどご主人様、カミカタさんに頼んで以来に紛失してしまうことは無くなったのですからそれくらいは耐えられないのですか？」

「無理！」

星は知らんぷりをしながら否定するのだが…

「みんなの言うことを聞いたほうがいいよ。でなきゃ師匠から天罰が下されるよ？ なんだってそれは師匠のモノなんだし」

満が星に説得をしていた時に一輪がお茶を運んできて、星に置かれた直後に飲もうとしたその時だった。

「ゲホッ!？」

星はムせてしまう。

「ほら、師匠から罰が当たっちゃったよ」

周りの人もつられて笑い出した。

「…ご主人様気にしないでください。私は今まで働いてきたんですから」

「うっ…」

「…では最後にナズーリンだ。他の皆はもう済んでいるから紹介してあげてくれ」

「はい…。ご主人である星様の使いのナズーリンです。どうぞよろしく願います…」

「うん、こっちのほうも名前を言っておくよ。僕は織原 満。表の世界の人間にして、鏡の騎士の1人。別名は仮面ライダーリュウガ」  
もう一度カードデッキを見せて自己紹介し、話が済んだところでみんなが座布団の上に座る。

一輪が運んできた料理は『冷や奴』や『トマトとレタスのドレッシング和え』に『茸の出し汁』といった僧ならではの精進料理が置かれている。

「うん、言われたとおり仕上がっているようだ。それじゃあいただくとしよう」

「はい。いただきます」

「……………いただきます」「……………」

8人は料理をいただきながら、満の事情を星達に話をしていった。彼の惨劇なる過去、ミラーモンスターのこと、そしてアルドラの目的のことを話し終えた時には、みんなは声を出せずに静かな状態でお互いの顔を見合わせる。

「鏡の中で戦う戦士って凄いですね……」

「けど可哀想でしかたないよ。こんな人が無理矢理戦わされたんですよ？」

「おまけにムラサがそんな危険なことに巻き込まれるなんて有り得ませんよ。すぐにそれを捨てたらどうなんですか？」

「ごめん。満からは契約は死ぬまで無効にならないんだって……」

「それに戦いを放棄しても契約破棄扱いだって。だから絶対に戦わなきゃいけないの」

戦わなければ生き残れない。

その運命を背負った満、小傘、村紗の辛さに、皆は助けたくても『無理』という壁に阻まれていた。

「やるにはアルドラを止めるしか方法が無いということだが、居場所もわからずじゃ意味がないな……」

カミカタは管理者でもあるアルドラを打倒すべきだと発案する。道のりは遠いところであるが、それを少しずつ近づきながら行けばよいと考えた後に話を変えに出た。

「星、食べ終わった後に宝塔を元あった場所に戻しておくようにするんだよ？」

「はい」

「返事は『はい』だ！」

居間にまた笑い声が響くのであつた。

[illegible]

食べ終えた星はとりあえず、宝塔を元の所にあつた場所へ戻しに部屋へやつてくると開けつ放しの木箱の中に布で身を包ませた宝塔を入れ、蓋を閉じたあとに奥の仏壇に供えた。

「はあ……心配で仕方ないと言っても駄目だし、大丈夫かなあ……」

じきに慣れるという言葉がいつそうなるのかは分からないが、星は肩を落しながら離れようとした次の瞬間だった。星の耳に聞きなれないような音が入ってくる。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン…

ガンッ！

「！？」

最初に何かが飛んでくる音がして、星の真横にカードが通り過ぎると奥の壁に刺さった。

あんなのが当たっていたら怪我に成りかねないことであるが、一体何が起きたのかと星はカードが飛んで行った方向に振り向き、壁に刺さっているカードを抜き取った。

「これ… いったい何処から…」

星は飛んできた方向に向きながら考えていると、カードに文章が書かれていることに気づいて読んでみた。

『満月の輝く今夜、毘沙門天の宝塔を盗みに参上する。』

イエンド』

「…？どういうことこれ？」

いまいち理解ができない星。そこへ満がやってきて星に話しかけてきた。

「星。戻ってこないからどうしたのかって思ってたけど、宝塔は閉まったの？」

「あ、はい。ですけどこんなのがさっき飛んできて…」

星はカードを満に見せた時に顔色を変え、恐る恐ると星に言うのであった。

333

「星、これは予告状だよ！宝塔を今夜盗みに来るって知らせだ！」

「宝塔を盗みにですか？それって大変な事じゃ…」

「カミカタさんにこれを知らせなきゃ大変だよ！すぐに知らせに行こう！」

………

「何だって！？それは本当なのか！？」

「はい、コレを星が見つけたんです」

満は予告状をカミカタに見せる。

「盗みに来るなんて久しぶりよね聖。脇巫女が全部よこせって言われたっけ？」

「そうねえ…けどこの名前がどう見ても巫女でも、あの魔法使いでもないわね」

怪盗ディエンドとの名前に白連は考えていた。

「あの…巫女や魔法使いって？」

満が白連に質問した。

「そういえば、貴方にこの世界にことをあまり言ってませんよね？ここは妖怪や人間がいるのは当然のことですが、魔法使いや鬼など、いろいろと生きている者がいるんです。因みに私も魔法使いなんですよ？」

「幻想郷には二人の巫女がいて、1人は博麗の巫女、もう1人は山の新人神様って呼ばれるんだよ」

「魔法使いに鬼に神…本当に何でもありだね…」

「それはともかく、この予告のことを何とかしなければいけない。だが打つ手なら…ある」

予告状を見ながら、カミカタは秘策を皆に説明した。

「この寺から近くに人里があつて、そこに私の知り合いが2人いる。昔は妖怪退治に同行していた者だから、彼らの力を借りようと思っている」

「知り合いですか？凄いですね…」

「私達もそんな話聞いてませんけど…」

白連達は意外な秘密を知ってしまったことに啞然としており、カミカタが身支度をしに部屋の外へ出ようとした。

「僕もせっかくだから行きます！」

「分かった。ではついて来てくれ」

「はい！じゃあ行ってくるね、小傘ちゃん」

満も行くことを決めると小傘に手を振りながら部屋を後にした。宝塔を目的とする怪盗ディエンド。その正体は何なのか…？  
はたまた、満達は宝塔を守り切れるのだろうか…？



## 第21話「ようこそ命蓮寺へ」（後書き）

キャラクターナムサーン。

星蓮船キャラが一気に出てきましたが、ぬえがないのはどういうことかは気にしないでください。ネタバレなことだが絶対に出しますんで。

今回の話では幻想郷側のオリジナルキャラクターを登場させましたので、一応このキャラのことを言っておきましょう。

名前：カミカタ

年齢：35歳

命蓮寺に住居しているお坊さん（但し、ゲとかではない）。昔は別の寺で武者修行していたものの、老朽化によって倒壊したことから新しい場所を探していたところで命蓮寺に立ち寄った。

その後は星の宝塔の保管を交渉として住ませてもらうことになり、他の者たちからは『縁の下の力持ち』的な存在とされている。

強い霊力を持っており、妖怪の退治をしていたが意外な秘密もあるとか…？

ということですが新キャラのプロフです。

このほかにも幻想郷側のオリキャラが出てきますので期待してくればありがたいです。

とりあえずはリュウガ編はこれで終了！次回はそろそろ原作キャラでも出そうかとのことで誰が出るか…お楽しみにしてください！

## 第22話「忍び寄るW／火の氣と虫と緑の蛙」

その者は、2つの力を持つ者。

その者は、2人で戦う者。

その者は、2人で1人の戦士。

「行くぜ、フィリップ！」

「僕達は2人で1人の探偵さ」

風の吹く街を守り続けてきた青年、  
左ひだり翔太郎しょうたろう。

地球の知識を持つ運命の子、フィリップ。



翔太郎は自分の席でコーヒーを飲みながら一息ついている。それに対してフィリップは本に何かを書いている様子だ。

「珍しいな。フィリップが書き込んだところって全く見ないのに……」

「僕でも知らないことはいくらだってある。だからこうして残し、僕の新しい知識として使っているのさ」

「へえ……で、何を書いてるんだ？」

「一からのことでビギンズナイトや、ミュージアムやNEVER<sup>ネバー</sup>との戦いのこと、そしてディケイドやオーズとの共闘のことさ。どれもいい思い出だよ」

「……それ、日記の違いじゃなくてか？」

フィリップがやっているのはどう聞いても日記としか思えないと考えるが、本人はその気のつもりなので放っておくことにしよう。

「それに考えてみてよ翔太郎。別の世界にもたくさんいるだけじゃなくて、ガイアメモリとは別で変身する仮面ライダーがいるって……ディケイドもオーズもそうだが、きっと他にもいるに違いないんだ。そう思わないかい？」

「……多分な……あと、まさかと思うが……」

もはやかけ離れた状況で翔太郎は予感した。

「そんなことで僕は他の仮面ライダーのことを検索してみたんだ。するとどうだ、その数はWを含めてなんと100を超えているんだよ！僕の想像を超えた検索結果だ！ゾクゾクするねえ……」

フィリップは持っている本のページをめくり、あるページを翔太郎

に見せる。

「そしてこれが初代の戦士、仮面ライダー1号。もとはシヨッカーという組織が優秀な人間を改造して作り上げたはずだったが、失敗したせいで今後の敵ともなったことからが始まりだ。さらに進んでいくにつれてこの仮面ライダーBLACKでは、キングストーンと呼ばれる世紀王の証を持つ太陽の戦士されており、もう一つのキングストーンを持つシャドームーンとの激戦を繰り広げていたらしい……」

「この仮面ライダーブレイドでは人間が作り上げたライダーシステムによって、万物の始祖『アンデット』の力を具現化させて戦っているとの記録がある。融合計数の高さで強くなり、実際では融合変身との扱いにされているんだ……」

「仮面ライダー電王は、時空を走る列車『デンライナー』で過去と未来を渡り、イマジンと戦いつつ歴史を修正している戦士だ。イマジンは昔話を連想した怪物で、人の望みを叶えさせてくれる代わりに代償として思い出ある時間を使って悪事を働くのが目的だけど、中には電王に力を貸すイマジンもいるみたいだ。因みにイマジンは……」

「だああああーっ！！！！それ以上はやめろーっ！！！！」

翔太郎の限界が超えてしまい、フィリップのマシニングトークを顔負けのような声で収めるのであった。

「分かった！充分に分かったから勘弁してくれ！なっ！？なあっ！？」

完全にハードボイルドの欠片が1つも無い顔をした翔太郎である。すると玄関から誰かの声が聞こえ、そこへ女性がやってきた。

「翔太郎くん！フィリップくん！おはよう！」

「やあ、亜樹ちゃん。おはよう」

それは事務所長の亜樹子だった。今では『照井 亜樹子』と言った方が正論であるが…。

「新婚生活の調子はどうだい？」

「そりゃもう絶好調に決まってるっしょ！でも竜君が今朝から重要な調査があるって話で今は出かけているみたいだけど…」

「重要な調査？」

聞いていた翔太郎も亜樹子の話をさらに聞いてみると、亜樹子は1便の新聞を取り出した。

「これこれ、ここに今朝の内容が書かれてるのよ」

「どれどれ……ドッペルゲンガー事件？」

「えーっと…身元で確認された被害者のカメラにはなんともう1人の姿が映されており、その直後に殺害されたとの話である。近くにいた複数も被害に巻き込まれるものの、健在だった目撃者の話では『蛆虫の姿をした怪物を見た』と証言している…」

新聞の内容を読んでいたその時、フィリップは何かを閃いて本をめくり出した。

そしてそのページで止まった時に彼は動き出す。

「翔太郎！亜樹ちゃん！犯人の正体突き止めたよ！」

「えっ！？もう！？」

いつの間にしてたんだと言えるほどの顔で亜樹子がフィリップに顔を向けた。

「でも待てよフィリップ。ドッペルゲンガーで成立するドーパントと言ったら『ダミーメモリ』だろ？アレは前に壊したはずじゃ…」

翔太郎は逆に異議を申し出た。ドーパントとは地球のあらゆる記憶から作られたガイアメモリの有害分子によって怪人化した人間のことである。

そしてダミーメモリは嘗て亜樹子の父であり、翔太郎の師匠でもあった探偵『なるみ鳴海 そうきち宗吉』に化けた神父『ロベルト 志島しじま』が使用していた”あらゆるものへ擬態する”メモリであるのだ。

しかしこのメモリはディケイドと共に倒したメモリで、他にあり得るのかとは疑えることだが…。

「複数あるのならば、ダミーメモリを持つてたとしても何故蛆虫の姿をしなければならないと思う？普通なら本来の姿でいるはずだけど…蛆虫の姿こそが、奴の本来の姿。そうなればダミーとは違うメモリか…とも思われるがそうでもない」

「じゃあ、正体は何なんだ？」

「うん。その前にだけど、2人はこれを聞いて信じれると思うかが問題だ。何故なら相手は…ドーパントじゃないからだよ」

フィリップが最初に言ったのは予想外な事だった。

「ド、ドーパントじゃないだと！？」

「じゃあ何なの！？」

聞く気にいる亜樹子、そして翔太郎の2人にそのページを見せるフリリップ。するとそこには…。

「…ワーム？」

「そう。これがその正体だ」

何ともそのまんま過ぎる名前に2人の緊張感がどこかへ消えてしまった。

「本当にコレが正体なのか？」

「勿論さ。奴はカブトの世界に潜んでいる者で、元は宇宙から来た生物…すなわちはエイリアンさ」

「…は？」

「ええ…っ！？」

いきなりすぎることにリアクションをとる2人だ。

「っ、つまり、UFOで侵略しにきたってこと！？」

「UFOまではいかないが、今から35年も前に隕石に飛来してきたことが始まりだ。ワームの記録では人間の姿だけではなく、能力、記憶、癖などをそっくりそのままにコピーしてしまい、本物とは見分けがつかないくらいな高度な知能を持っているとされている。それに対抗すべくにワームのデータを元にしたマクスドライバーシステムを開発して戦っていたんだ」

「そんな話あり得るのかよ…」

翔太郎もこれには手も足も出せないくらいな事であるがその時だった。

「ギャオーン！」



「あ！あの声は…」

亜樹子はその方向に振り向くと小さい恐竜のメカがいており、自分で歩きながらテレビに近づいては電源を入れる。何かを見せようとしているのか、3人は映された映像を見ると数秒で驚くのであった。

『現在、未確認とされている怪物の群れが風都の商店街を進行中です。近くにいる住民の皆様には速やかに避難を行い、決して近寄らないようお願いいたします。もう一度繰り返します。』

それは臨時ニュースの内容で、二足歩行で動く蛹の姿をした怪物が大勢で商店街を歩いている光景だった。

「な、なんだよこれ！？まさかこれが…」

「そう、あれがワームだ。今は蛹状態だけど、成虫へ脱皮すると途轍もなく強いらしい」

「私、聞いてない…」

亜樹子は頭が狂いそうにしてショックを受けている。

「フィリップ、ということはだぞ…」

「ああ。照井 竜が危ない」

このままではやられてしまうと翔太郎が動き出した。

「亜樹子！絶対に照井を連れて戻ってくるから、外に出るんじゃないぞー！！」

そう言い残して事務所の外へ飛び出し、専用バイクである『ハード  
ボイルダ』のエンジンを起動。そして更に変身ベルトである『ダ  
ブルドライバー』を腰に付けた。

「フィリップ！変身だ！」

『ああ、』

以心天心に2人はガイアメモリを取り出し、スイッチを押した。

CYCLONE

フィリップは緑色で『C』のマーシをした風の記憶『サイクロンメ  
モリ』を。

JOKER

翔太郎は黒で『J』のマークをした切り札の記憶『ジョーカーメモ  
リ』を。

持ちながら同時に叫んだ。

「変身！」

まず最初にフィリップの元に現れていたダブルドライバーの右側のスロットへ差し込むと消えてしまい、フィリップの魂と共にメモリが翔太郎へ転送された。

一方で転送してきたメモリを差し込んだ翔太郎は左側のスロットにもう一つのメモリを差し込み、そのまま斜めへ押し倒すと「W」の形で起動を開始した。

## CYCLONE • JOKER

アクセルを入れると同時に風が翔太郎の周りで吹き荒れ、右に緑、左に黒の姿をした仮面ライダーWへと変身。そのまま現場へ急行する。

[illegible]

その者は、3つの力を持つ者。

その者は、全て守ることを望む者。

その者は、欲望と化した怪物と戦う戦士。

「決して助かる命が無いのは、何処も一緒だな！」

いろいろな国を旅してきた心優しき青年、火野<sup>ひのえいじ</sup>映司。

そんな彼に封印の力を授けたグリッド、アंकはその封印の力をこ  
う名乗っていた。

「それはオーズ。どれほどのモノかは、戦って見れば分かる……」

仮面ライダーオーズ。彼もまたこの世界に住む人間を守るために戦  
っている…。



「いくぞ映司。膨れ上がる前にやっていた方がよさそうだな」

「あ、ああ…（アंकが珍しく真剣だ…。それほどヤバいのか？）」

映司もアंकの後について研究所に乗り込むと、そこにはワームがうろついている様子があった。

シャッター前の陰に身をひそめて様子を見ている2人は静かに話し合う。

「アंक、あれってウヴァ…のヤミーだね？」

「いや、あのヤミーからはメダルの音が1枚もしない。メダルなしではヤミーは生成するのは無理だ」

「じゃあ、やっぱり別の…」

「とにかく倒さなきゃ先へ進めないようだから…映司、コイツでー掃しろ」

アंकが取り出すのは緑色のメダル2枚である。

「カダキリバで戦えってことか…よし！」

映司はいざ前へとワームの前に立ち向かった。

「待て！俺が相手だ！」

変身ベルトであるオースドライバーで腰につけ、先程渡されたクワガメダルとカマキリメダル、そして左腰にあるメダルケースからバツタメダルをセットしては右腰のオースキャナーでスキャンをした。

「変身！」

クワガタ！カマキリ！バッタ！  
ガーッタ、ガタガタキリッバ！ガタキリバ！

歌と同時に頭からクワガタのアゴ、カマキリの双剣、バッタの脚をした仮面ライダーオーズ”ガタキリバコンボ”へと変身。

振り向いていたワーム一同は映司に襲い掛かるが、対する映司はなんと10人程分身して迎え撃ちに出たのである。ガタキリバは分身能力を持っており、数多い敵にはもってこいのコンボだ。

「ハアアッ！」

カマキリソードでワームの体を裂き、たった一撃でワームを倒していくこと数秒で入り口にいるワーム全てを撃破した。

「あれ？思ってたよりは弱いような…」

何か違和感があつた映司は撃破した後に出ている緑の炎を見て疑った。

「とにかく奥へ進むぞ。あの男が今頃どうしてるかは分かったことだけだな」

「私が何か…？」

先に行こうと慕うアंकだが、2人の後ろに男が現れた。肩には不気味な人形を乗せたこの男こそ、ドクター真木である。

「真木さん！いつの間にいたんですか！？」

「伊達君が非常口へ案内させてもらったのでここまで来ました。彼はまだ奥で戦っていますので、行くのなら心していった方がいいで

すよ」

「デメエ、それはどういう意味だ…！」

アंकはイラ立ちながら真木に問いかけた。

「仰ったとおりです。グリードでもない怪物にオーズの力が通用するかは火野映司君、貴方の腕次第となります。もし通用しなかった場合には、その時が最期となるかもしれません…」

真木はそう言い残して出口へ去って行った。

「…とにかく、ここは伊達さんと合流しよう！」  
「チッ…」

舌打ちをしながらもアंकは映司と共に奥へ進んでいき、実験室までやってくる。

至る所にワームが動いている様子だが、そこに銃声が2人の耳に聞こえて立ち止まった。

「あの音って…」  
「映司、あれだ」

アंकが指を差した方向には、カプセルのようなベルトをした戦士『仮面ライダーバース』がバースバスターを手に放っている様子があった。

「伊達さん！」

映司はバースに変身している彼、伊達<sup>だて</sup>明<sup>あきら</sup>に駆け寄った。



「おお、火野か。もしかして此処の異変で来たのか？」

「アंकが火の気を感じたみたいなんで来たんですけど…これは一体何なんですか？」

「さあなあ…。けど、今やるべきことはこいつらを倒すことだ！」

## DRILL ARM

伊達はバースバスターを収めてバースドライバーの投入口にセルメダルを1枚投入。ハンドルレバー回すと中央のカプセルがパカッと開き、バースの右腕に音声どおりにドリルが装備される。

「ほいつと！」

近づいてきたワームを一刺しして押し返すと、ドリル攻撃を受けてしまったワームが爆発を起こして消滅する。

「またか…。このヤミーってさっきからメダルが1枚も出てこないんだよなあ」

（やっぱりヤミーでもグリードでもないんだ。じゃあこれはいったい…？）

とにかく倒すことを先決にして再び分身し、ワームを残らず撃退していく。

「おつ、それ結構便利だね。おかげでかなり減らせたよ」

1人で苦勞していた伊達もすっかり安心して残りワームを倒しにかかった次の瞬間、目の前にいるワームが突然変異を起こして体が裂

け、中から蜘蛛の姿をしたアクラネアワームへと変貌する。

「…蜘蛛になった…？」

いきなり姿を変えたたでに隙ができてしまい、それを逃さなかったアクラネアワームがクロックアップで伊達を攻撃、更に分身しているオーズを一瞬で撃破してしまい、本体の映司にもダメージを叩きつけるのであった。

「どわっ！なんだ…今の…！？」

映司も何が起きたのか周りを見回しながら焦り出す。

「何やってるんだ映司！しっかりしろ！」

「で、でも今何が…」

「今アイツは動きが速くなってるだけだ！このメダルで応戦しろ！」

アंकが黄色いメダル1枚を映司に投げ渡し、受け取った映司はすぐにバッタメダルをアंकからもらったチーターメダルに取り換えてスキャンを行った。

クワガタ！カマキリ！チーター！

スキャンが完了するとバッタレッグが黄色いチーターレッグへ変わった。ガタキリーターコンボ”になり、映司もアクラネアワームと同じスピードで追撃を始める。超高速の中で戦うのは始めてな映司には最初是不慣れで何処にいるかは分からないが、視野を何とかしようとメダルケースからタカメダルを取り出し、クワガタメダルと

取り換えてもう一回スキャンする。

タカ！カマキリ！チーター！

赤い鷹の仮面が変わった”タカキリターコンボ”になり、タカヘツドの視野でアクラネアワームを捕捉して攻撃にかかった。

「セイヤアッ！」

今度はよく見えるおかげでうまく当てることができ、今の一撃によってアクラネアワームはクロックアップから強制解除されて元の世界に戻る。

同時にチャンスだと映司はメダルを入れ替えずにオースキャナーでスキャンする。

スキャニングチャージ！！

標的に向かって突進し、通り過ぎる際にカマキリソードで胴体を一閃。アクラネアワームはコアチャージアタックを真正面から受けて爆死してしまうのであった。

「よし！これで…」

見事ワームを全滅して研究所の危機を阻止した映司と伊達は変身を解き、伊達は映司に近づいて礼を言う。

「いや、おかげで助かったよ。けどこいつらからメダルが1枚も貰えないのは残念だけだな…」

「何を言う！お前が勝手にセルメダルを横取りしているおかげでこっちは1枚も貰えてないのだぞ！」

アंकは伊達に怒鳴りつけるわ、舌打ちをするわでイラ立った。そもそもアंकは右腕しか実体のないグリッドで、戻るには大量のセルメダルや自らのコアメダルを取り込まなければいけないのであるが、ヤミーの撃破をした後に伊達がセルメダルを全部持って行っていることでいまだに実体を取り戻してはいない。

寧ろグリッド達にセルメダルは体を保立てさせるためのエネルギーでもあるのだ。

「俺達がここにいなかったらお前が全部横取りしやがってたんだぞ！！許すわけがない！！」

「痛い痛い痛い！！アंकやめろって！！」

「俺はアंकだ！！」

このように仲の悪い2人に映司は止めに出てアंकを抑えたその時、何処からかカシャカシャと何かの音が聞こえてくる。

さらにピロロソツと電子音も聞こえ、携帯か何かの音だろうかと思われたのだがそうではなく、3人の足元になんと蛙のメカが止まっているではないか。

「カンド…ロイド？」

映司は蛙メカを拾って調べてみる。缶からの形をした蛙のカンドロイドではなく、何かのメモリが刺さったようなモノだと把握し、蛙の頭の上にある緑のボタンを押したその直後、

『この録音を聞いている火野さん、そしてアंकさん。お話があります』

「うわぁっ!？」

なんと蛙が喋り出してしまい、火野はびっくりして蛙を落としてしまった。

落ちた蛙は反転しながら着地して会話を続ける。

『今すぐ――へ来てはくれないでしょうか？そこで俺から貴方達に会いたいのでお願いします。飲み込めれる状況ではないですけど、これは非常事態な事なんです。どうか、俺の指示に従って来てください。お願いします』

そして音声が止み、蛙はピクリとも動かなくなってしまうのであった。

「何なんだこれ…?」

「けど、なんか火野とアンコに会いたいそうだぞ?」

「だから俺はアंकだ!」

他でも録音を聞いていたことに気になっているようだ。

とりあえず向かうことがいいだろうと、火野は蛙を拾って先程説明を聞いた場所へ行くことを決意する。

「これに従ってみよう!この声の主と会えるのなら、行つてどうい

「うん、何か聞けば……」

「だが待て映司、何故俺達を呼ぼうとしている？もしかするとさっきの奴等みたいに罫を仕掛けてるのかもしれないんだぞ？」

アंकはそれに反対していた。確かに何者か知らない声であり、何よりも2人の名前も知っているということは何か怪しいことである。

「けど行つて確かめるのが手っ取り早いのなら、俺はなおさらさ。とにかく行こう!」

「じゃあ俺も、付き合ってみますか」

伊達も行くことになり、アंकは抵抗もなく賛同して研究室を後にして向かいに行くのであった。

[illegible]

商店街。

ここでは先程臨時ニュースにより進行中のワームが動いており、その中に紛れて戦っている者が1人いた。

赤いボディにバイクハンドルをしたベルト。そのベルトには「A」のマークをしたガイアメモリを挿している仮面ライダー。

彼は『仮面ライダーアクセル』、そしてその変身者は亜樹子の夫である照井 竜だ。

「なんて数だ…せめてここにWが来てくれるのなら幸いだが…」

今の彼は苦戦していた。実は戦っている相手は蛹を含め、更に親玉らしい蛆虫の姿をした『ベルバーワーム』と『ベルバーワーム ロタ』がいるのである。

「この世界にも仮面ライダーがいるとはいえ…」

「俺達に勝てると思ってるのか？ たった1人で…」

「くっ…俺に口答えするなあっ…！」

アクセルの仮面が光り、物凄いエキゾーストをあげながら専用武器『エンジンブレード』のグリップを握る。

ELECTRIC

ブレードに電流が流れだしてワームへ突撃する照井。ところが次の瞬間に2体のベルバーワームが消えてしまい、そのままアクセルの装甲火花が散り出した。

「ぐああああっ…！」

ダメージを受けた照井が怯み、2体が姿を現して嘲笑いをするのであった。

「さっきの威勢は何処に行ったんだ？」

「クロックアップを持たない者など、俺達の敵ではない…」  
「ク…クロックアップだと…？」

照井はブレードを地面に指して杖代わりにしながら立ち上がろうとした。

「知らないのか？知らないなら見せてやるよ。オラァッ！」

ベルバーワームがまた消えてしまい、照井に一発殴り倒しては元の場所へ戻った。

「どうだ、これがクロックアップだ。俺達は人間より遙かに速く走れる能力を持っているのだよ」

「まあ、ZECTの奴らは厄介だけどな…」

また笑い出す2体だが、ここで状況がひっくり返る出来事が起きるのであった。

「そいつはどうか…？」

照井はまた立ち上がり、ブレードを地面に差したままでベルトに挿しているアクセルメモリを引き抜いた。

「この状況で負け惜しみか？」

「その逆だ。お前はさっき、早く走れる能力を持つと言ったな…。それなら話は早い」

そう言って照井はストップウォッチと信号機が混ざったアイテムを取り出す。



「たとえ相手も足の速い奴だとしても俺は…」

「全て…振り切るぜ!!」

## TRIAL

ストップウォッチの下にはメモリとなっており、それをベルトに挿しこんで起動した直後、信号機の赤が点滅し、次に黄色が点滅した瞬間にアクセルが黄色いボディとなり、最後にスタートの合図の青へと点滅すると青く、モトクロスのヘルメットをした『仮面ライダーアクセルトリアル』へ強化変身する。

「フンッ、色が変わったからといって何も変わりはない…グハアッ!」

ベルバーワームは余裕そうにしていたのだが、言い切る直前で真正面から殴られる衝撃を受けて突き飛ばされてしまう。

「な、なんだ!? 今何が起きたんだ!?」

「何処を見ている? 俺はこっちだ」

真後ろから声が聞こえて振り向くと、挑発をしている照井の姿があった。

「貴様、いつの間に後ろへ…!?!」

「俺に質問…するなっ!!」

するたどうだろうか。照井は物凄いスピードでベルバーワームにブレードで切りつけて通り過ぎたのである。

「バカな…貴様もクロックアップができるのか!？」

「何度も言わせるな。俺は全てを振り切る仮面ライダー…仮面ライダーアクセルだ!!覚えておけ!!」

## ENGINE MAXIMUM - DRIVE

エンジンブレードにエネルギーが加えられ、さらに刀身の長いブレードへと増幅していく。それを見て2体は逃げだそうとしたがそれを逃さない照井はブレードをフェンシングの構えをとりながらベルバーワーム ロタへ突き出すと、刀身から『A』の形をしたエネルギーの刃が放出して相手に直撃。必殺技である『エースラッシャー』を受けた直後に爆発してベルバーワーム ロタが消滅してしまった。また、ベルバーワームは爆風で足をすくんで倒れてしまい、逃げ遅れとなったその身で照井に向く。

「き…貴様よくも……ん？」

その時か、ベルバーワームは照井の奥の方に見えているサナギワームの様子を見た。

そして確信を持つように突然と笑い出す。

「どうした？何が可笑しい？」

「別に可笑しくも無い。確かに貴様は速いようだが…俺達の数が多い

いのならどうか！？」

その言葉に照井はまさかと思いつつ後ろを振り向くと、サナギワームが一斉に脱皮して成虫体に変貌。そして一斉にクロックアップで動き出した。

「何……！？」

これには照井も驚いて場を離れようとするが、先回りするワームによって妨害されて離脱ができない。

確かにワームよりも速さに自信のある照井でも、こうもな相手には骨が折れる相手であろう。そうなればやられてしまうのも時間の問題か……と思われていたが、

## CYCLONE・TRIGGER

「！？」

照井が聞き覚えのある音を聞いた瞬間、ワームに緑の弾丸が次々に当たっていく光景を目の当たりにした。

そして嵐の如くに一台のバイクが突っ込んでくる。

「左！フィリップ！」

そう、翔太郎とフィリップが変身している仮面ライダーWだ。

翔太郎はハードボイルダを巧みに操りながらワームを引き飛ばす。

「照井、その場から離れてろ！」

翔太郎がそう言うとワームから距離を空け、ダブルドライバーにさせられているトリガーメモリを引き抜き、武器であるトリガーマグナムのマキシマムスロットにさし込んだ。

# TRIGGER MAXIMUM - DRIVE

「トリガーエアロバスター！！」

2人同時に声を掛けて引き金を引いた瞬間、先程放った弾よりも速い速度でワームに連射して撃退していく。そのおかげでワーム数が半分にまで減り、照井は超高速で射程内から脱出して翔太郎の元へとやってくる。

「すまない、助かった…」

「女からの頼みで来たんだからそう易々とくたばらせるワケないじゃないか。とはいえ、こいつら足速すぎる…」

『翔太郎、あれはクロックアップだ』

「あ？くろつくあっぱ？」

『ワームは擬態することができるんだけど、成虫体に脱皮すると高速移動ができるようになるんだ。さっきのマキシマムドライブでは数が多い為に当てやすかったけど、単体の場合ならナトリガーで当てるのは極めて困難だ』

「その話、俺もあの蛆虫から聞いたところだ」

「なるほど、だからアクセルトリアルになってるわけか…。って

か、あれが今回の事件の犯人か」

「そついうことになる」

クロックアップしているワームは一斉に止まってベルバーワームの周りに集まり、その親玉はギチギチと音を立てながら言いつけに出る。

「貴様、仕留めれると思っていたところで出てきやがって…何者だ！！」

「俺か？俺は…いや、俺達は2人で1人の探偵さ」

『そして、この町を守る仮面ライダー…W』

「さあ、お前等の罪を数えろ！」

左手をベルバーワームへ向け、お決まりの言葉を口に出すWに対してベルバーワームは怒りを沸騰させる。

「おのれえ…こうなれば2人まとめてあの世に…！」

「そういかせるわけにはいかねえよ。フィリップ、エクストリームだ！」

『分かった』

## CYCLONE・JOKER

翔太郎はトリガーメモリからジョーカーメモリに入れ替えてサイクロンジョーカーになると、頭上から一羽の鳥が現れた。

実はこの鳥は、Wが地球との完全リンクによって究極のダブルへ進化させる変身ガイア鳥『エクストリームメモリ』であり、このメモリの中にあるデータベースにはフィリップが転送されている。これを使うことによって翔太郎とフィリップは完全一体のWとなって戦い、フィリップの検索にも大幅なデータを収集することが可能であ

るのだ。

翔太郎の真上にやってくると、メモリを抜き取ったダブルドライバ  
ーへ一直線に降下してセット、そして展開されたことにエクストリ  
ームメモリが『X』の形となって起動される。

## X T R E M E

七色の光にダブルの中央にあるセントラルパーテーションが広がり  
横3色の仮面ライダーW・サイクロンジョーカーエクストリームへ  
と変身した直後に中央のクリスタルサーバーからプリズムビッカー  
が出現。プリズムソードに黄緑でアルファベットの「P」が表示さ  
れた「プリズムメモリ」を挿し込み、シールドの端にある4つのマ  
キシマムスロットへガイアメモリが挿されていく。

それを見ていたワームもさせぬまいと動き出すが、照井はトライア  
ルメモリを引き抜いてストップウォッチのカウンタをスタートする  
と、ワームよりも数倍の速度で動き出してワームと応戦する。

その一方でWは4つのメモリ、サイクロン、ヒート、ルナ、ジョー  
カーのメモリを差し込み終えてマキシドライブを一斉に発動。シー  
ルドから七色の光がチャージされ、照井はそれに気づいてワームか  
ら一時離脱し、ストップウォッチを押した。

## T R I A L   M A X I M U M - D R I V E

「行くぜフィリップ！これで決まりだ！」

「「ビッカーファイナリュージョン！！」」

「絶望がお前達の……ゴールだ」

[illegible]

現在彼らは目的となる建物へと来ていたところだった。

「にしてもよくこんな場所を知ってたんだな、後藤ちゃん」

とはいえ…

「頼まれたつてのは、コイツの主にか？」

アンの質問に後藤は頷いた。

「…さあ入るぞ。彼が待っている」

後藤が先頭で建物の中へ向かい、火野達も向かいに出た。

そんな彼らがこれから入っていくその建物には、招き入れるようにして立札も書かれていた。

『鳴海探偵事務所』と…。



## 第22話「忍び寄るW／火の氣と虫と緑の蛙」（後書き）

作者です。

ついに原作キャラが出せたことにスッキリしつつあります。

今回のWとオーズに関してはMOVIE大戦COREの後日談として、Wでは亜希子と照井が結婚。オーズではタジャドルコンボが可能状態でありつつ、微妙に伊達さんと出会っているという設定になっています。

普通ならここで何か話したいことがあるのですが何も言うことがないなあとのことで下記より次回予告風なことをとりあえず書いておいたりして（笑

〓 次回の東方仮面録は… 〓

「今翔太郎君とフィリップ君が近くにいますね、帰ってきてほしいんだけど、いい？」

「一体何の用があるってんだ…？」

亜希子からの電話に3人が戻ると、彼らにオーズとの再会と起きつつある謎を目撃する。

「お久しぶりです、照井さん、伊達さん。そして初めてお会いにな

ります、翔太郎さん、フィリップさん、火野さん、アंकさん」

彼らを知っているこの男は何者なのか…！？

「この世界は今、財団Xよりも、グリードよりも恐ろしい事が起きようとしているんです。このままでは世界が滅ぶことも…」

「ということは、奴らは何者かによって動かしているってことか？」

そして、さらなる強敵がWとオーズに襲い掛かる…！

「お前さんがこの世界のオーズとグリードだっけ？やっぱりこっちじゃあ全然環境も強さもちがうもんだねえ…プププッ」

「お前等を倒し、ライダーの力を全部いただくぜ…！」

この強敵に彼らは再び力を合わせて立ち向かう！

次回、「Oの再会／裏世界とカジキと鍵の記憶」。

これで決まりだ…！！

## 第23話「Oの再会／裏世界とカジキと鍵の記憶」

ワームとの戦いを一通り終えた翔太郎とフィリップ、照井は公園で体を休ませているところだった。

そうしている間に照井は亜樹子に電話をしようとビートルフォンで通話を待っていると、相手である亜樹子の声が聞こえた。

「所長。俺だ」

『あ、竜君！ニユースで心配になってたけど大丈夫？』

「ああ。左とフィリップに助けられたのだから怪我はない」

『そつかあ…あ、そうだ！今翔太郎君とフィリップ君が近くにいるならすぐに帰ってきてほしいんだけどいい？』

「何だつて？それはどういうことなんだ？」

『さつきね、フログポッドに翔太郎君達へのメッセージがあったの。依頼人みたいだけど話があるみたいだつて』

「分かった。すぐに戻るとしよう」

照井は通話を切って2人に話しかけた。

「左、フィリップ。さきほど所長から事務所に戻って来てほしいとの話があった」

「亜樹ちゃんがだつて？」

「いったい何の用があるってんだ…？」

翔太郎はどういうことなのかと照井に問う。

「依頼人からのメッセージを受け取っているらしい。とはいえ依頼人はまだ来ていないみたいだが…」

「依頼人かあ…まあ、依頼を聞くのも探偵の端くれだ。早速向かう」

とするか」

「じゃあすぐに戻るとしよっ」

こうして三人はバイクに乗り込み、すぐさま探偵事務所へと急ぐのであった。

この時に彼らは、運命に操られたかのようにして会うことになる。

あの戦いからお互いに手を取り合った戦士との再会を……。

[illegible]

その一方でこちらはオーズ側。後藤は鳴海探偵事務所の面へとやってくると呼び鈴を鳴らす。

「はい！」

ドアの向こうから所長である亜樹子の声が聞こえ、ドアが開くと同時に彼女の顔が現れた。

「あれ？もしかして依頼人？さっきこのメッセージを私に預けてくれた依頼人って…」

亜樹子は蛙の形をしたメモリガジエットの1つ、『フロッグポッド』を取り出して後藤と、その後ろにいる映司達に見せると、映司は「あ!」と驚きながらフロッグポッドに指を差すのであった。

「その蛙、俺も持ってます！」

映司も同じフロッグポッドを見せると、形もまったくもって同じであり、録音内容も亜樹子が聞いていたのと同じ内容だった。

「ど、どういうこと！？私聞いてない！！」

「とにかく中に入らせてもらいたい。このメッセージでは鳴海探偵事務所に来てくれとのことここへ来たわけだ」

面で立ち話をしているわけにもいかない亜樹子は、つじつま合わずな顔で火野達を事務所へ入れる。

「唐突な事で悪いが、そのメッセージの主からの頼みで彼ら連れしてきた」

「つまり貴方は依頼人との関係ある人ってこと？」

「ああ。どうせなのでこっちの名前を言っておく。俺は後藤 慎太郎だ」

後藤は火野達にも名前を名乗ってもらおうように言うが、アंकの性格のせいでどうも気に食わない顔で後藤へ文句を言う。しかしそれは火野と伊達に止められ、収まったところで火野が名乗りに出た。

「えっと、火野 映司です。よろしくお願いします」

頭を下げてながら自己紹介する映司に対し、アंकは逆に上から視線な感じで名乗りに出る。

「俺はアंकだ。言うことは特にない」

「伊達 明だ。よろしくっ」

伊達だけは爽やかな表情でありつつ、シュツとポーズをとりながら

挨拶をする。

「じ、じゃあ私も…この鳴海探偵事務所の所長を務めてる亜樹子です。よろしくお願いします」

「所長？というより、君どこかで…」

火野は何か顔見知りがあるかのようにして亜樹子に話しかけた直後、再び「あ！」と驚きながら閃いた。

「そうだ！君って確か、数日前に会ったことがあったんだっけ」

「え？」

「だからさ、何か仮面ライダーが嫌いとか…そんなことを言ってたよね？」

「…あ！ひよつとして！」

これを聞いて亜樹子も思い出した様子である。

「なんだ火野、彼女と知り合いか？」

「はい、前にWって仮面ライダーと一緒にいた人です。ということですけど、こっつてWがいる事務所ってことですよ？」

「うん。ここでは他に翔太郎君とフィリップ君がいるの！私の助手よ！」

なんと予想できない事が起きてしまった。以前、共に戦ったあの仮面ライダーWと対面できるなんて…。

「あの！その2人は今どこに…」

「さっきからでしょ！やり過ぎだ映司。…それはともかく、このメッセージの主は今どこにいる？」

アंकは気になっていたメッセージの主の所在を亜樹子に質問する。

「その人はまた来てないって話だけど…」

「何だと？」

「いやだつて、急にフロックポッドが現れてこのメッセージを受け取ったの。翔太郎君とフィリップ君、そして竜君に話があるって」

「ん…後藤ちゃん、確かその人からの頼みで俺達を連れてきたのならどういことが分かるよね？」

「できるなら揃った時に話すと言っていた。だから彼ら（Wとアケル）が来ない限りは…」

「あ、大丈夫！もうすぐ事務所に戻ってくるって！」

亜樹子がそう言った直後、玄関から彼等がやってきた。

「よう、戻って来たぜ」

「所長、心配かけてすまなかったな」

「…ん？あの人ひょっとして…」

戻つてすぐにフィリップが映司を見て反応した。

「オーズじゃないか！久しぶりだね！」

「ど、どうも…」

映司は亜樹子の時と同じようにして頭を下げる。

「フィリップ、彼とは知り合いか？」

「ああ。僕達に力を貸してくれた仮面ライダーさ。NEVERの時から知り合っている」

「それにしては…見慣れない連れもいるみたいだが」

翔太郎はアंकに近寄ってそう言うが：

「なんだ、これを見て分からないとでも言うのか？」

アंकの右手が赤い籠をした右手に変わり、翔太郎がそれを見た瞬間にびっくりしながら後ろに下がる。

「ちょっと待て！！お前まさかあの時の！？」

そう。仮面ライダーコアを倒す策としてマグマの底にある原石を破壊する前に”右腕だけ”のアंकが3人の前に現れ、翔太郎は「ギヤー！」と悲鳴を上げていたとか…。

因みにこの右手こそが彼の正体で、人間はクスクシエで働いている『泉 比奈』の兄である『泉 信吾』を借りているのだ。だがアंक曰く、彼は瀕死でいることから取りついていないと10分持たずに死ぬらしい。

「フンッ、それだけは覚えているらしいな…。俺はアंक。この右手自体が俺の正体だから気にするな」

「いや、それを言ったらもつと気になるんじゃない…」

映司はそういつて話が積み重ならぬようにと3人に言った。

「…一応名前も言っておきます。俺は映司、火野 映司です」

「ああ。鳴海探偵事務所の探偵、左 翔太郎だ」

「僕はフィリップ、翔太郎のパートナーさ」

「こちら名乗っておく。ガイアメモリ超常犯罪捜査課並びに、風都警察警視の照井 竜だ」

翔太郎は探偵の礼儀として名刺を英次に差し渡し、照井は自分の警



察手帳を見せて自己紹介をする。

「探偵と警察か……。あ、俺は伊達 明だ。よろしく」

言い忘れるところだった伊達も名乗り出て、ようやく全員がそろったかのようにして玄関からまた別の者がやってきた。

現れたのは青い髪色に横半分で白と黒のカラーリングをしたTシャツに藍色のジーンズをした青年であるが、首には何故か南京錠を吊り下げているアバウトなネックレスを付けている。

「！ お前は……」

「あれ、河ちゃんじゃないの」

そんな彼を見た照井と伊達がいち早く彼に言った。

「お久しぶりです、照井さん、伊達さん。そして初めてお会いになります、翔太郎さん、フィリップさん、火野さん、アंकさん」

青年はお辞儀をして一同へ寄った。

「あの、後藤さん、まさかだけど……」

「そう、彼がメッセージを送った主だ」

「それでお前は何者だ？ 何故俺達をここへ呼んだ？」

アंकが問いかけようとするが、伊達が代わりとして説明しようとする前に出る。

「こいつはね、後藤ちゃんと同じ鴻上ファウンデーション所属の人なんだよ」

伊達が言うには、彼は後藤と同じライドベンダー隊第2小隊長して活躍している青年だと言うが…

「ちょっと待て」

その話に照井が口を挟んで言う。

「俺の話では、彼は俺にアクセルドライバーとメモリを開発してくれた者だと聞いている」

「大企業の社員にアクセルの開発者？君はいつたい…」

フィリップは青年に何者かと問いかけた。

「名前は河城<sup>かわしろ</sup> 一樹<sup>いつき</sup>です。お察しの通りに鴻上ファウンデーションの社員であり、ガイアメモリを開発した生みの親です」

彼が名乗り出た先に語られたのは、ガイアメモリの生みの親という言葉だった。

生みの親ということはつまり、ミュージアムの一員ということかと思われるのだが…

「Wの方々には俺を疑うでしょうけど、俺はミュージアムの者ではありません。分かりやすいように、ガイアメモリの秘密を簡単に説明させていただければ理解できるかと」

「ガイアメモリの秘密だと？」

「はい。…実はというと、ガイアメモリは危険な道具ではなく、元は製品等に使用する特殊なアイテムなんです。そんな役立ちに設計を行ってましたが、そこをミュージアムの襲撃でデータを盗まれてしまい、今のようなドーパントが生まれるようになりました。そこで対抗するにあたって、有害分子をなくして力を引き出すシステム

仮面ライダーを俺は発案して作り上げました。その時、当初に作り上げたのが今では亡き探偵、鳴海宗吉さんが変身していた仮面ライダースカルです」

「お父さんと会ったことがあるの…？」

亜樹子は驚く。宗吉は10年以上も前に死んでいるので、この若さなら一樹は幼少くらいに容姿だ。

こんな青年があの名探偵と会っているのはあり得ない。

「それでも俺はメカニックの天才です。その後はスカルでは越えられない敵に対応するため、2つのメモリを同時に引き出す仮面ライダーWを開発しました」

「何だつて！？じゃあおやっさんが持っていたあの物つて…」

翔太郎は嘗て、フィリップの救助の依頼で活動していたあの日、宗吉が持っていた物のことを思い出していた。

「はい。あの中身にあったダブルドライバーとガイアメモリ、そしてフアングやエクストリームも全部俺が開発しました。それから後に、照井さんが言っていた仮面ライダーアクセルやトリアルメモリを開発したということなんです」

なんだか知ってていいものかと思うくらいに笑顔でいた一樹は本題へ移りにでる。

「皆さんをここへ呼んだことですが…Wとアクセルである3人には今回の事件を聞いてますか？」

「ドーパントではない怪物のことか？それなら解決している」

照井はそう言った瞬間に映司が彼へ質問した。

「あの、さつきから言っているドーパント…って、なんですか？」  
「ドーパントというのは、ガイアメモリの有害物質によって怪人化した人間のことだ。俺達はそう言った奴らを追っているが今回はそうではなかった。虫みたいな奴等が暴れてたものでな…」  
「虫だと？それなら俺達も見ただぞ」

アंकもその者を目撃していると話すが、一樹に止められて話を再開した。

「…実は、貴方達が戦っていたのは、ワームという別世界の怪物です」

「え？ワーム…？」

映司はどういうことなのか分からずにいた。

「そちらでは昆虫系のグリードがいるでしょうからヤミーと思いがちでしょうけど、実際では違います。奴らは人間に擬態する能力を持ってるのです。いうなれば…」

ここから先は長いので話を飛ばすことにしよう。

そして…

「ようやく理解できた。どおりで足が速いというわけだな」  
「しかし別世界の怪物かあ…あり得ないけど事実だもんな」  
「そんな皆さんに言っておきたいことがあります。この世界は今、

財団Xよりも、グリードよりも恐ろしい事が起きようとしているんです。このままでは世界が滅ぶことも…」

「滅ぶだって？どうしてなんだい？」

「ワームは確かに別世界の者であって、滅ぼす企みはありません。ですが、これを調べた結果で別の者との手先としてそれぞれの世界に襲撃をかけているらしいんです」

「ということは、奴らは何者かによって動かしているってことか？」

「はい、そうです」

「じゃあ、そいつ等はいったい…？」

ワームの行動に関しての有力な話をした後に、一樹は今回の真相を一息置くと話し出した。

「今回の敵となるのは、全ての世界から集められた巨大組織…その名もシヨッカーです」

「シヨッカー…もしかしてけど、」

その答えにフィリップが何かを思いつき、ある本を見せた。

「このページにある、1号と2号の敵である組織のことかい？」

「そうです。ですが、それよりも遥かな力を得た組織、スーパースヨッカーが今回の敵となっているんです」

「な、何か安っぽいネーミングのような…」

「でも強さは別格です。ミュージアムよりも優れた科学力だってあるのですから」

「そんな奴が相手ならかなり危険な存在ということか…では、そのために俺達が止めてもらいたいということか？」

「いえ、話ではほかのライダー達も阻止すべく二戦しているのと、増強するためにこちらへ訪れたのが俺の理由です。できるならここに残ってもらいたいライダーもいますが…」

一樹はその先も考えていた。4人が向かうことになれば風都から離れてしまふことになり、無防備な街と化してしまえばいずれにやられてしまふことも……。

「つまり河ちゃんと言いたいのは、この危機を阻止するために力を貸してほしく、組織の進行を阻止するべくに戦ってもらいたいと……」

「そうですね。俺の考えでは、Wとオーズがスーパーショッカーの元へ、アクセルとバーズは風都を防御することを勧めてます」

「それなら話が早い。左、フィリップ」

照井は翔太郎とフィリップに顔を向けて言った。

伊達は照井が言った話に疑問を抱いていた。

「これは緊急事態だ。何にせよ行動しなければならぬ」

「んゝまあいいか。だつたら付き合つしかないよな」

「……とりあえずは決まつたようですね。一刻も早く向かうとしまし  
よう」

一樹はそう言うが、翔太郎はそんな彼へ次の質問をしたのであった。

ワームとの戦いを終えて一同が一休みをしているのも束の間のこと、新しい刺客がこの風都の地にやってくるのであった。

「……間違いない、この世界に奴がいるぜ」

「久しぶりに会うもんだねえアイツと。プププッ」

そこには二本足で歩いている鍵の体をした怪人と、両手で口を押えながら笑いをこらえているカジキの怪人が風都の町中を歩いており、鍵の怪人はダウジング（何故か鍵の形をした奴）で何かを探しているかのようになっている。

「ところでだが、お前が生み出していたヤミーはどうしている？」

「あー、アレならもうとくに孵化して活動を始めてる頃だからすぐにあいつと戦える状態さ。半数はリートの所へ行つてメダルの寄付でもつて、残り半数はバックアップってね」

「グリードもやるモノだな…っと、言ってる傍に来たようだがぜ」

「おお、ついにか！」

2人が目的の建物にたどり着くと人間の姿になり、鍵の怪人に変身していた人間は建物の入り口に近づくとインターホンに指を乗せるのであった。

[illegible]

ピンポン

探偵事務所にインターホンの音が鳴る。

「あれ？また依頼人かな？」

今日は多く来ると、亜樹子は再び玄関へ足を運ぶ。

玄関の取っ手を捻って戸を引きながら開けるとそこには見知らぬ男性が2人立っているのだが、一樹は男性の顔を見た瞬間に危機感を悟ったのか、真剣な顔へと変わるとすぐさま亜樹子の元へ走り出した。

「亜樹子さん！離れてください！」

「えっ！？」

一樹がそう言うのと、男性へ殴りにかかったのであった。

見ていた翔太郎達も豹変した一樹に驚くが、何よりも照井がいち早く動きに出る。

「所長！大丈夫か！？」

「え！？何！？今何が起きたの！？私聞いてない！！」

亜樹子は何が起きたのかさっぱり分からずにパニック状態へ。一方で一樹は男性を玄関から追い出してひたすら殴り続けているが、いったん止まったところで一樹が男性へ問いかけにでる。

「あれから800年も経つというのに、まさかここまでやってくるとはどういうことなんでしょうか！カシス！」



一樹は左側の男（カジキに変身していた男）にそう言った直後に男、カシスは応えにでた。

「やあやあ、久しぶりだなあ一樹い。プププツ」

カシスは笑いながらでそう返事するが、見ていた照井と亜樹子はどいうことなのか全くわからずに眺めている。

翔太郎達も外へ出てくると、今起きているこの光景に何を言ったらいいのかと、啞然とした状態が続くのであった。  
が、ただ1人だけは冷静に把握をする。

「…なるほど、あいつはグリードか」

「え…？」

映司はアंकに顔を向けた。

「1人はコアメダルの気配を感じるが、メズールと同じコアメダルを感じる。そしてもう1人はどうも生身の人間でありながら、恐らくは欲望の持ち主だろうな」

「同じって…メズール以外にも同じ種類のグリードがいるってことなの！？」

「それはあり得ない。俺が800年前にいた海類系のグリードはメズールだけだったからな」

「そ、そんな…じゃあなんでこの場に…？」

「あいつは真のグリードです！」

映司とアंकが話し合っていると、一樹が2人に大きい声で言う。

「あいつはこの世界にいるグリードじゃないんです！俺のいる世界、幻想郷に住みついていて真のグリード…カシスなんです！」

「別世界のグリード…？真ってどういう…」

「言うなれば、俺達よりも強いグリードか…フンッ、あの野郎も舐めた口を叩くじゃねえか」

鼻で笑ったアंकと理解しづらい映司だが、カシスは一樹から2人に視点を変えた直後に笑いながら話掛ける。

「やあやあ、お前さんがこの世界のオーズとグリードだっけ？やっぱりこつちじゃあ全然環境も強さもちがうんだねえ、特にそのグリードもなんだかしよばいほどの力かなさそうだし…プププッ」  
「いきなりそんなこと言っちゃダメだろ。そっちも同じことなんだし…（ニヤニヤ）」

「んだと teme エッ！？言わせておけば…」

「アンコ！ストップストップ！」

アंकは今の言葉に頭にきて殴ろうとしたが、伊達と後藤が取り押さえて映司がカシスに問い返した。

「そりよりも、どうして俺がオーズだって知っているんだ？」

「そりゃあ話を聞いているからだよ。因みにだけどさ、そこにいる彼（一樹）も実はオーズなんだよ」

その言葉を聞いた映司は一樹に振り向いた。

「君が…オーズ！？」

「カシスの言うとおりです。俺は元オーズで、あいつ等や、アंक達を封印した張本人です」

「まあでも、出られて暫くは遊びたかったんだけどねえ…これは仕方ない話なんだよ」

「俺を殺す気で？」

「そういうことなんだよね。プププッ」

そういつとカシスの体がメダルへと変わり始め、もう一人の男はUSBメモリを取り出してスイッチを押した。

「あれって、ガイアメモリ!？」

「そうだ。俺はグリードと違ってドーパントってことだ」

KEY

ガイアメモリが起動して左手に差し込むと、鍵の姿をしたキードーパントへと変身。一方でカシスもカジキの姿をしたグリードへと変わり、一樹に襲い掛かってきた。

鰭の刃と鍵型の剣をうまくかわした一樹はバックステップで距離を空ける。

「お前等を倒し、ライダーの力を全部いただくぜ…!」

キードーパントは剣から鍵型の銃に持ち替えて一樹を狙撃。当たってしまふとの所で一樹の前にファンゲメモリが現れ、弾をはじくとフィリップの元へ駆け寄った。

「大丈夫かい？」

「すみませんフィリップさん。自分の作ったメモリに助けられるなんて…」

「気にするな。今はこいつらを止めるのが先決だ」

翔太郎はすぐにダブルドライバーを腰につけ、フィリップにもダブルドライバーを装着させると同時に、フィリップは手に乗ったファンゲメモリを変形してメモリのスイッチを押した。

FANG

「翔太郎、いくよ！」  
「ああ、相棒！」

JOKER

翔太郎もジョーカーメモリーを起動して同時に叫んだ。

「「変身！」」

FANG・JOKER

翔太郎がメモリを差し込むと、何と消えてフィリップのダブルドライバーへ転送され、フィリップはジョーカーメモリーを差し込んだあとにフングメモリを差し込んでドライバーを展開し、更に本体を折り曲げて恐竜の形にする。

するとフィリップが白と黒で鋭利な姿をしたWへ変身し、翔太郎はメモリと同時に魂を転送されたことにより倒れる。

「え！？左さん、どうしたんですか！？」

映司は急に倒れたことに驚いているが、Wの左目が光りながら翔太

郎の声が出てくる。

「今俺はフィリップと同時に変身しているんだ。Wになるにはそうしないといけないんだよ」

「そ、そうなんですか!？」

「なに納得してる。お前もすぐに加勢しろ」

アंकはさっさと戦えと言わんばかりにいちやもんをつけており、映司はすぐにオーズドライバーとメダルをセットしてスキャンを行った。

「変身!」

タカ!トラ!バツタ!

タ・ト・バ!タトバ、タ・ト・バ!

映司もオーズへと変身。そうした直後に亜樹子が「おおっ!」と上手い反応したのは気のせいとしておこう…。

「こういう時は、助け合いか?」

「俺に質問するな。今は倒すことが先決だ」

伊達と照井もドライバーを用いて変身を行う。

「変身」

「変…身!」

## ACCEL

伊達のバースドライバーにはセルメダルが、照井のアクセルドライバーにはアクセルメモリがセットされ、それぞれのドライバーを起動して仮面ライダーバース、仮面ライダーアクセルに変身した2人はオーズとWに続いてカシス、キードーパントへ戦闘を開始した。

## ARM FANG ELECTRIC

フィリップはタクティカルホーンを一回押してメモリのアームセイバーを生やし、照井はエンジンブレードに専用のエンジンメモリをセットして電気を帯びたブレードを用いながらキードーパントへ振るう。

が、キードーパントは右手で銃を照井に向けて狙撃し、左手の剣でフィリップのアームセイバーを受け止めては押し返した。

「ぐっ…なんて奴だ…！」

「手首が器用なのか、武器の使い方も上手い。興味深いね…」

映司はメダジャリバーを手に持ち、伊達はバースドライバーにセルメダルを投入してシヨベルアームを装備し、カシスに攻撃を仕掛けていた。

しかしカシスは地面を潜りながら回避しており、隙を見たところで映司と伊達の背中へ攻撃を与えていく。

「だあっ！くっ…なんでこいつ地面から…」

「多分、このグリードは地面を水中のように潜れるんじゃない…」

「よく分かってるんだなあ。でも攻撃を当てなきゃ意味ないけど、

プププッ」

カシスの翻弄に苦戦する2人だが、一樹は何か秘策があるかのように伊達に向かって叫びだす。

「伊達さん！バースドライバーにセルメダルを3枚セットしてみてください！」

「え？3枚…？」

伊達はその言葉どおりにセルメダルに3枚投入し、レバーを回した。すると…

## PLASMA ELEMENT

聞き覚えのない電子音と同時にシヨベルアームが電気を放出し始めた。初めてこんな機能を使った伊達さえも驚いて足のバランスを崩しながら尻餅をつく。

が、その拍子にシヨベルアームが地面に着いた瞬間だった。

「ぎゃあああああつ！？」

「…えっ！？」

シヨベルアームを帯びていた電流が地面を伝ってカシスを感じさせ、地面から出てきたのである。

「な、なんかよく分からないけど効いた…？」

「電流を地面に叩きつければ、こういった敵に当てることもできるように細工してるんですよ。実際にはバースに属性を付加する機能

エレメント

を搭載してるんです」

「そんなこともできるのか！？さっすが河ちゃん！」

グッジョブ！とサムズアップして礼を言った伊達は反撃ののろしを上げてシヨベルアームを振り回す。

「ほいっと！」

シヨベルアームを下から突き上げてアッパーカット。吹っ飛ばされたカシスを見て今だと伊達はセルメダル2枚をバーストライバーに投入してレバーを回す。

SELL BURST

電子音と同時にシヨベルアームがゼルバシュモードへ出力を上げ、立ち上がったカシスへ強烈なパンチングを決める。

「うおりゃあっ！！！」

直後に伊達を巻き込んで爆発が発生し、近くにいた映司は爆風を耐えもって様子を伺う。伊達が仕掛けたのなら通常は無事で入るだろうとは思っているのも束の間、爆炎からなんとカシスが転がり落ちてとると同時に大量のセルメダルが出てくる。

「メダル？それどころか、あのグリードはまだ生きてる…！？」

「待て映司、ヤミーの気配だ」

とたんにアंकが感じどった先…爆炎の中から伊達から飛び出てき



て、さらにその後ろから烏賊の姿をしたヤミーが10匹出てくるのであった。

「えっ！？さっきまでこんな奴いなかったはず……」

「あのグリードが事前に用意してやがったんだ。おそらく身代わりしたおかげで直撃を避けてたに違いない」

「じゃあすぐに助けなきゃ！アंक、ウナギのメダルを！」

「俺に指図は止せ、言われなくてもするつもりだったからな」

アंकは青いメダルを映司に渡し、映司はトラメダルをウナギメダルに取り換えてスキャンを行った。

タカ！ウナギ！バッタ！

虎のアームがチューブのようにとりついた鰻のアームに変わって”タカウバコンボ”にチェンジ。

すかさずウナギウィップで態勢を立て直している伊達をサポートしようとして、襲い来るイカヤミーに高圧電流を叩きつける。

「伊達さん、大丈夫ですか！？」

「ああ大丈夫だ。また助けられるなんてすまないね」

伊達はショベルアームの武装を解除してバースバスターを手に取り、セルメダルが詰められたメダルポッドを銃口にセットする。

SELL BURST

バスバスターにエネルギーがチャージを始めて標的をロックオン。その間に映司はウナギウィップでイカヤミーを全てからめとりながら動きを封じ込め、伊達は引き金を引いて大型のエネルギー弾をイカヤミーへ放つ。その直後にイカヤミーが影も形も無く一掃されてしまった。

「よし！残るはカジキの奴……って、あれ？」

伊達が気が付いたときにはカシスを見失っていた。イカヤミーを倒している間に逃げたのか、それとも気配を隠してどこかに隠れてるのか……。

と、思っていたその時だ。

「うおああっ!？」

突然翔太郎達の声が聞こえ、一斉に振り向いた。

[illegible]

映司達がカシスと交戦しているその数分前、Wとアクセルはキードーパントの器用さに苦戦をしていた。

「右手の銃と左手の剣：まるで海賊のように武器を扱い、戦いを制するその実力：このドーパントはかなり強いが、そんなに手におえ

ない相手でもない」

『それはどういふことなんだ、フィリップ？』

「戦いには隙を突きながら態勢を崩す。言うなれば油断させることができるれば突破口が見つかることだ。少し強引だが手っ取り早い方法だ」

「油断…なら、これなんてどうだ？」

照井は少し考えてからエンジンブレードに挿されたメモリを起動する。

## STEAM

次の瞬間に刃先から蒸気が噴射。キードーパントを覆い尽くしてやけどを負わせる。

「どわちちちちちっ！？け、剣から蒸気が出たあっ！？？」

「奴が油断した！翔太郎、今ここで決めよう！」

『よし、チャンスを逃すわけにはいかねえっ！！』

## FANG MAXIMUM - DRIVE

タクティカルホーンを3回押してマキシマムドライブを発動。右足に牙が吠え、同時にジャンプしながら回し蹴りするようにして牙をキードーパントへ叩きつけようとする。

「フアングストライザー！！」

息合わせて必殺技、『フアングストライザー』はキードーパントの体を切り裂いて爆発。断末魔を上げたキードーパントは人間に戻り、ガイアメモリがカランと地面に落ちる。

メモリブレイクに成功した…というのがWとアクセルのお決まりな事なのだが、直後に予想もできないことが目の前で起こってしまうのであった。

『！？メモリブレイクしないだと…！？』

「まさかこいつは、T2メモリか？」

照井は落ちているメモリを拾い上げて翔太郎とフィリップに言うのであった。

T2…別名、タイプ2ガイアメモリ。以前風都に襲撃を仕掛けたテロリスト、NEVERが用いていた新型のガイアメモリで、ドライバーを用いてマキシマムドライブが使用できるだけでなく、倒されたとしてもメモリブレイクされることは無いモノである。

しかしこのメモリは正太郎とフィリップが窮地に至っていた時に進化した仮面ライダーW—CJGX《サイクロンジョーカーゴールドエクストリーム》によるパワーで26のT2メモリを全てブレイクし、その内の使用者であったNEVERのリーダー、だいたい大道かつみ克己改め、仮面ライダーエターナルも命を絶つこととなっていた。

「けどあり得ることじゃない。何故こんなものがあるのか…それだけでなく、奴らがまだ生きていることも…」

『けどこれは紛れもないT2メモリだ。どちらにしても……照井、後ろ！！』

「何…！？」

翔太郎が照井の後ろから襲ってくる黒いマントをした者に気づいて

叫び、照井は不意を突かれたせいで捕まり、手に持っていたキーメモリを奪われてしまう。

「何だアイツは!？」

照井はブレードを構えながら黒マントの者を警戒する。黒マントの者はフードも被っているために顔は見えないが、その者の右手がフードを掴んで素顔を見せたその時になんとか違和感を感じたのだろうか、3人はその者をただ見るだけで何も動けることができなかった。

フードをとったその者の素顔は男で、歳は一樹と同じように若い。

「キーか…これなら手間も省けそうだな」

そんな男は奪い取ったキーメモリを見た後にスタッグフォンを取り出してキーメモリを差し込んだ。

KEY MAXIMUM - DRIVE

スタッグフォンはクワガタの姿へと変わって男の周りを飛び、移動を始める。まるで何を探すかのようにしているその光景に3人は何をするつもりかと思っていると、スタッグフォンは一樹の近くへ来た時に目をチカチカと光らせて男の元へと戻ってきた。

「…フンツ、もう1個あったか。T2メモリが」

男は一樹に近寄る。

「照井 竜、あの男は何かを企んでいるよ！」  
「すぐに止めるぞ！」

直ちに取り押さえようと男に近づくのだが…

「バァッ」

『うぉあぁっ！？』

カシスが地面から飛び出して3人を妨害。男はそんな彼らに気づかずに一樹に近寄るが、その前にスリッパを持つ亜樹子と、バースバスターを持った後藤の2人が立ちふさがる。

「…そこをどけ」

「誰がそんなこと聞くんかーっ！！」

「それ以上近づくな、威嚇だけでは済ませない…」

亜樹子が怒鳴り、後藤が男を狙う。

しかし男は平然としながらもマントを放り投げ、腰からあるモノを取り出した。

しのような赤い形をしたアイテム…それに最初に気づいたのは亜樹子だった。

「あれって…ロストドライバー！？」

ロストドライバー。それはWとは違って『欠けた』を意味にした変身ベルト。

男はロストドライバーを腰に当てると、一樹へ警告するようにして喋り出す。

「お前、持っているのだろ。T2メモリを」

「……………」

その答えに一樹は黙ったまま。逆に亜樹子は一樹へ顔を振り向く。

「それ、どういことなの！？なんでそんなメモリ持ってるの！？」

「……………」

それでも彼は黙ったまま。だが、彼は前へ進みだした。

亜樹子と後藤の間を通り、2人の前へと出た直後にあるモノを取り出す。

それは…

J O K E R

## 第23話「Oの再会／裏世界とカジキと鍵の記憶」（後書き）

お久しぶり、作者です。

ついに出たよ！本作のキーキャラクター！

ということとで今回このキャラクターの紹介です！ネタバレ帽子もしてますが…

名前：河城 かわしろ 一樹 いつき

年齢：????

備考：元オーズに変身していたもので、幻想郷出身の者。特徴である相撲の強さに自信があるだけではなく、非現実的な開発技術を持つており、自らの修行で現実世界へとやってくる。

2年も経つ間でいろいろな発明をしていたらしく、今回ではガイアメモリや、ドライバーを開発。そして現在は鴻上フアウンデーションでライドベンダー隊第2小隊長として所属している。

とはいえこの他に謎がつつまれており、リートの因縁のほかに実は兄であるとの秘密が…。

名前：カシス

備考：幻想郷で封印されていたグリードの1人。海魚系でカジキ、トビウオ、サメのコアメダルを持つ。

能天気な性格をしており、いつも笑っているおかしなやつなのだが、外見とは裏腹に油断も隙もならない厄介者。

メズールと同じようにヤミーは増殖系。地面を潜れたり、両腕からトビウオのミサイルを発射、さらにキックではオーズの鎧の内までにも傷を負わせるサメ肌の足を持っている。



とりあえず追加キャラクターの紹介ではこちらとなります。

そしてまた現れたこの男は何者なのか？そしてなぜ一樹がT2メモリを持つのか？次回はいいよ、Wとオーズが幻想郷へ向かいます！

そしてありがとう仮面ライダー！

40周年、おめでとう！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8265m/>

---

天と星の英雄・東方仮面録

2011年10月9日18時06分発行